月刊ナイトバグ　お陰様で一周年大感謝型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年
5月号
ついに迎えた創刊一周年！
夢のよう…はっ、夢か！
読切り作品
SS　:夢宮/くろと/社　蛍夜/西遊/悠奈/
草加あおい/mimidori/Jade.
漫画:イリイチ/ぼこ/キッカ/くらげん/斑/
Step/preudenano/羅外
連載作品
SS　:如月翔/壁々/夏樹　真
漫画:HOUSE/ひどぅん/怒羅悪/

東方Project リグル・ナイトバグ
オンリー同人誌即売会
東方夜蟲祭
ひぇぇ
2010年4月22日（木）
50SP募集
主催　東方夜蟲祭実行委員会
ター6階展示場
…とゆう夢を見たのさ
イラスト：東（海亀）

月刊ナイトバグ　2010年5月号

目次 (3p)

Cover design　小崎

Nightbug

Wriggle

『 少女読書中… 』　黒ストスキー

月刊ナイトバグ創刊一周年ということで初心に帰った絵を描こうと思ったら、なんのことはない、いつもの自分の絵でした

『 もてもてりぐるん 』　歩瀬紅子

一周年と聞いていてもたってもいられませんでした。おめでとうございます！

『 無題 』　ADDA

今月もかわいいりぐるん。で、１ページ食べました。

『 インセクトドア 』　残虐非道の貴公子

蛍の妖怪とインセクトドア。わが愛車とのコラボです。ニコニコ動画でも同じようなネタやってたり・・・（絵は描き下し）

地位向上を目指して －青と炎－

著者：如月翔

さすが妖怪の賢者と言われるだけはある。

彼女のおかげで仲間の為に出来ることが判った。

今回私がするべきことは、人里で頼りにされている人からの信頼を得、お互いが納得する条件を提案して認めさせるの二つだ。

蟲を操るのは『虫の知らせサービス』で既に見せたから問題はない、疑問に思われることはまずないだろう。

後者は紅魔館でやったことを繰り返せばいい、問題は前者だ人里で頼りにされている人は誰なのだろうか？

・・・誰だろう？

「よく考えてと言われてもなあ」

人里の人間に詳しくない私からしてみたら、考えてもあまり意味が無いような気がする、誰かに聞いた方が手っ取り早いだろう。

それにしてもこの中は変だ、上下左右に伸びていてまるで空を歩いているような錯覚を覚える。

それに明るくも無ければ暗くも無く、中途半端にただ薄暗い。今更だけど真っ直ぐで良かったのかな？

そんな不安を抱いていると正面が少しずつ明るくなってきた、どうやらもうすぐ出口のようだ。

「はぁ、手伝ってと言われても何処にいるか判らなかったらどうしようもないよね」

「眩しい……」

今まで薄暗かったから、外に出た途端陽の光が目に注ぎこまれる。

目を覆いながら思わず率直な感想を呟いてしまった。

「……丁度良い所に来たね嬢ちゃん、リグル・ナイトバグだったよね？」

「えっ……そうですけど、何か？」

急に名前を呼ばれた事と人が居ることに驚く。

妖怪に対して嬢ちゃんなんて言う人間は私は一人しか知らないけど。

「良かった、頼まれて探してたんだちょっと着いて来てくれないか」

「いいですけど条件があります」

「条件……すぐに終わると思うけどないと駄目か？」

「いえ、私も人を探しているので」

「どんな人か教えてくれれば連れてくよ」

「里で信頼されてる人に用があるの」

「……本当丁度良い、着いて来て」

「おーい、見つけたよ」

「良かった見つかったか、ところで妹紅遅かったから何処まで行ったかと思ったぞ」
「ごめんごめん、何処にいるか判らなかったからちょっとね」
「それもそうだったな……すまない」
「ねぇ、ところで貴方が里で信頼されてる人でいいの？」
「私はまだまだが……信頼はされてるぞ、ってどうかして」
「その人に用があったから貴方がそうならいいや、貴方の用って何？」
「私からでいいのか、先ずはこの新聞を見てくれ」
「文々。新聞…？読めばいいの？」
「ああ、読んでくれ」

その新聞にはこう書かれていた。

殺虫剤を集める蟲の妖怪

先日香霖堂の店主、森近霖之助さん（人妖）からこんな話を耳にした。
少し信じがたいが、蟲の妖怪が殺虫剤を買いに来たと言うのだ。
殺虫剤と言うのはそもそも農作物を荒らし害虫と呼ばれる蟲に対して外の世界で作成され使用されている物である。
殺虫剤は蟲のように多種多様で、なおかつ効果範囲が広く速効性があるため恩恵を得ている方々も多いと思われる。
そんな殺虫剤を蟲の身でありながら集めているのはリグル・ナイトバグさん（妖怪）、本紙はどういった経緯で殺虫剤を集めるに至り、何を考えているのかを追った。
以前本紙が「蟲の知らせサービス」の取材を行った時にリグルさんは、蟲に効く強い殺虫剤に対し「気の長い話だけどもっと頑張らないと」という意気込みを聞かせてくれた。
集めた蟲に殺虫剤を使い、生き残った蟲を集めてまた殺虫剤を使うという行為を繰り返せば太古の呪いにあるような蠱毒と同じことが出来るかもしれない…。
あまり広めるのは気が進まないが、蠱毒について一応説明をしておきたいと思う。
蠱毒というのは元々、出口を塞いだ器に蟲を閉じ込め長い時間を用いて共食いさせ、最後に残った蟲を呪いの媒介もしくは直接毒とする呪術である。
しかし、人を呪わば穴二つという言葉があるようにそれなりの覚悟が必要であるし、幻想郷内で行った場合ただでは済まないだろう。
話を戻すが商人だとしても、蟲が殺虫剤を購入するのは疑問に思うのではないか？という質問に対しては。
「相手が誰であろうと商品が欲しいと望んでいるなら売らない理由にはならないよ」という商売に対する持論を述べた。
次に本紙は本人であるリグルさんに取材を申し込むことができた。
話を聞いてみたところ、「そんなことする訳ないじゃない、どれだけ犠牲が出るか」と殺虫剤を使い蟲を強くするのが目的ではなく。
あくまで蟲に使われないように集めたと語ってくれた。
既に何回か同じ説明をしているのか、少し疲れたような表情をしていたのが印象に残っている。
リグルさんと交流のあるミスティア・ローレライさん（夜雀）によると。
どうやら以前から蟲の地位向上に対し悩みを抱えており、たびたび話を橙さん（式神）やルーミアさん（妖怪）と話をしていたもよう。
殺虫剤の話が初めて出たのは□月で「話した次の日に買いに行くなんて思わなかった」と行動力に驚きの声をあげた。
蟲の地位向上はまだまだ続くもしかすると今後誰かの家を訪ね、殺虫剤を要求する姿が目撃されるかもしれないが、悪意は無さそうなので断ったりするのは止めた方がいいかもしれない。
（射命丸　文）
※蠱毒を行い、何が起ころうとも本紙は一切の責任をおいません。

記事にしにくいと言っていたのに、何時の間に作ったのだろうか。
しかも私や殺虫剤の写真まで一緒に載せて

ある。
「確認として聞きたいんだが…本当にするつもりはないんだよな？」
「これに書いてある通り無いよ、私はそんなことする為に集めてもないし」
「そうか、なら良かった。疑ってすまない」
私はそんな事をするように見られているのだろうか？
そんなつもりは全く無かったから少し悲しい。
「全く、だから心配し過ぎだって言ったでしょ？」
「だって…」
「天狗の言うことを本気にしてたらキリがないよ」
「そうだな、リグルすまなかった。」
「疑い晴れたならいいよ、それで私の用もいい？」
「あぁ、何でも言ってくれ」
「仲間に殺虫剤を使うのをやめてほしいのだけど」
「仲間というのは蟲のだよな？」
「そうだよ、私の大切な仲間を殺すのは止めて欲しいの」
もう一言言おうとしたが、妹紅と呼ばれた人が間に入る。
「こっちも殺したくて殺してる訳じゃないってのは判ってるんだよね？」
「それは判ってるわ、作物を食べるからでしょう」
既にそれは紅魔館に行った時に聞いた。
それを抑える事が出来る事は新聞に書いてあったし知ってる筈。
「それは交換条件という解釈でいいのか？」
「そうよ、貴方達は仲間を殺さない、その変わり私も仲間に食べさせない」
「…お嬢ちゃんが蟲に指示できるのは知ってるけど、それって何時まで我慢効くの？」
「何時まで…」
「いくらなんでも、ずっと食べさせないままにしたら死んでいくでしょ？」
「だから食べても良い場所だけ食べさせてもらうわ」
「…ちょっと待ってくれ、私達が食べても良いと言う場所と仲間の食べる場所が違ったらどうするんだ？」
「その通りだよ、お嬢ちゃんはそれを判ってるかい？」
全く考えて無かった、蛍の食べ物なら判るけどさすがに他の種族が食べる物は判らないから野菜や穀物としてでしか知らない。
確かに仲間が要求する箇所と、人間が応じる箇所が違ったら意味がない…。
「まあどの蟲が居るのかとかは後で聞きに行けばいいよな妹紅？」
「何で私に振るのさ、別にそれでもいいと思うけど」
「ここで作物に被害を出すのはカメムシとアブラムシでしょ？」
「そうなのか…？」
「いやだから何で私に振るのさ、妖怪退治ならともかく蟲には詳しくないよ」
「そうか、悪いリグル念の為確認してくるから少し待っててくれ」
「カメムシってあの緑色の小さな奴だよね？」
「アブラムシも緑だけど…」
「そうなのか、蟲は知らないから判らないや。ところで何を食べるんだそいつ等は？」
「うーん簡単に言うとカメムシは植物全体の液体を吸って、アブラムシは茎の液体を吸うみたい」
みたいと言うのは、私はカメムシでもアブラムシでもないからだ。
たまたま近くに居たから呼んで話を聞き、聞いたばかりの言葉を口に出す。
「全体ってことは、葉っぱとか落ちた実でもいいんだよね？茎は用意するのが大変そうだけどそっちは何とかなりそうだ」

「ただいま、カメムシとアブラムシで合ってるみたいだ。被害に合うのはほとんどが稲だが果実と野菜も少しあるらしい」
「おかえり、今何処を食べるのか聞いてたとこだよ。」
「今茎に居るって聞いて帰って来たとこだ」
「合ってるみたいだね、それで二人ともどうするの？茎なんて食べさせたらこっちの食料無くなるよ？」
「食べさせつつ収穫すれば何とかなるか？」
「多分大丈夫だと思うよ、実を食べる訳じゃないし。調節とかその辺は任せてよ、適当な所で天敵呼んで追い払うから」
「…中々思い切った事をするんだな」
「一部にとっては天敵でも、私にとっては全部が仲間だからね」

天敵を呼ぶと言っても何も全部食べさせて全滅させる訳ではない、追い払うのが目的だ。
いくら自分達の主食だと言っても、食欲を制御するのも容易に出来る。

「中々言うじゃないか、ならこれで話は終わりだね」
「いや待ってくれ、もう少し話がある」
「何？」
「双方の被害を少なくするのはいいが、連絡はどうすればいい？私はここから頻繁に出ることはないが、君の居る場所が判らないと困る」
「私は夜ならミスティアの屋台に居るよ」
「あの屋台か、判った何か合ったら寄らせてもらうよ」
「もし私が居なくてもミスティアに言ってくれれば近いうちに来るから」
「ありがとう」

人里にて人と蟲の共存始まる

先日本紙にてリグル・ナイトバグさん（妖怪）が殺虫剤を集めているとお伝えした。
蟲に使われないよう集めていたが、○月×日に人里の上白沢慧音さん（ワーハクタク）と協力関係を結ぶ事が決まった。
協力関係といっても異変を起こすという訳ではない、この協力関係の目的は人と蟲を共存させることだ。
人には人の生活があり、蟲には蟲の生活がある。勿論一言で生活と言っても種族が違う為内容も異なるが。
人と蟲の関係は密接である、人は田畑を耕し、種をまき、水をやり食料を作る。
この過程には蟲が大きく携わっており、植物を食い荒らし害虫と呼ばれる物から害虫を食べることから益虫を呼ばれる物まで数多くの種類がある。
今回の関係を結ぶことにより「こうすれば生きていく上で、必要だと思われるでしょう？役に立つし、地位も向上して一石二鳥ね」とリグルさんは嬉しそうに語り。
「以前から蟲による農作物の被害をどうしようかと話し合いを行っていたが、解決出来そうでよかった」と慧音さんは応えた。
今後この共存により、人と蟲の間にどのような変化をもたらすのか大変興味のある話である。
（射命丸　文）

「これでいいですかね編集長」
「ええ構わないわよ、でも不満そうね」
「別に不満じゃないですよ、ただ記者からすれば盛り上がりに欠けると思っただけです」
「山あり谷ありの話ばかりじゃ退屈でしょう？見晴らしの良い平坦な道を歩き続けるのもいいものよ」
「そういうものですかね？」
「そういうものよ、それにしても」
「どうかしましたか？」
「若いって良いわね、羨ましいわ」
「…世代交代にはまだ早いと思いますけど」
「私に敵わないなんて思ってる間はするつもりはないわ」
「ならどうしてです？」
「他人の意見を疑いもせず素直に聞いて、ヒントを元に自分で考えて動くなんて忘れてし

まったわ」
「何となく判りますが、それほど気にすることではないと思いますよ」
「気にしてるつもりは無かったのだけど？」
「…相変わらず訳の判らない人ですね」
「お褒めに預かり光栄ですわ、でもそれと前回の蠱毒は別少しいいかしら？」
「少しで済む気が全くしませんが甘んじて受けたいと思います」

——天狗の悲鳴が妖怪の山に響いた。

（終）

〈作者コメント〉
　去年の10月号から合計8回、毎回どうすれば自分の思い描く幻想郷を表現できるかと悩みつつも今回最終回を書きあげることができました。小崎さんや読んでくださった方々、そして何度か弱音を吐いたけど温かい言葉をくれたリグルスレ住人に感謝を本当に有難うございました。

ずっと一緒に～　±０

著者：壁々

「…リグルはうまくやるかね」

「やるわよ。私が昨日、あの子が寝てる間に色々吹き込んだからね。かわし方、受け方、時間の稼ぎ方…少し私の妖力も分けてあげたし。ただじゃやられないようにはなってるはず。」

「へぇ…ずいぶん肩入れしてやるんだね。」

「…ふふ、ああいう悩める妖怪を見るのは楽しいのよ。若さを感じさせてくれるからね。それより貴女。ちゃんとやって頂戴ね？」

「ああはいはい。ちゃんとやってるよ、今」

日が沈んだ。新月の夜は、日が落ちてしまえば、夜の闇に残るのは星の光と里のあかり。

（…疲れるのよね、夜の弾幕は…）

リグルとの戦闘が開始されてからまだ5分もたっていない。しかし、霊夢自身はすでに焦りと苛立ちを覚えていた。

（…受けの姿勢…時間稼ぎか…）

戦闘開始からリグルの展開する弾幕は一貫して防御よりであった。霊夢自身に到達する弾はわずかで、到底相手を打ち負かすために出している弾幕とは思えない。反面、それに乗じて霊夢は攻撃を仕掛けるものの、リグル自身の周りには常に弾の壁があり、相殺される形となっている。

（…まぁ、いいわ。防御がいつまでも続くわけがない…一気に力で削りに行く！）

『無想妙珠連』！」

霊夢の手から放たれるいくつもの霊珠が宙に停滞、少しの間をおいてリグルへと殺到する。そのことごとくをリグルはかわし、防壁でガードする。

（まぁ、初撃は…ね！）

その間に霊夢は一気に距離を詰めて再度霊珠を展開。最初と違うのは、停滞する弾がすでにリグルの後方に位置しているということ。すなわち、全方位からの攻撃—。

「蠢『ナイトバグストーム』！」

その事態にもリグルは冷静にスペルを発動。自身の周りに蟲の嵐を巻き起こし全ての霊珠を撃ち落とす。

（…やるわね、それにしても—）

余波をさばきながら、霊夢は距離を取り直す。

（リグルっぽくない…）

弾をかわす、受けるの判断が明確すぎる。ほとんどの弾を受ける、と決めているならわかるが、回避動作もしっかりと行っているのだ。その回避動作も無駄なく、相手に隙を見せないようにしているのがわかる。これまでのリグルは上級妖怪並みの戦闘運びをしていると言っても過言ではない。

（何を入れ知恵されたのか…というか…誰が？）

予想を超える苦戦に、霊夢は開始当初とは違う焦りを覚えていた。

一方、慧音はますます強くなる鳥目の効果に手を焼いていた。ミスティアの弾幕は低速、かつ全方位への展開。うかつに動けばこっちが勝手にダメージを負ってしまう。もし、純粋にミスティアが自分を仕留めようとしているのなら、まだ手の打ちようはある。それに伴い発生する殺気、妖力を手掛かりに位置が特定できるからだ。しかし、今回のミスティアの目的は明らかに時間稼ぎ。位置を気取られず、じわじわと時間と体力を削るだけが目的なだけに、さっきから、決定的な位置を知らせるような行為を全くしない。

（鳥目をどう解除するか…一番手っ取り早いのは、ミスティア自身への攻撃、撃墜。…だが、それが出来ないからこうしてただ手をこまねいているわけで……）

「…くそっ！！」

ひときわ大きく怒声を上げるとともに、防壁を再構築、遮二無二駈けだす。無意味と分かっていても、慧音の責任感からくる焦りが理性を上回った。

しかし

「ぐぁ！」

突如眼の前に現れる木。とっさにブレーキするも間に合わず、したたかに頭を打ってしまう。うずくまると同時に降り注ぐ使い魔。防壁に意識を可能な限り集中するが、叩き破られてしまう。

「－っ！」

防ぎきれない弾の直撃を受けて、木にもたれる格好となってしまう。森の中という防壁で消せない障害物の群れ。苦し紛れに、さっき弾が飛んできた方向に撃ち返すが全く手ごたえはない。ペースは完全にミスティアの手中―。このまま、何も出来ぬまま、この闇の中で足止めを食うというのか―

（………待てよ）

絶望によって完全にさめきった頭。そこに一筋の光明が見える。

（…闇…ではない…）

ミスティアの能力は『鳥目』。視界を闇に包む能力。だが、その能力は同じく『闇』を操るルーミアとは根本的に別の能力である。ルーミアの能力はどれだけの光があろうとも、その光を完全に閉ざして、自身の視界すら無くす闇を形成するものだ。しかし、ミスティアの能力は。

（木が『視えた』…そうだ、そもそも鳥目とは…）

光明は今、はっきりと慧音の中で道と成った。

（…らちが明かないわね、誰が援護してても関係ないしね！）

霊夢はそう判断するや、相手への接近ルートを模索。無想妙珠連をあれだけ完全に止めてくるとなると、おそらく無想封印では決着はつくまい。決めるなら、鬼神玉を上からか、鬼縛陣で下からか。

（下のほうが道がある！）

結論を出すと同時に霊夢は行動を開始。身をかがめて一気に降下し、そのまま接近を試みる。

それと見るやリグルはとっさに使い魔をばらまく。使い魔が一気に弾をばらまき、壁を形成、道を遮断する。

「甘いわね！」

しかし、そんな弾幕密度では霊夢は止まらない。針と札で道を強引にこじ開けて一直線にリグルへと向かう。

「－『妖蛾の抱擁』！」

止めるのを不可能と知ったか、リグルはスペルカードを発動。妖力の展開と共に、リグルの後ろに巨大な蝶のような羽が形成される。それとともにゆっくりと放たれる細かな大量の弾。

（…鱗粉を模した弾を撒くスペル？確かに火力も密度も高いけど―）

迎え撃つように撒かれた弾を避けるようにさらに下へ潜り込む。リグルの真下へついてしまえば―その弾速では弾は霊夢に到達できない。

（ここだ！）「神技『八方－

射程にとらえるや、霊夢はスペルを発動せんとする。しかし、霊夢の感覚は頭上から高速で接近する妖力を感知。とっさに上を見て驚愕する。

リグルが真上から飛びかかってきていた。今まで完全に受けの姿勢、明らかな時間稼ぎをしていたリグルが勝負とばかりに捨て身の特攻—霊夢の思考は瞬間的に停止した。
「く!」
とっさに身をよじってリグルのつま先をかわす。しかし、次の瞬間に霊夢は自分の犯したミスに気付いた。
真上からの急襲の時、リグルの後ろの羽は限界まで後ろに引き絞られ、空気の抵抗を受けないようにしていた。視界から外れることにより、瞬間的に意識からも外れたもの。大量の妖力によって編まれた大質量の羽が、霊夢に向かって振りおろされた。

＊＊＊

「ミスティア!悪いが、お前の足止めに付き合うのもここまでだ!」
そう言い放ち慧音は妖力を展開。見る間に慧音の手元にはまばゆい光球が形成される。
「鳥目など—暗くなければそもそも発症しない!
我に害なす敵を、光の剣で刺し照らせ!光符『アマテラス』!」
宣言とともに撃ち放った光の球は中空へ止まると全方位へレーザーの照射を開始。夜の帳が降りた森に強い光を降り注がせる。
鳥目は『暗い中で視界が極端に狭まる』ものである。
昼のごとき明るさで周りを照らされた慧音。狙い通り、完全に視界が復活している。まばゆさに目を細めながらもミスティアの位置を確認。とまどうミスティアに隙を認め、周りの景色から自身の位置をも把握する。
(…里は…)
方角を確認、一直線に里に向かおうとしてリグルが起こしている『異変』の本質に気付いた。
(……馬鹿…な…)

＊＊＊

「ぐぅ…!」
何とか直撃は回避出来たものの、強烈な衝撃が身に走る。叩きつけられた霊夢はとっさに結界を精製。墜落をなんとか免れる形となる。
(ダメージが大きい…くそ、初見とはいえ油断したわね…)
リグルが追って目線の高さへ降りて来る。頭を振って気を取り直す。
(…しかし…強いわね。)
異変を起こした妖怪たちの理由は様々であるが、彼女たちにほとんどの場合共通する部分がある。明確で、強い意志を持って異変を起こしているところである。今のリグルもまた、例外ではない。
「…侮ってたわ」
霊夢がそうつぶやくと同時に、湖畔に強い光が突如出現した。
「!?」
二人とも同時にそれに気をとられ、リグルは振り向き、霊夢は眼を見開く。
しかし、霊夢の眼は光に向いていなかった。その先に見えるべきもの、そして今見えているもの—

＊＊＊

日が沈むと同時に、チルノとルーミアは動き出していた。チルノとルーミアはともに、人里の中心へ降り立ち、蝶の子を地面に横たえる。そこに、ルーミアは薬瓶を取り出し、中の液体を全て、その子にかけた。
「…じゃあね」
「また会えるといいね!」
手を振る二人に、蝶の子は少しだけ羽を動かした。その姿を見届けて、二人は飛び立った。
「…いくよ!」
「いつでも!」
人里の上空。ルーミアはもう一つの薬瓶を取り出し、一気に飲み干す。そして、妖力を最大に展開。
「この里にいる人間全てに闇夜の恐怖を—そして、闇の眠りを!」
一声、唱えるとルーミアの周りの闇球が一気に範囲を増す。それは、どんどん広がっていき—

＊＊＊

慧音が見たもの、霊夢が見たもの、そして、ルーミアが行ったもの。

それは、人里を覆う巨大な闇の空間。町明かりもなく、ただただ黒に埋められた人里のあるべき場所。その衝撃は二人に等しく訪れ、二人に同じ判断を与えた。

一直線に人里のほうへ飛び出す慧音。鳥目が発動しようもない今、弾をかわしながら上空へ向かうこともたやすい。上空に出さえすれば、里の方角へ一気に進むことも可能。
「一鳥符『ヒューマンゲージダブル』！」
ミスティアもそこは承知、足止めのための弾圧を増す。上空に飛ばれてしまえば、自分の火力で慧音を必要な時間止めきることは出来ない。なんとか木があるうちに止めきらなければ、逃げ切られてしまう。
「国符『三種の神器・剣』！」
ミスティアの「人籠」も慧音は意に介さない。三種の神器のうちの剣を発動。眼前の弾の壁を切り払い、強引に籠からの突破を試みる。
しかし、ミスティアのスペル発動の真意はただ慧音を足止めすることだけにない。弾を張りながら飛んでいく鳥の使い魔はそのまま一直線にアマテラスの光源へ。体当たりでそれを破壊する。
またしても闇に閉ざされる視界。しかし、慧音はもう迷わない。明るいうちに見た里の方角へ一直線。
「『イルスタードダイブ』！」
ミスティアも必死に弾を撃つが体勢が整っている慧音相手にはわずかな足止めにしかならない。
「…っ『真夜中のコーラスマスター』！！」
それでもわずかな足止めの時間を利用して、慧音の前に立ちはだかり、ミスティアは最後の手段を繰り出した。相手を鳥目にするとともに、圧倒的な弾幕密度で敵の動きを阻害する、ミスティアの最強スペル。
しかし
「…終わりだミスティア」
静かに告げた慧音は剣を掲げて二つのスペルを宣言する。
「始符『エフェラリティ１３７』、葵符『水戸の光圀』！」
最初に放ったエフェラリティはミスティアの弾幕の中に入り込むや、中で炸裂。一気にミスティアの弾幕の密度を下げる。
そして、後に放たれた使い魔があたりを照らし、アマテラスほどでないにしろ、鳥目を軽減。進むべき方向が決まっているのだから、そこまでの光量はいらない。ミスティアに向けて一直線に距離を詰める。
「〜〜〜っ！！」
あわてて第二派を展開しようとしたミスティアに、慧音は一声
「『射程距離』だ…ミスティア・ローレライをこの場に『いなかったことに』！」
瞬間、ミスティアは吸い込まれるように忽然と消えた。

霊夢が飛ぶ瞬間にリグルは再び霊夢に集中。あの闇の空間が今回の異変の要。霊夢はそう直感したし、事実そうである。リグルとしても、ここまではうまくいっていることを確信。あとは、どこまで足止めするかである。
「どきなさい！夢戦『幻想之月』！！」
霊夢が一声、スペル発動すれば、たちまち周りに陰陽玉がいくつも現れ、射撃を開始。敵へ向けて、自動で弾を放ち続ける射撃オプションである。
よければこのまま霊夢は一直線に里へ。かといって受けきることはできない—
「『妖蝶の抱擁』解除！」
リグルはとっさに後ろの羽を前に回し、壁を形成する。
「関係、ない！」
霊夢は壁に向けて全く速度を減ずることなく突進、針を何本かまとめて持ち、突きの姿勢をとる。刹那、拳には巨大な槍が形成された。
「『エクスターミネーション』」
射撃と重ねて、分厚い壁を一気に突き破る。
リグルは—
「はぁぁっ！」

「!!」
ちょうど上空、まさしく霊夢の直上に構え、とび蹴りを繰り出した。とっさに受けるも完全に威力は殺され、霊夢はその場に縫いとめられる。
リグルはそのまま着地と同時に霊夢に詰め寄り、体をねじって拳をふるう。
(…接近戦!?)
想定外の展開にも霊夢はいたって落ち付いて攻撃をさばく。
(…面倒な!)
接近戦に持ち込まれてしまっては、リグルを出し抜く方法がないからである。遠距離戦闘であれば、最悪の場合その場を大きく迂回することにより、人里への接近も不可能ではないが、その迂回する分の距離を稼げない距離で戦闘を行う羽目になった以上―
(倒すしかない…か!)
判断とともに、霊夢は瞬間的に霊力を放つ。ダメージを与えるには届かず、しかし、相手を吹き飛ばすには十分な攻撃、霊撃によりリグルとの距離をとる。
吹き飛ばされてもリグルは、地面に手をつき、すぐに体勢を立て直す。しかし、それも予想の範疇。こうなってしまえば―
『魔浄閃結』!」
この異変の最初に使ったスペルをあえて放つ。リグル自身はこのスペルを今日初めて見ている。だからこそ、このスペルで何が起こるか『うろ覚えに』知っている。地面を這う結界から、上に立ち昇る霊力の壁。それを嫌って上空に逃げるようなら、下をくぐって出しぬける。
(さて…どう出る?)
霊夢はそのまま結界を放った方向へ駆けだす。一方リグルは一瞬固まり―
「だあああああっ!」
一声あげるや、全力で霊夢に向かって突進を始めた。
(…なるほど、いい判断ね…)
リグルは霊夢と距離をあけれない。上に逃げないのはいい判断だ。さらに、結界が完全に発動する前に、くぐりきってしまう―そうするのも間違いではない判断。
結界が発動、壁が形成され、お互いがお互いの姿を一瞬見失う。
直後、リグルは壁を突き抜ける。リグル自身の狙い通り、結界は形成直後では十分な効果を発揮できておらず、突き抜けるのは容易だった。
だが
リグルが想定していた位置より、霊夢は二、三歩後ろにいた。突進をやめて、その場にとどまり、力を溜めて待ち構えていた。すでにスペル発動の準備は万端。霊夢から発せられる霊力が、それを物語っていた。一方的に攻撃される、最悪の位置関係。リグルはここで初めて、自身がミスを、それも致命的なミスを犯したことに気がついた。
(……しまった…!)
(うろ覚えだからこそ、避ける選択肢しかない…正解は、防御で受ける、だったのよ!)
リグルのとっさの防御と、霊夢のスペル発動は、ほぼ同時だった。
「宝具『陰陽鬼神玉』!」

「…今度こそ、だな」
「ミスティアをどうした―!」
人里の前。たちはだかるチルノの前に、ミスティアを撃破した慧音が現れる。
「…お前に説明しても無駄だ!そこをどけ、チルノ!」
「どくもんか!あたいはここを誰も通さない!」
(チルノは妖闇の展開をしてるルーミアを補佐…してほしいんだけど、万が一、慧音か霊夢かが来たら、可能な限りの足止めをして。最後の砦だから…頑張って!)
「……忠告はしたぞ」
「凍符『コールドディヴィニティー』!」
「終符『幻想天皇』!」

＊＊＊

「……嫌なものですね」
人里、稗田家。阿求は10分も前から包まれた闇の中で、誰に言うでもなくつぶやいた。
普段の仕事柄、阿求は妖怪と接することが多い。そのため、妖怪が起こすような異変に対

してもある程度の理解と覚悟はしていたつもりである。それでも、いざ巻き込まれると人間の無力さを思い知らされる。
「夜なのに眠れない…ですね、これでは…」
警戒心だけが高まり、何もすることができない。人間が異変に対して出来ることは警戒と我慢…
「……？？？…な…」
突如阿求を襲う意識の断絶。瞼が重く、体がだるい。すぐにでも横になりたい。これは—
「…いけない…こんな…状態……で……ね…る…わ…け………に…………」
急に、そして確実に迫ってきた眠気に対処できず、体が床に崩れ落ちる。そのまま阿求の意識は途絶えた。
人里は、静寂が支配しつつあった。

＊＊＊

「うううっぐうううう！」
とっさのガードは間に合った。しかし、鬼神玉の大質量を受けきるにはあまりに拙い防御壁。
徐々に押しつぶされていく。
（ここで…終わる…？）
あの子は信じてくれた。
あの子は信じてくれてる。
私と一緒に—ずっと一緒に！
「うううううううあああああああああああああああ！！！」
気合、根性、意志の強さ—今のリグルに満ち溢れる、霊夢に唯一勝ちうる場所。それが今、最大の力を発揮した。破れるか破れないかの瀬戸際の防御は、ついに鬼神玉の効力がなくなるまで、保たれた。
「………はぁっ…はぁっ…」
肩で息をしながら、霊夢を見据える。霊夢は放った位置から動いていなかった。
「……すごいわね。」
つぶやくような、それでいてはっきりと通る霊夢の声。
「…？」
「はっきり言って舐めてた。あんたの意志、あんたの力…認めるわ。」
「……」
「…だから」
突如、霊夢から放たれるおびただしい霊力。一瞬背筋が凍るような感覚すら覚える。
「全力であんたを潰す。」
一言一言が刺すように響く。それでも、もうリグルは怯まない。怯えない。
「私の最後のスペル。1分間の間に8発…私があんたに入れれなかったら、私の負けでいい。もし、1分以内に8発入れられたら、あんたは無事じゃ済まない。私はそのまま人里へ向かうわ。」
「……いいよ。それで。」
（一分…それじゃ足りない…あの子の為の時間が足りない！何としてでも避けきる！）
『無想天生』
異変の結末を決める、カウントダウンが始まった。
（続く）

〈作者コメント〉
　ガチバトル開始。いよいよ大詰め、来月ですべての謎が解ける…予定です。

幻想光

著者：夢宮

十人十色という言葉がある。字の通り人が十人いれば、それだけの色があるということだ。たった十人程度でも様々な色を見せてくれるのだから、それが村単位にもなれば多くの個性が集っているだろう。
そして今回、永遠亭にて催されたのは、学者という色を持った人々を心底唸らせるようなイベントだった。
『月都万象展』と書かれた看板の下に、様々な品が置かれている。厳重に守られ見ることしか許されていない物から、手に取って眺めてもよいものまで多種多様。その周りで、目の色を変えながら話し込んでいる人間が多数。
「この原理が知りたいな」
「うぬぬ、これはまだどうにかなりそうだが……こちらの塊は何に使うのかさっぱりわからん」
「しかし、これが月の技術だと言うのか」
「もしかしたら、これ以上のものも……」
「なんとも、研究意欲をそそられますな」
この時を逃すまいと、視線は常に月の品に向けられたまま、彼らは会話をしていた。
文化的な、あるいは魔術的な神秘を前に、実に楽しそうに目を輝かせている。
最初は特に興味も無さそうだった人たちも、やはり珍しい品々を前にするとその視線を奪われてしまうようだった。
学者以外にも大勢の人々が品物を眺めている。
「中々盛況じゃない」
そんな様子を見ながら満足そうに呟く女性。立派な着物に艶やかな黒い髪、一目見るだけで魂を奪われそうな美貌で、かつて本当に男たちを虜にした罪深き存在。
永遠亭の主、蓬莱山輝夜だった。
「おお、蓬莱山さん。お疲れ様です」
その姿を目にとめた村長がしわがれた声で一言挨拶をする。
「いえいえ、こちらこそ。こんな竹林の奥まで来ていただいて」
それに対して輝夜もまた柔らかな口調で返した。
「いやあ、最近目新しいものも減ってきましてねえ。こういう催しなら大歓迎ですよ」
それからしばらくの間、のんびりとした会話が続いた。特に、里に薬を売りに来てくれていることへの感謝の言葉が中心だった。
その会話を打ち切ったのは、幼い声だった。
「長様、長様。退屈です」
「暇ー」
村長の回りを囲む四、五人の子供達。その表情は、不満を表していた。
「おう、どうした？　月の品はたくさんあるだろ？」
「もう全部見ちゃったよー」
確かにここに展示されているのは、子供よりも大人の目を惹くものが多い。
文化的に貴重な品々も、子供たちにとって

はただ目新しいだけ。それを半日も眺めていれば、飽きも来るだろう。
「んー、どうすっかなあ」
　そう悩む村長を見て輝夜は微笑みを漏らし、それから一つ提案をした。
「それなら、私がお預かりしましょうか？」

「ねえねえ、何して遊ぶの？」
「お話がいい！」
「ぼくはかくれんぼがいいなあ」
　口々に要求を述べる子供たちに、輝夜は微笑みながら応えた。
「ふふっ。いいものを見せてあげるから、ついてらっしゃい」
　そう言ってゆっくり歩き出す。その姿はどうしようもなく様になっており、まるで一つの芸術のようであった。
「なになに～」
「何があるの？」
　けれど子供たちの興味は、やはり遊ぶことにあるのだった。
「慌てないの」
　そう言って廊下を歩いて行く。永いような短いような、そんな不思議な廊下を抜けた先は、永遠亭の門の近くだった。
「姫様？」
　疑問の視線を向けてきた兎達を、柔らかく右手で制しながらそのまま歩いて行く。
　やがて永遠亭の外、竹林の中に足を踏み入れていった。

　歩き、歩き、歩く。
　もうじき夕方、つまりまだ昼間のはずだが、竹林の奥深くまで行けば流石に薄暗かった。
　夜の闇とは違う、どこか不気味な昼の影。子供たちの口数も減り、皆身体を寄せ合って輝夜の着物の裾を掴んでいた。
「ね、ねえ。もう戻ろうよぉ」
「暗いよ」
　不安感に襲われた子供たちがそう言うが、輝夜はやはり微笑むのだった。
「大丈夫よ。まだ陽は沈んでないもの」
　けれど陽の光が届かないような場所では、それが本当なのかどうかはわからない。
　子供達は、ずっと歩いているような錯覚を覚えるのだ。
「そんなに怖がらないで。これから凄く綺麗なものを見せてあげるから」
　そんな恐怖にも似た不安を感じ取った輝夜がフォローを入れる。月都万象展もそうだが、楽しんでもらうための催しなのだ。怖がらせてしまうのは本意ではない。
「綺麗なの？」
「きっと月の宝物だよ」
　膨らむ不安の中に浮かんだ期待を壊したくないので、輝夜は何も言わなかった。
　月の世界の景色や宝物を綺麗だと思うか、味気ないと思うかは人それぞれだ。そして輝夜自身は後者だった。
　質が悪いわけではない。しかし輝夜にとって本当に美しいと思えるものは、皮肉なことに穢れた地球へと流されてから見つけたものだった。

　また歩き、歩き、歩く。
　実際には大した距離じゃないけれど、子供たちの限界は近付きつつあった。
　声に涙が混じり始めている。
「グスッ……」
　時折鼻をすする音も聞こえてきた。
　精神、肉体共に疲労はピークに達そうとしている。ある種の極限状態だった。
　そしてそれは、幻想感を際立たせる。消える寸前の蝋燭のように、ある窮まった瞬間にのみ理解できる美しさがある。
「……着いたわ」
　その一言で、子供達は顔を上げる。それまで俯いていて見えなかった景色が、その目に入ってくる。
　暗い暗い竹林の奥で、小さな光が舞っていた。
「…………」
　それまで聞こえていた鼻をすする音も、泣きそうなのをこらえるような息遣いも止まってしまう。ただただ、その光に見とれていた。
　点滅しながら辺りを飛び回る。そこに規則性も無ければ、誰かに命じられたわけでもない。あるがままの姿を見せつけていた。
「わぁ……」

誰かが歓声のようなため息をついた。誰が吐いたのかはわからない。もしかしたら、ここに案内してきた輝夜自身のものだったのかもしれない。
　蛍という、幻想の郷において尚、幻想的な存在がそこにいた。
「すごい……」
　茫然と見とれている間にも、光は数を増やしていく。
「うふふ、あはは――」
　そして、どこからともなく笑い声が聞こえてきた。
　暗い竹林の中でそんな声が聞こえれば、恐怖に身を竦むだろう。しかし、なぜか今は誰もその声に恐れを感じなかった。
　この光景に胸を弾ませる様な笑い声は、子供たちの表情に明るさを取り戻させていった。
「すごくきれい」
「うん」
「それに、楽しそう」
　その声を聴きながら、輝夜は己が過去を思い返していた。
　月を追放され、降り立った地球。この星は、月人の彼女にはどうしようもなく穢れていて、同時にとても新鮮だった。
　永遠を操る力はある。けれどこの蛍の光というのは、まったく同じにはならないのだ。
「あはは、あははっ――」
　声が少し大きくなる。これは事前に打ち合わせておいた合図だった。
「さあ皆、そろそろ戻りましょう」
　輝夜の言葉に子供達は反抗しなかった。目の前の光景に魅了されてしまっているから、肯くだけで精一杯だったのだ。
「ついてきて。逸れないようにね」
　そういって歩き出した彼女の後ろを、子供たちがついて行く。やがて十分離れた頃、輝夜と子供達がいた場所に妖怪が舞い降りた。
「なんかよくわかんないけど、あれでよかったのかなあ」
　マントと触覚が特徴的なその妖怪は少し不安そうに首を傾げてから、蛍の群れに向き直った。
「皆、ありがとうね」
　その声に応えるように、光が一斉に点滅した。
「それじゃあこの度は、本当にありがとうございました」
「こちらこそ、ええもん見せてもらいました」
　里や村の人々と、永遠亭側の者たちがお互いに頭を下げ合っている。
　もうすぐ日が暮れる。人間側の安全の為に、今日の催しはここまでだ。いずれは夜通し騒げるようにしたいが、夜は妖怪の時間なのだ。
「子供達は何かご迷惑をおかけしませんでしたか?」
　村長からの少し不安そうな声。輝夜はそれに笑顔で応えた。
「いいえ。皆とてもいい子ばかりでしたわ」
「そうですか。それはよかった」
　それからまたお互いに頭を下げ合って、案内人兼護衛の兎達と共に住むべき場所に帰って行った。
　しばらくして片付けに取りかかる頃に、輝夜は一人でふらりと歩き始めた。
「さあ、片づけをしましょう」
　兎達は不思議そうにしていたが、何かを察したらしい八意永琳の号令で片づけが開始された。
　そんな光景を横目に見つつ、永琳への感謝を心で思いながら輝夜は歩いて行く。いつ持ったのだろうか。その手には壺が一つ抱えられていた。
　しばらく歩いて、竹林の中へ行く。そこにはマントと触覚が特徴的な妖怪がいた。名をリグル・ナイトバグという、蛍の妖怪である。
「お待たせしちゃったかしら」
「ううん。そんなことないよ」
　首を振って否定しながらも、リグルの視線は輝夜の持つ壺に釘付けだった。
「それより、はやくはやく」
　期待を抑えきれないような声。それを受けて、苦笑しながら輝夜は壺の封を解いた。
「急がないの」
　壺の中身は水だった。
「うわぁ」

しかしただの水ではないのだろう。リグルの表情は歓喜に満たされていた。
「正直、水の善し悪しには詳しくないんだけど」
「ううん、これでいいよ」
少し不安げな輝夜の表情が、実に対照的だ。
「でも良いの？　竹林で遊んでただけなのに」
「良いのよ。ええ。それで良いの」
下心など何もない、そんな無邪気な表情が輝夜の胸を打つ。どこまでも幻想的な風景と合わせて、実に趣深い。
「また、お願いするかもしれないわ」
「うん。いいわよ」
笑顔で肯いて、そのまま壺を持って去っていく。
「こっちの、み～ずは、あ～まいぞ」
そんな歌が、竹林に響いていた。
蓬莱山輝夜は、その歌を聴きながら先の光景を思い出す。
あるいはもっと昔、初めて蛍を見た頃の光景を思い出していたのかもしれない。

（終）

〈作者コメント〉
主役敵役脇役ヒロイン、共通するのはリグル可愛いということ。今回は脇役の位置です。それでもリグルはとても可愛いと思う。

リグル・ナイトバグの日常

～洞窟にて、キスメと～

著者：夏樹　真

とあるお昼過ぎ。
森の中を駆け足で走る少女が一人。
緑色の髪の毛を風に切らせながら、背中につけているマントを揺らしいているその少女の髪の毛の間からは、二本の触覚がぴょんぴょんと跳ねるように揺れている。真っ白いブラウスと対になるような黒いふんわりとしたハーフパンツがその健康的な四肢を包んでいた。

　そんな彼女、リグル・ナイトバグは友人であるチルノ、ルーミア、ミスティアを探している最中であった。

　理由は単純で、リグルを含めた四人でかくれんぼをしていたからだった。リグルがシャンケンで負けて鬼をしており、散り散りに逃げたみんなを探しているわけなのだが。

「なんで、逃げる範囲が妖怪の山全域なんだよーーー！」

　チルノが逃げる際に指定した、逃亡者の逃げる範囲。

　それがまさか妖怪の山といわれる場所全域になるとは思いはしなかった。

　リグルが抗議の声をあげる前に他の三人はさっさと逃げ出してしまい、ひとり残されたリグルは言いようのない疲労感と遣る瀬無さに包まれることとなった。

　肩を落として途方にくれるリグルだったが、このままほっといて帰るわけにもいかない。

　妖怪の山は広いとはいえ、一部立ち入ってはならないとされている地域がある。そこは天狗達が社会を形成している場所であり、他者を寄せ付けない場所となっていた。

　流石にチルノ達がそこに近づくとは考えられない。仮に近づいたとしても、追い出されるだけだろう。

　そういう意味では探す範囲は割りと絞られる。

「あー、でもチルノだとその辺を気にせず行きそうだもんなぁ」

　ちょっと無鉄砲な友人の笑顔を思い出しながら、いやまさかと乾いた笑いで悪い考えを追い払う。

　嫌な予感を無視しようと勤めるように走るリグル。キョロキョロと左右を見回しながらみんなを探していたのだが、その時。

「あれ……こんなところに穴なんか開いてたっけ」

　草木の奥に見えた岩肌に、ポッカリと開いている大きな穴。

　それはどうやら洞窟の入り口らしく、リグルは恐る恐る近づいてみる。その中からはひんやりとした空気が流れ出していた。

「気味悪いけど、チルノだったらこんなところ好きそうだし入ってみようかな……」

　気の弱いところがあるリグルとしては、こんな薄暗いような洞窟の中へと入っていくのは本当は嫌だった。

　だが、氷の妖精であるチルノはこういったひんやりとした場所を好む傾向があった。もしも彼女がこの洞窟を見つけたとしたら、迷うことなく中へと入っていくだろう。そんな確信めいた予感。

　はぁ、という溜め息。

　それから自分の顔をパシンと軽く叩き、リグルは意を決したように足を洞窟の中へと向けることにした。

その洞窟は、不思議な場所だった。
入り口こそ人が一人通れるくらいだったものの、途中からは思った以上に広い通路となっていた。通路というよりは、空間といっても差し支えないかもしれない。
　薄暗く光を放つ洞窟内は、独特の空気で満たされていた。空気が淀んでいるとでも言うべきなのだろうか、そういった雰囲気にブルッと身震いしてしまう。それは例えるならば、侵入者を拒むようなドロリとした見えない液体が、意思を持って絡み付いてくるような不思議な空気。
　また奥からは何故か風が吹いており、羽織っているマントがそれを受けてバタバタとなびいていた。
　中に入って数分が経過しただろうか。リグルの頭の中では早くも帰りたいという思いが渦巻いていた。
「なんなの……気持ち悪いっていうか、不思議な感じ。やっぱり戻ろうかなぁ……」
　いくらチルノでも、こんな不気味なところでじっと隠れているということはないだろう。
　そう決めて、元来た道を戻ろうとしたとき。
「おやおや、お仲間がこんなところに何しに来たのかな?」
「うひゃあ!?」
　背後から突然響いた声。
　その声に驚いて背後を振り返る。つい先ほどまでリグルが歩いていた場所に、一人の少女が立っていた。
　赤みを帯びた茶色のワンピースに、黄色いボタンがついていた。ふんわりと広がるスカートに黄色い帯が巻きつくという不思議な格好をしていた。頭にリボンをつけており、髪の毛を上に上げポニーテールの形にしていた。
　突然背後に現れた人物に、リグルは思わず情けない声を出してしまう。
「あぁごめんよ、驚かせちゃったかな」
　気さくな笑顔で近づいてくるその少女。
　だが、突然背後に現れたその相手に気を許せるはずもなく。リグルは軽く身構えて、相手の出方を伺うことにする。
「そんなに硬くならなくても大丈夫。私の名前は黒谷ヤマメ。ここで地底への入り口を見回ったりしている変わり者な妖怪さ」
　そんな警戒するリグルを安心させるためなのか、ヤマメと名乗った少女は徐々に距離を近づけてくる。
　その様子から、あんまり悪い妖怪じゃないのかなと判断したリグルは警戒を緩め、緊張を解いた。はぁ、という溜め息が出ると共に、ガクリと肩を落とす。
「いきなり後ろから現れたからびっくりした……私はリグル・ナイトバグ。蛍の妖怪だよ」
　すぐそこまでやってきたヤマメに視線を合わせながら、リグルも自己紹介をする。
　こんな不気味な洞窟で友好的な妖怪にあえるとは思っていなかったので、僅かにではあるのだが下がりつつあったテンションがあがってきていた。単純な性格だなぁと自分で思うが、事実なので仕方ない。
「それで、リグルはなんでまたこんなところに来ちゃったのさ。迷って入ったとか?」
「うん、私の友人を探してるんだけど……青い感じの妖精とか入ってこなかったかな」
　首をかしげながら尋ねてきたヤマメに、ここに入ってきた理由を簡単に説明する。
　仲良しメンバーでかくれんぼをしていて、みんなを探していること。
　チルノという妖精が涼しいところを好むため、ここが怪しいんじゃないかということ。
　それで隠れているんじゃないかと思ってリグルが中に探しに来たこと。
　それらを説明した上で、ふむとヤマメは少し思案する仕草を見せる。チルノを見かけたのかどうかを考えてくれているのだろうと、リグルはヤマメが口を開くのを待つことにする。
　実際、ヤマメは全然違うことを考えていたのだが。その口元がニヤリと怪しく歪んだのを、リグルが気づくはずもなく。
「うーん、私は見てないなぁ。力になれないでごめんね」
「あ、ううんいいんだよ。もっと奥に行ったのかな……でもあんまり奥には行きたくないなぁ……」
　どうしようかと悩むリグルは不気味な洞窟

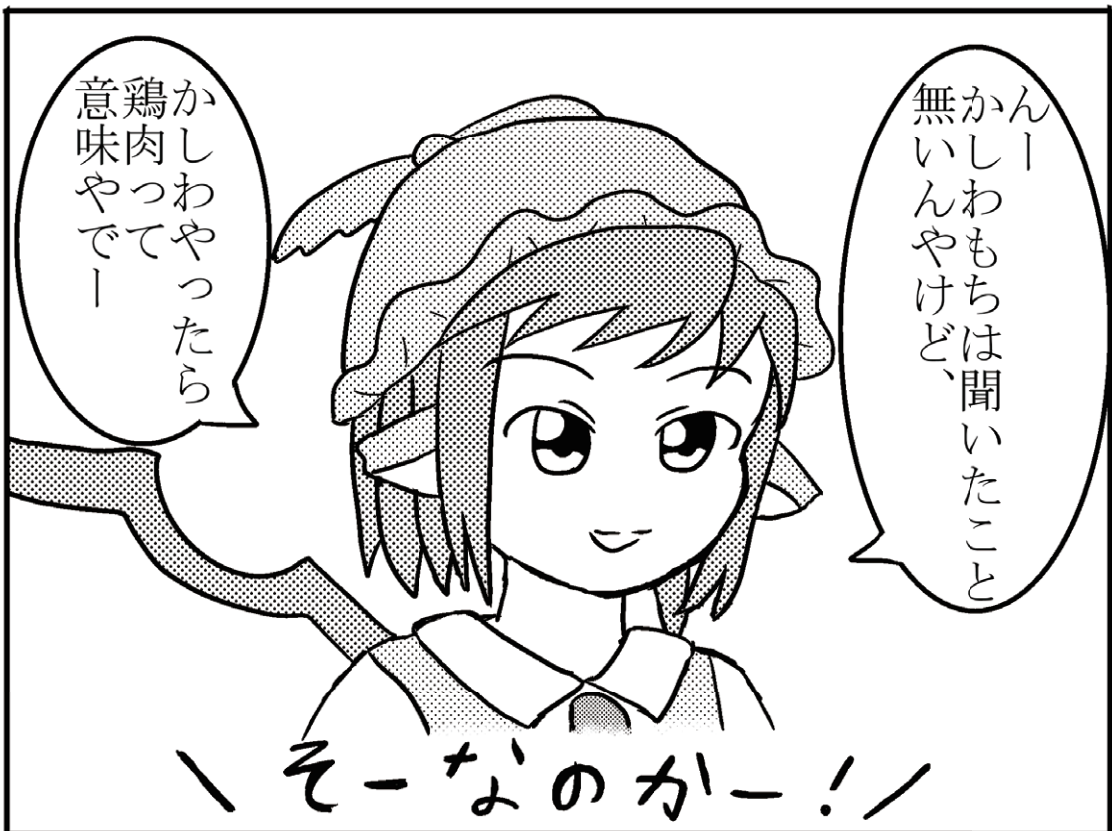
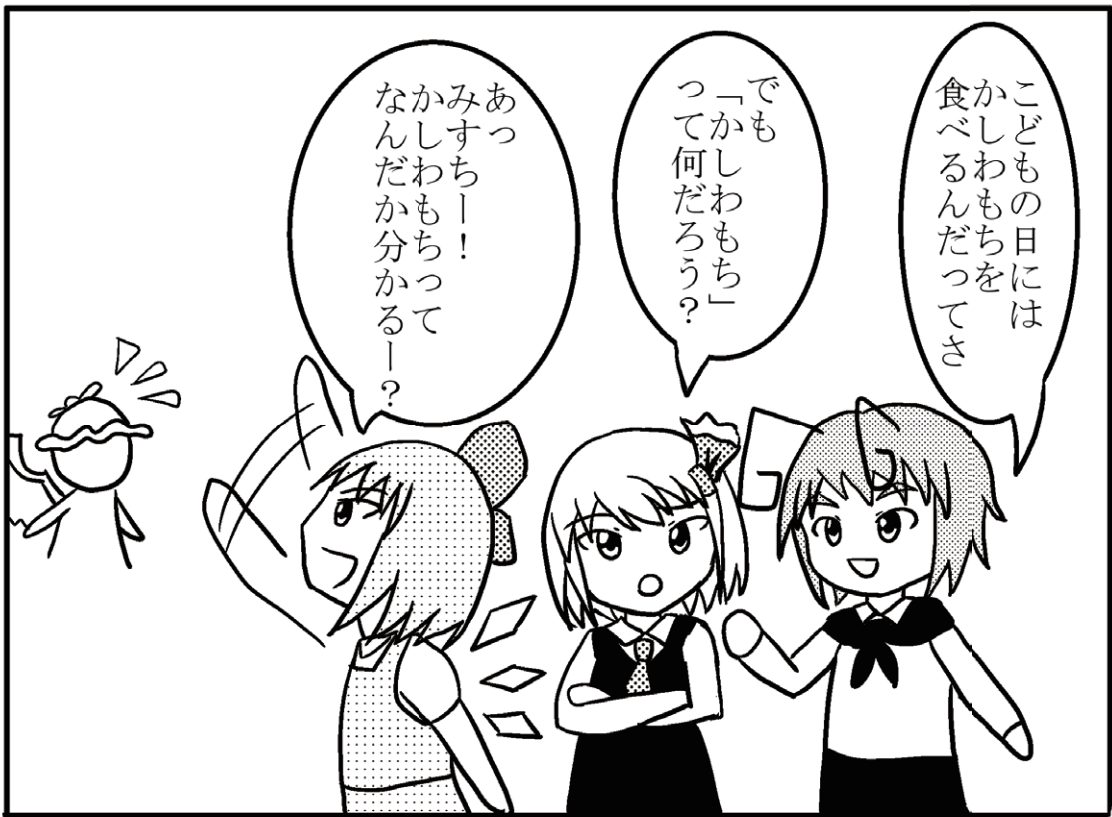
の奥を見つめる。
　洞窟自体が薄明るいとはいえ、その奥は真っ暗になっており何があるのか判断がつかなかった。チルノならばもっと奥までいくかもしれないという可能性を考えれば、奥まで行くべきかもしれない。だが、ヤマメが見かけていないというので、そもそもここには来ていない可能性もある。
　無防備にも悩みに集中してしまうリグルの背後に、そっとヤマメは近づく。
　そして、いきなり背後から抱きしめた。
　まるで、リグルの自由を奪うかのように。
「ひぇっ、な、何!?」
「リグルに、この奥に何があるのか教えてあげるね?」
　耳元で囁くように、ヤマメが言葉を発する。
　先ほどまでの明るい声とは真逆の、低い声。その声はじわりとリグルの体へと纏わりついていく。
　いつの間にかヤマメの手がリグルの手へと這わされており、本格的に身動きが取れない状態になっていた。
　それはさながら、蜘蛛の巣に捕らわれた蟲のように。
「ここから先にあるのは、貴女の知らない世界」
　突然の事態に頭を混乱させつつも、なんとか振りほどいて自由になろうとするが、それは叶いそうもなかった。
　押さえつけてきているヤマメの力が、予想以上に強いのだ。体格的にはそんなに差がないのに、どう頑張っても身じろぎひとつ出来そうになかった。
「地上で忌み嫌われし妖怪たちが住まう、素敵な地下の都。そういうのがこの先には広がっているのよ」
　ヤマメのつぶやく言葉に、リグルの背筋を嫌な汗が流れていく。
　まだ妖怪としては幼いリグルにとって、この先にある都というのがどんなものかは想像がつかない。
　ただひとつ、確実に分かることは――――
「ここに住んでる私もそんな妖怪の一人でね。病気、主に感染症とかなんだけどそういうのを操ることが出来るんだ。どう、すごいでしょ?」
　ヤマメの手が、リグルの眼前へと移動される。そして、その手から黒い不気味なオーラのようなものが放たれていた。言葉にするまでもなく感じる、不快感。
　――――これ以上ここにいては、身の危険が襲い掛かってくるかもしれないということだった。
「ま、そんなわけだからさ。リグルは引き返したほうがいいと思うよ。これは忠告ね」
「あ……え、うん……」
「よしよし、良い返事ね。それでいいわ」
　先ほどまでとは打って変わったかのような明るい声と共に、リグルは体が自由になるのを感じる。
　ゆらりとよろめいてしまうが、なんとか足に力を入れて姿勢を維持する。後ろを振り返りヤマメの顔へと視線を移すと、そこにはあった当初と同じままの笑顔が浮かんでいた。先ほどの脅し文句が、まるで嘘であるかのように。
　しかし、背筋に走る寒気が先ほどの出来事が嘘ではなかったと物語っている。
　リグルは言い知れぬ恐怖心に駆られ、そのまま出口へ向けて走り出してしまった。少しでも早く、ここから出たいという単純な思いに駆られて。
　そんなリグルの背中を見送りながら、ヤマメはつぶやく。
「あーあ、ちょっとやりすぎちゃったかな。せっかく同種の妖怪と出会えたのに、残念かも」
　ちょっとだけ残念な顔をしながらも、ヤマメはそのまま足を洞窟の奥深くへと向けるのであった。

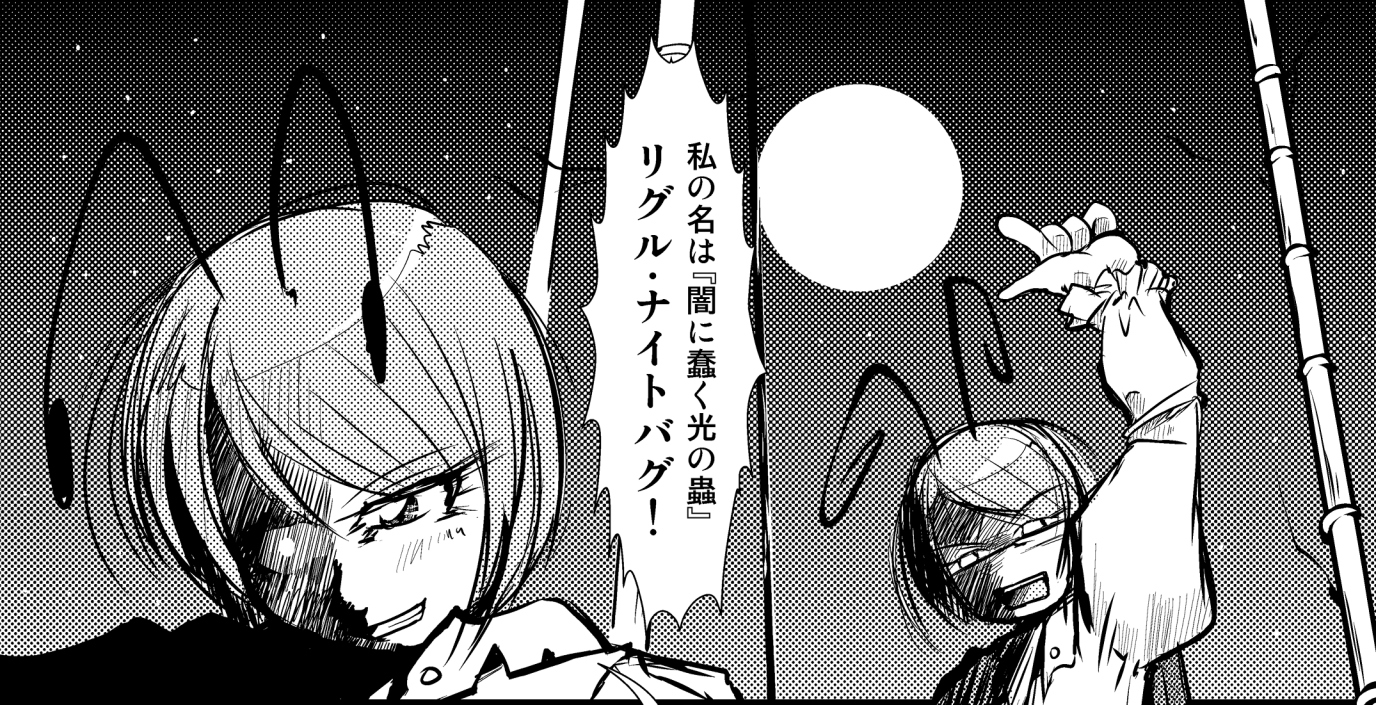
（終）

〈作者コメント〉
　リグルの日常シリーズ（?）です。ルーミアだけのつもりだったのですが、なんとなく続けてみました。最終的に全キャラやれたら良いな、多分無理かな。ちょっとずつ描き方を変えつつ、色々試行錯誤する毎日ですね。なんだか後書きの書き方忘れちゃった、また次号会いましょう!

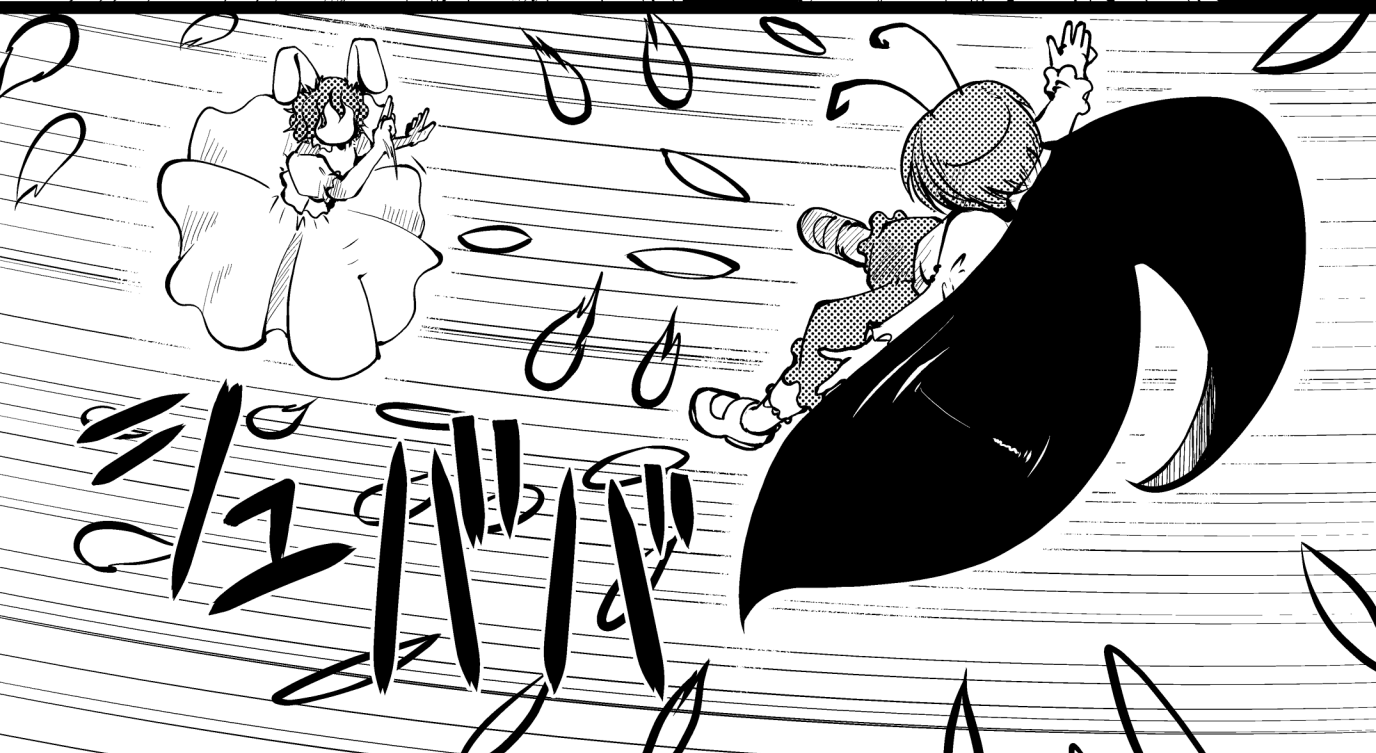
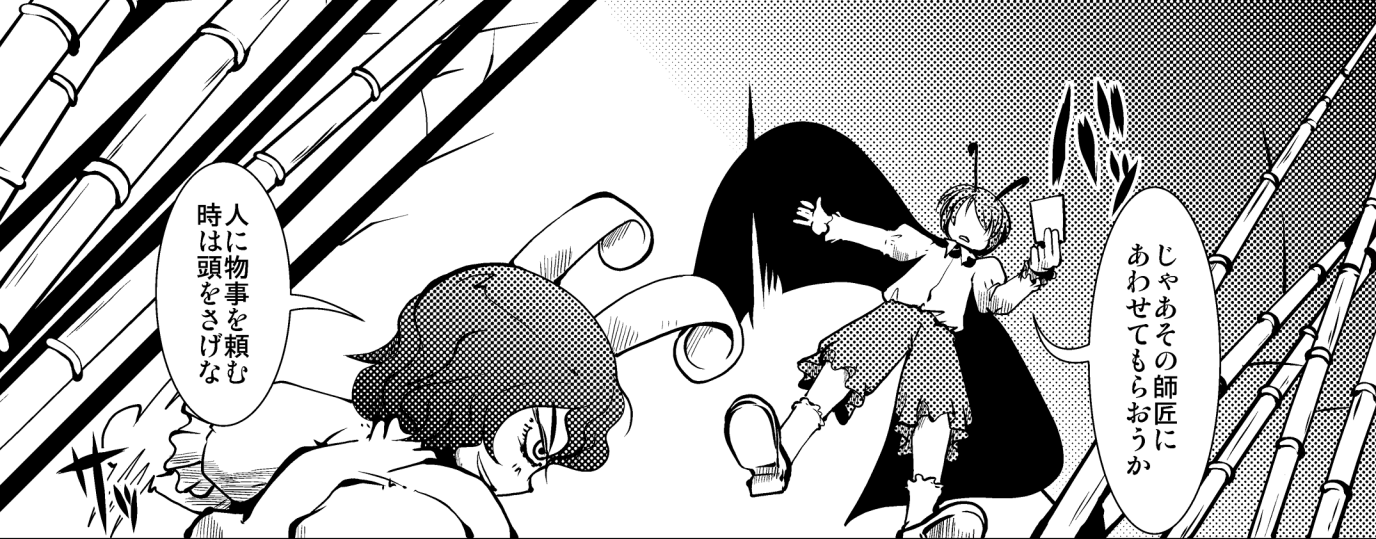
こどもの日だからあれを食べよう

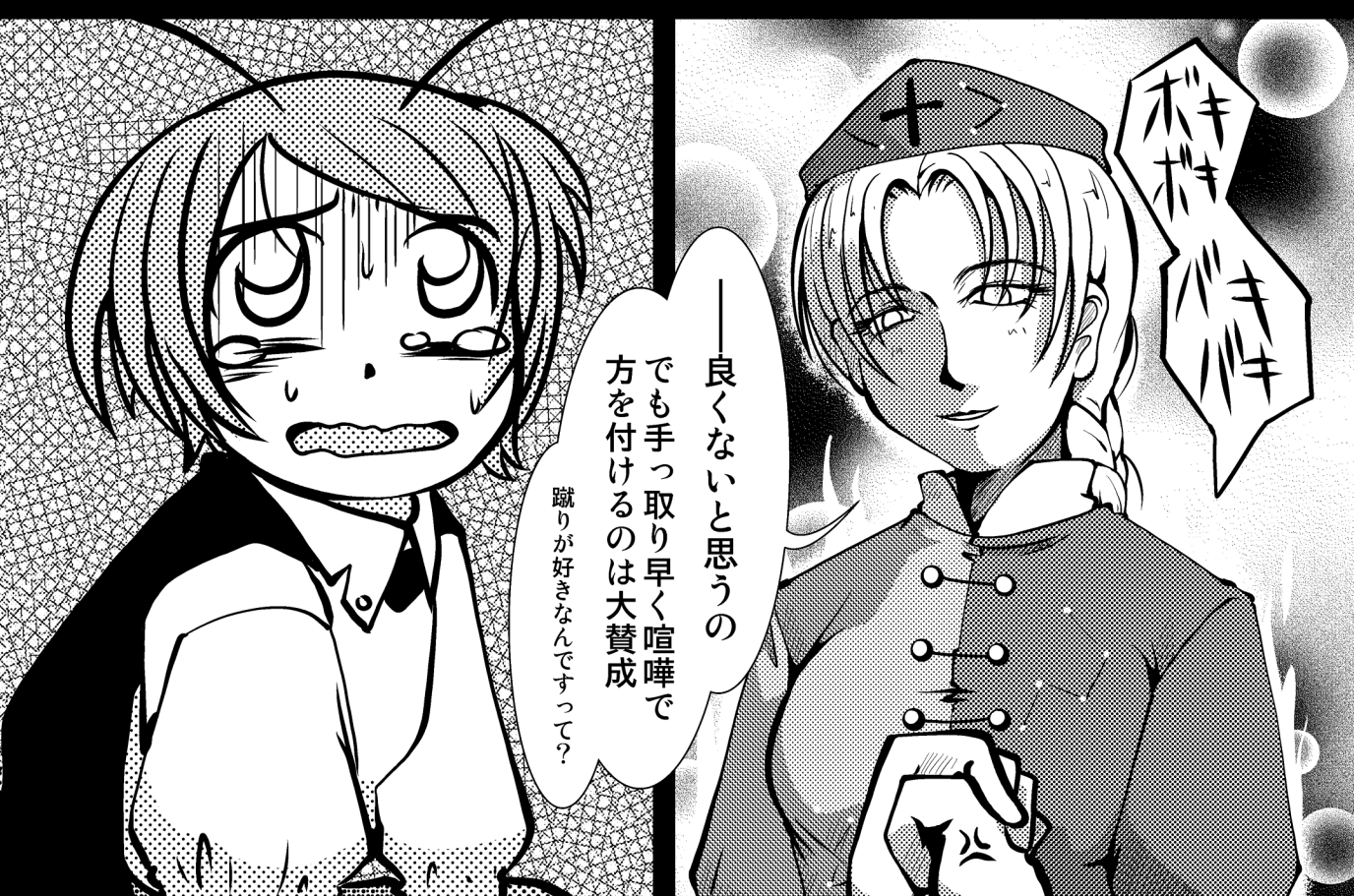
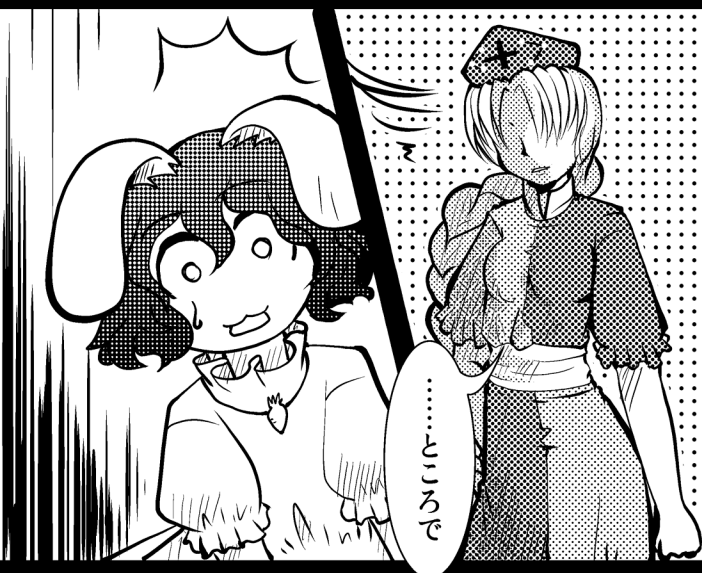
こどもの日にはかしわもちを食べるんだってさ
でも「かしわもち」って何だろう？
あっみすちー！かしわもちってなんだか分かるー？

んーかしわもちは聞いたこと無いんやけど、
かしわやったら鶏肉って意味やでー
＼そーなのかー！／

おわる

preludenano

私の名は『闇に蠢く光の蟲』
リグル・ナイトバグ！
ついに見つけたよ
ウサギの大将、ずっと
捜していました
あらあら、竹林の出口まで
案内して欲しいのかな？
迷子のぼうや
フラスター
いそいで
エスケープ
にげろ
step

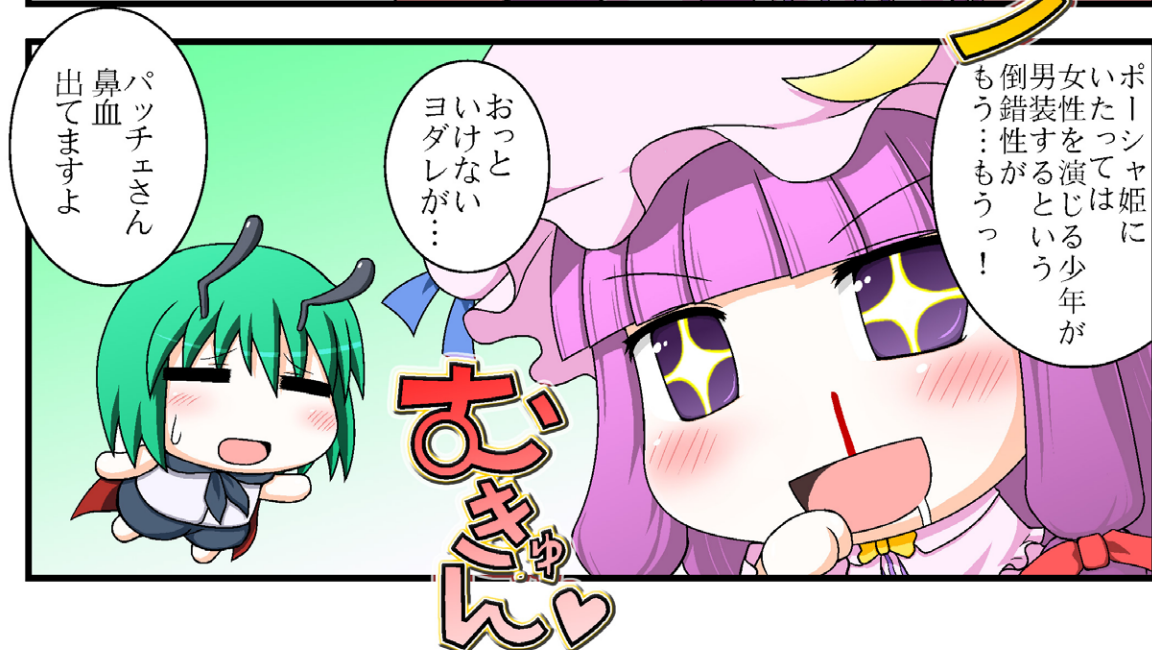
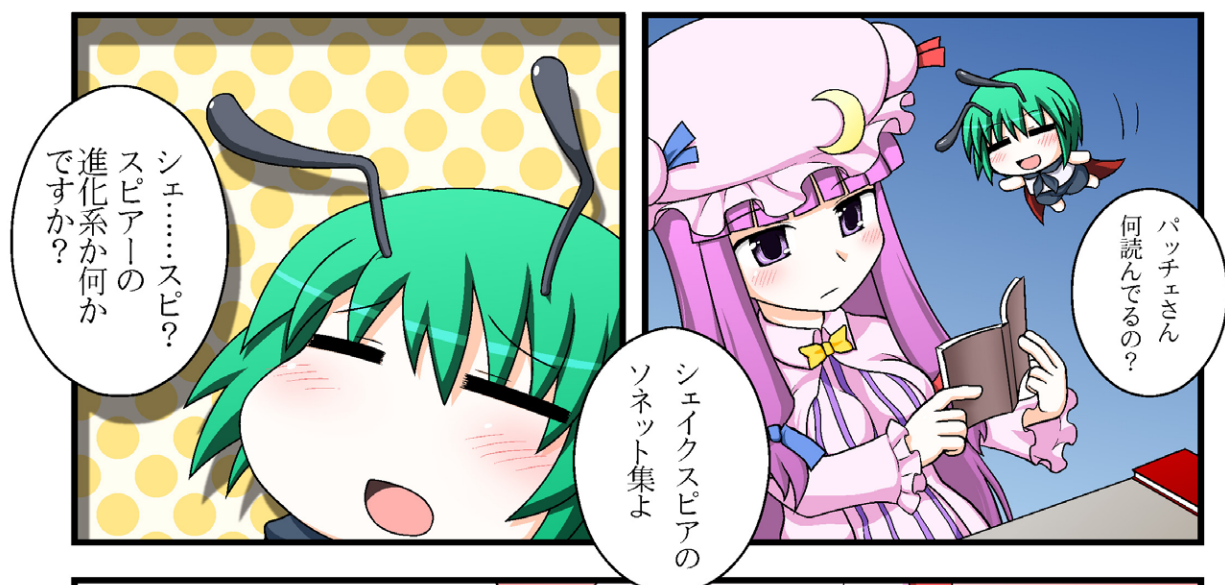
迷走しているのはウサちゃんでしょう最近ウサギは希少な蟲を捕食しすぎだよ
……嫌なウサギ
蟲捕りはお師匠さまの材料集め、私達は蟲なんか食べないよ
……ウサちゃん？
毒蟲ばかり集めて何を作るのやら
君の師匠は少し趣味が悪いみたいだ
お師匠さまの薬がいちいち悪趣味なのは否定しないけど
何と言われようとこっちは仕事だからね
あんな量の毒蟲で作った薬じゃ中毒死した後またショックで生き返ってしまうよ
スッ

じゃあその師匠にあわせてもらおうか
人に物事を頼む時は頭をさげな
蛍符「地上の恒星」
脱兎「フラスターエスケープ」

この程度の弾幕でお師匠様と会おうってのかい？
私は蹴りの方が得意なんだ、喧嘩でわかってもらうさ
はしご状神経はやる事が短絡的ね

カッ
ドガッ
人の趣味を悪し様に言うのは――
……な、なんだ？今のは弾幕じゃないぞ
ボキボキバキバキ
――良くないと思うの
でも手っ取り早く喧嘩で方を付けるのは大賛成
蹴りが好きなんですって？

ひぇえええええ
いやぁ、喧嘩なんて
何百年ぶりで手加減
できるかしら
まぁ、死んでも
毒蟲の薬で生き返えれる
ってあなたも言ってたし
……ところで
わぁぁぁぁ、とにかく
希少な蟲は大事にして下さい
ばーかばーか悪趣味ーッ！
バッ
私の薬はいちいち
なんですって？

我らエリザベス朝の妖怪

羅外

シェイクスピアはイギリスの
俳優・詩人・劇作家よ
当時のエリザベス朝演劇には
女優が存在せず
女性の役は少年の俳優が
女装して演じていたのよ
つまりオフィーリアも
ジュリエットも演じるのは
オ・ト・コ・ノ・コ♪

パチュン

私が出会ってきたヒトたち

著者：壁々

「祝！」
「月刊ナイトバグ！」
「一・周・年〜っ！！」
「と、いうわけで！」

『第一回パラレルリグル大集合！』
『私が出会ってきたヒトたち特集〜！』

「ってえええええ〜！？」
「リグルが…沢山いるっ！？」
「全部…本物なの！？」
「どーいうことなのだー！？」

「えっとね、この雑誌に投稿される作品には様々な『私』が描かれているじゃん？つまり、この雑誌には投稿してきた人たちの分、『私』がいるわけ。」
「その『私』が経験してきたことを「出会い」を中心に、この場でまとめるために――」
「『私』が一同に集められた…ってことらしいんだ」

「………？？？」

「まぁ、わからなくても問題はないよ！それじゃ、まずはこっちのリグルから！」

＊＊＊＊

※作者注
①今回の企画の趣旨は、誰（作者）のリグルが誰（東方キャラ）に会っているか、です。
②ルールとして、絵、ＳＳを問わず、リグルと一緒にいたことがある人をカウントします。
③リグルがその人のコスプレをしている、はカウントされません。
④なお、形式としてそれぞれの世界にいるリグルを連れてきて自己申告させている、というものなので、閉鎖空間にヒキィされたリグルはいません。ご了承ください。
⑤姿や名前がはっきりと書かれていなくても、確実にいると判断できる場合、カウントはされます。勘違いでカウント増やしてたら本当に恥ずかしいですが。
⑥逆に、特にＳＳに言えることですが、作者の読解力と時間のなさでカウント漏れが起こっている可能性があります。あったら本当にごめんなさい。
⑦掲載順は順不同、敬称略です。
⑧特集企画等で明らかにキャラが違う場合もありますが、そこはスルーでお願いします。
⑨バカ

＊＊＊

せん…ルーミア、チルノ
東…ルーミア、チルノ、パチュリー、小悪魔、

咲夜、紫、ミスティア、永琳、幽香、勇儀

草加あおい…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、レミリア、アリス、リリーホワイト、リリーブラック、幽々子、藍、紫、ミスティア、慧音、てゐ、鈴仙、輝夜、妹紅、幽香、メディスン、文、霖之助

てつ…ミスティア、レミリア

のーと…霊夢、チルノ、大妖精、ミスティア、文

うがつまつき…文

羅外…霊夢、魔理沙、チルノ、パチュリー、藍、ミスティア、妹紅、幽香、椛、文、ヤマメ、ナズーリン

言示弄…魔理沙、ルーミア、チルノ、パチュリー、橙、アリス、ミスティア

foxtrot…ルーミア、ミスティア

貴キ…ルーミア、チルノ、レティ、橙、ミスティア、幽香、文、ヤマメ、小傘

カノープス…チルノ

涼音 奏…ルーミア、チルノ、レティ、ミスティア、映姫、ヤマメ、魅魔

ADDA…ミスティア、チルノ

黒ストスキー…ルーミア、魔理沙、

f…ヤマメ

しゃき・しゃき…魔理沙

社 蛍夜…霊夢、ルーミア、チルノ、大妖精、レティ、幽々子、ミスティア、永琳、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア、

くうりん…チルノ

lube…、魔理沙、チルノ、咲夜、橙、幽香

緑…ルーミア、チルノ、リリーホワイト、リリーブラック、ミスティア、鈴仙、幽香、

mimidori…ヤマメ

むつのかみ よしゆき…チルノ、咲夜、レミリア、フラン、幽香、映姫、にとり、小傘

宵闇雪花…ルーミア、小町、映姫

夏樹 真…魔理沙、ルーミア、チルノ、橙、アリス、妖夢、藍、紫、ミスティア、慧音、

壁々…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、リリカ、幽々子、紫、萃香、ミスティア、慧音、永琳、小町、文、早苗、勇儀、霖之助

はね~~…魔理沙、アリス、ミスティア

MAL…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、美鈴、咲夜、レミリア、アリス、ミスティア、静葉、穣子、霖之助

夢宮…慧音、妹紅、

小崎…レティ

GIF…ミスティア

さやかりん…霊夢

ひどぅん…魔理沙、ルーミア、チルノ、妖夢、幽々子、橙、藍、ミスティア、慧音、萃香、幽香、雛、にとり、椛、文、早苗、神奈子、ヤマメ、ナズーリン、星、白蓮

オワタ…幽香

貴キ…ルーミア、チルノ、大妖精、咲夜、藍、ミスティア、慧音、てゐ、鈴仙、永琳、輝夜、妹紅、幽香、小町、映姫、雛、早苗、諏訪子、キスメ、ナズーリン、小傘、一輪、雲山、ム

ラサ、星、白蓮、ぬえ、霖之助

HOUSE…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、アリス、リリカ、妖夢、藍、紫、ミスティア、雛、にとり、文、早苗、ヤマメ、さとり、お燐、お空、メリー、阿求

怒羅悪…ルーミア、チルノ、大妖精、美鈴、咲夜、レティ、ルナサ、メルラン、幽々子、ミスティア、慧音、永琳、輝夜、妹紅、幽香、雛、天子

やにたま…霊夢、ルーミア、チルノ、紫、ミスティア

戌亥…早苗

異国の民…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、咲夜、レミリア、ミスティア、

水中花火…小傘

くらげん…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、大妖精、パチュリー、紫、ミスティア、慧音、妹紅、幽香、にとり、文

水無月…幽香

草葉…ルーミア、チルノ、大妖精、ミスティア

凡用人型兵器…霊夢、文

くろと…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、大妖精、美鈴、パチュリー、小悪魔、咲夜、レミリア、フラン、アリス、リリーホワイト、リリカ、妖夢、幽々子、ミスティア、てゐ、鈴仙、妹紅、幽香、メディスン、椛、文、早苗、キスメ、ヤマメ、パルスィ、勇儀、さとり、お燐、お空、こいし、ナズーリン、小傘、星、霖之助、阿求

ヘルバナナ狸地…霊夢、魔理沙、慧音、妹紅、メディスン、文、霖之助

熾天使…幽香

たーく…チルノ

キッカ…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、ミスティア、慧音、雛、

ZT…幽香

Jade…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、大妖精、美鈴、パチュリー、小悪魔、咲夜、レミリア、フラン、レティ、橙、アリス、ルナサ、メルラン、リリカ、妖夢、幽々子、藍、紫、萃香、ミスティア、慧音、てゐ、鈴仙、永琳、輝夜、妹紅、小町、映姫、にとり、文、早苗、勇儀、さとり、お燐、お空、こいし、ナズーリン、小傘、一輪、ムラサ、星、白蓮、ぬえ、ルナチャイルド

夜行…ルーミア、チルノ、大妖精、ミスティア

神楽祐希…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、大妖精、ルナサ、メルラン、リリカ、紫、ミスティア

わぶ…幽香

モ誠幹…ルーミア、チルノ、大妖精、レティ、ミスティア

毒粗…ルーミア

豆板醤…ルーミア、チルノ、大妖精、妖夢、ミスティア

蛍光流動…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、大妖精、妖夢、藍、ミスティア、鈴仙、妹紅、雛、文、小傘、霖之助

斑…ルーミア、チルノ、レティ、リリーホワイト、リリーブラック、ミスティア、幽香

泥田んぼ…ミスティア、ルーミア

秋水…ルーミア、チルノ、藍、スティア、てゐ、幽香、

亜人…ルーミア、ミスティア

ニトリフ…ルーミア、チルノ、ミスティア

uchu-jin…妖夢、妹紅

Salka…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、小悪魔、咲夜、レミリア、レティ、アリス、ミスティア、慧音、永琳、妹紅、幽香、メディスン、椛、文、衣玖、さとり、一輪、雲山、魅魔、神姫

如月翔…魔理沙、ルーミア、美鈴、小悪魔、フラン、橙、アリス、紫、ミスティア、幽香、文、霖之助

悠木玲二…ルーミア、チルノ、ミスティア

西遊…霊夢、魔理沙、ルーミア、チルノ、大妖精、美鈴、咲夜、レミリア、橙、アリス、ルナサ、メルラン、リリカ、幽々子、紫、ミスティア、慧音、てゐ、鈴仙、永琳、輝夜、妹紅、幽香、静葉、穣子、椛、文、早苗、神奈子、諏訪子、さとり、お燐、こいし、白蓮、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア

Ｓｔｅｐ…ルーミア、チルノ、美鈴、パチュリー、小悪魔、レティ、リリーホワイト、静葉、穣子、早苗、諏訪湖、キスメ、ヤマメ、ナズーリン

巳…ルーミア、チルノ、ミスティア、幽香、雛、キスメ

千C…霊夢、ルナサ、妖夢、幽々子、萃香、ミスティア、お燐、

preludenano…ルーミア、チルノ、大妖精、レティ、幽々子、ミスティア、幽香、静葉、穣子、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア

銅おりは…ルーミア、チルノ、大妖精、ミスティア、幽香、キスメ、ヤマメ

ウリック…ルーミア、チルノ、ミスティア

亜斗…チルノ、レティ、リリーホワイト、リリーブラック、幽香

越冬…霊夢、慧音

ハシゴ…魔理沙

長閑…チルノ、リリーホワイト、リリーブラック、幽香

Wrigglove…雛

悠奈…ルーミア、チルノ、大妖精、アリス、幽々子、紫、ミスティア、霖之助、

中国…チルノ、妖夢、藍、萃香、慧音、鈴仙、永琳、輝夜、妹紅、にとり、椛、文、諏訪子、衣玖、勇儀、さとり、こいし、

紅…ルーミア、チルノ、リリーホワイト、リリーブラック、幽香

ぼこ…慧音、輝夜、妹紅

ポマギッシュ・ポマーダ…チルノ、レティ、リリーホワイト、リリーブラック、幽香

こぶろう…チルノ、幽香

ぶーわ…チルノ、幽香

しっぷ…チルノ、レティ、リリーホワイト、リリーブラック、幽香

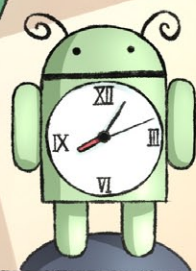
＊＊＊＊

「…はぁー、いろんな人と会ってきたんだねー…私。」
「いやリグル？それ自分で言ってて頭混乱しない？」
「え、そう？もう慣れたんじゃないの？チルノとか」
「・・・・・・」
「へんじがない。ただのしかばねのようだ。」
「ただのオーバーヒートでしょ？」
「ねぇリグル？」
「何？ルーミア」
「今だけいるなら食べてもいいよね？」
「いやちょっと待とうか！？食べてもいいよねってダメに決まってんじゃん！ていうかいるならって何！？私はいつも捕食対象として見られてたの！？」
「だめなのかー…」
「残念そうに言うなー！」
「…仕方ないなぁ」
「…え、何、なんでこのタイミングで私に視線振るかな？いや駄目だよ？」
「おなかへったー」
「そんな目で見るな！こっちくんなー！」
「いただきまーす」
「ぎゃー！やめ

＊＊＊＊

「…ていう夢を見たんだ」
夜の屋台。ミスティアは客の三人―リグル、ミスティア、チルノ―に話を終えた。
「またヒドイ感じの夢だね…色々と」
「ねぇみすちー」
「…ダメだからね」
「え、でも夢ってその人の奥底にある願望が出るって…」
「ダメだからね！」
「うー…」
「心底不満そうな顔すんな」
「けど、夢の話って楽しいね」
ぽつりとチルノがこぼした言葉に他の三人はいっせいに振り返った。
「私って夢見ないのか、覚えてないのか…とにかく、夢ってものの記憶がないんだよね」
（…それは多分…）
三人は一斉に思い当たるところがあったが一様に押しとどめた。流石にそこでそれを言うのはシャレにならない。
「ねぇ、もっと夢の話聞かせてよ！なんかないの？」
眼を輝かせて聞いてくるチルノに、三人はしばし考える。そして、誰ともなく、語り始めた。
「そうだね…こんな話があったかな…」

（終）

〈作者コメント〉
すげぇ疲れました。注意書きにもありますが、ミスがあったら本当にごめんなさい…
色々な発見があって楽しかったです。そこらへんは掲示板にでも…

5月号テーマ
はっ！夢か。特集
『寝起きリグル』　草葉
…　…　寝坊した…。

東方昔話 －白雪姫－

著者：社　蛍夜

夜。
　布団で丸ごと包み込んでいるものがモゾモゾと動き、勢いよく掛け布団を弾き飛ばしながら起き上る。
「・・・眠れないッ！」
　彼女、リグル・ナイトバグはどうやら眠れないようだ。辺りがシン、とすると、頭を掻きながら考え込む。
「うー、昨日チルノちゃん達と遊んだ後に、そろそろ起きてる蟲達がいないか探して夜更かしして、昼まで寝ていたのが原因で眠れないのか？・・・って、何でこんなに説明口調なんだ私」
　一人マシンガントークをしながら、リグルは悩んでいる。そんな時、枕元でゴトッと音がして驚き振り返る。そこには
「・・・本？」
　かわいらしい絵で描かれた表紙に、大きく『白雪姫』と書かれ振り仮名も振られている。
「・・・何でこんな所に、とか言ってると終わらない気がするし、ちょっと読んでみようかな・・・絵、可愛いし」
　最後にボソッと付け足しつつ、本を手に取るリグル。
「本とか呼んでると眠れそうだしね」
　そのまま布団に潜り込み、横になりながら本を読み始めるリグル。
「しら・・・」
・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「・・・ら・・・！しら・・・し！白蟲！！」
「はっ・・・お、お嬢様？」
「何居眠りこいてんだ！掃除が終わってないじゃないか！」
「あっ、はい、申し訳ありません」
「ふん、早く終わらせなさい。その後は皿洗いとトイレ掃除もよ」
　お嬢様と呼ばれたドレスを着た水色の髪で羽のようなモノが後ろに浮いている女性はそう言うと、振り返り玄関の外に居たドレスを着ている鳥の羽根を持つ女性と、やはりドレスを着て両手を広げた女性に声をかける。
「遅くなってゴメンねー」
「もー、そろそろマズいよー。王子様と踊りたいなら早く行かないと」
「え、もうそんな時間！ちょ、早く行きましょう！」
「そーなのかー」
「待っててください、大妖精王子様ーー・・・・・」
　全速力で飛び去っていく、彼女達の最後の言葉がだんだんと聞こえなくなるのを確認した白蟲は、溜息をつきながら呟く。
「はぁ、わたしも舞踏会行きたかったな・・・って、何やってんだ私」
　あれ？という感じで首を傾げると、着ているつぎはぎだらけのボロ服を見て、さらに周

りを見回して考える。
「え・・・と・・・・・・はっ！夢か。寝る前にあの本を読んだからか？」
「・・・何してるんだぜ？」
「あっ、魔理沙」
「何言ってるんだ？私は魔女だぜ」
　リグルが知っている魔女、霧雨魔理沙がいつも通りの黒服で現れた。
「・・・夢だからか？」
「ごちゃごちゃ五月蝿いんだぜ。白蟲、お前は舞踏会にいきたいのか？」
「え？えーと・・・」
（たしかこの後ドレスを着て王子様に会うんだったな・・・）
　顔を赤らませつつ小さく頷くリグル。それを見た自称魔女は
「ならこれに乗ってくといいんだぜ☆」
「えっ、南瓜と鼠がいるんじゃ・・・ひええぇぇっ！！？コレ星○船じゃ・・・」
「よく分かったな、この船は星丸船（ほしまるせん）だ」
「そういうもんだいじゃ、ってかどこに連れてく気ｄ」
「乗るか乗らないか、ハッキリスルンダゼ☆」
　八卦炉を突き付けつつ問いかけ、もとい脅迫する魔女。
「のっ、のらな「乗らない子にはお仕置きだぜー」
「某髑髏の人みたく言わなくても」
　八卦炉に光りが集束し始める。

「乗りますッ！！」

※十分後※

「終点のだいたいお城ー、お城ー、お降りの際は足元にお気をつけくださいー」
「うわ・・・」
　船長のアナウンスをバックに見るお城は
「紅○館じゃん」
　真っ赤なお城。
「いやいや、アレ城だった？」
　真っ赤で大きく立派なお城。
「・・・王子って、吸血鬼？」
　疑問符を浮かべてる暇があるなら降りる。
「・・・・・・」
　しぶしぶ降りるリグル。そして、やっと自分の服のさわり心地が変わってる事に気付く。
「ついに私もドレスを・・・」
　いつも通りの白シャツ短パンマント。
「・・・ボロよりは良いか」
　ついに考える事を止めたリグルは城に向かう。
　仕事をしている門番の横を通り、忙しなく飛び交うメイド達を横目にパーティー会場へと入る。するとそこに居たのは
「おぉ、何と可愛らしい娘だ」
　緑髪、チェック服、横手に傘、王子っぽい冠。
「・・・幽香じゃん」

「お嬢さん、お名前は？
「え、リグ・・・ではなかったな。えと、白蟲」
「白蟲、綺麗な名だ。では白蟲、私と一緒に踊りませんか？」
　リグルの手に手を添え誘う王子。

以下 11:59 まで割愛。

　恨み妬みの視線を受けつつも楽しく踊っていた二人だが、12 時の鐘が鳴ると同時にリグル、もとい白蟲の脳裏によぎる言葉。
『12 時を過ぎたらお前の家、バル○ン焚いておくんだぜ☆』
（マ　ズ　イ　！）
「すいません、ちょっと用事を思い出したので帰ります！」
「あ！白蟲！」
　そう言うと王子の手を振り切り、駆け出す白蟲、そして階段で
「あっ」

・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・

ガバァッ！と、布団から起き上るリグル。
「・・・フツー踏み外すか、私・・・・・」
　とっても落ち込んでいた。

（終）

〈作者コメント〉

十六日零時・・・え？冗談キツ・・・
結果、即興一時間無いほどで書きあげてしまった。

誤字、脱字？なにそれかゆう（

変身

著者：mimidori

　ある朝、リグル・ナイトバグが不安な夢からふと覚めてみると、草むらのなかで自分の姿が一人の、とてつもなく幼い少女に変わってしまっているのに気がついた。柔らかい筋肉の背中を下にして、仰向けになっていて、ちょっとばかり頭をもたげると、あまりふくらみのない、肌色の、弓形の固い骨のかたちがみえる胸部が見えた。そのさくらんぼの盛り上がったところに草蒲団がかろうじて引っかかっているのだが、いまにも滑り落ちてしまいそうだ。昨日までの足の太さに比べるといまは悲しくなるほど太ましく、指の本数ばかり多くなった手が頼りなく目の前でぷにぷにしている。

　いったい、自分の身の上に何事が起こったのか、と彼女は考えてみた。夢ではなかった。蛍が住むにはすこし広いかんじだが、きちんと生き物が住んでいる川辺は、なじみぶかい草むらに三方を囲まれて静まりかえっている。別々に集まった成虫蛍のつがいがよりそっている平らな石の上のほうには――リグルは成虫だったのだ――最近、彼女がある草むらからめとってきた、きれいな黒色の目をもったオスの蛍がいる。それは烏の羽を濡らしたような目で、そのオスは水滴の帽子をかぶり、草の襟巻きをまいて、頭のへんまで包んでいる重たそうな葉っぱの蒲団を、ちょうど自分を眺めるリグルの目の前へ持ちあげていた。

　リグルは目を草むらへやった。草むらの葉をうちつける雨だれの音が聞こえている。もの悲しい天候が彼女の気分をすっかりめいらせた。もういっとき眠りこんで、ばかげたことをみんな忘れてしまえたら、どんなにいいだろうなあ、と彼女は考えた。だが、そんなことは望めそうにもなかった。彼女は腹側を下にして寝る習慣だったが、いまのような知らない体になってはその姿勢をとることさえできないからだ。右側へひっくりかえろうとしてみたところで、どうにも力をこめすぎて、いつも一回転するばかりで、またもとの仰向けにもどってくる。目をつぶって、わざと悪あがきする体のほうを見ないようにして、おそらく百回も試してみた。とうとう脇腹のあたりにそれまで感じたことのない、軽い鈍痛をおぼえだしたので、やっと彼女はあきらめてやめた。

　ああ、なんという骨の折れる運命を吸血鬼は選んだのだろう、と彼女は考えた。明けても暮れても苦労ばかりだ。体が変わる苦労は、虫のまま生きつづけるのとは比べものにならないほど大きい。そのうえ、オスの遺伝子への心配とか、なにを食べればいいかわからない食事とか、すこし自分の体がかわっただけで、もう永つづきしない、最近見つけたばかりのオスとのときあいとかいったような、生存競争にはつきものの辛労があるわけなのだ。そんなものはみんなゴキブリにでもくれてやればいいんだ。なんだか腹の上のあたりが痒くなってきた。頭を十分にもたげてよく見ようと思って、仰向けのまま　ベッドの柱のところまでからだをのろのろ動かしていった。痒い箇所は見つかった。小さな白い斑点ができているだけだが、それが何なのか彼女には見当もつかない。指の一本でそこへさわってみようとしたが、触れた瞬間、冷たい戦慄が身うちを走ったので、すぐさま指をひっこめた。

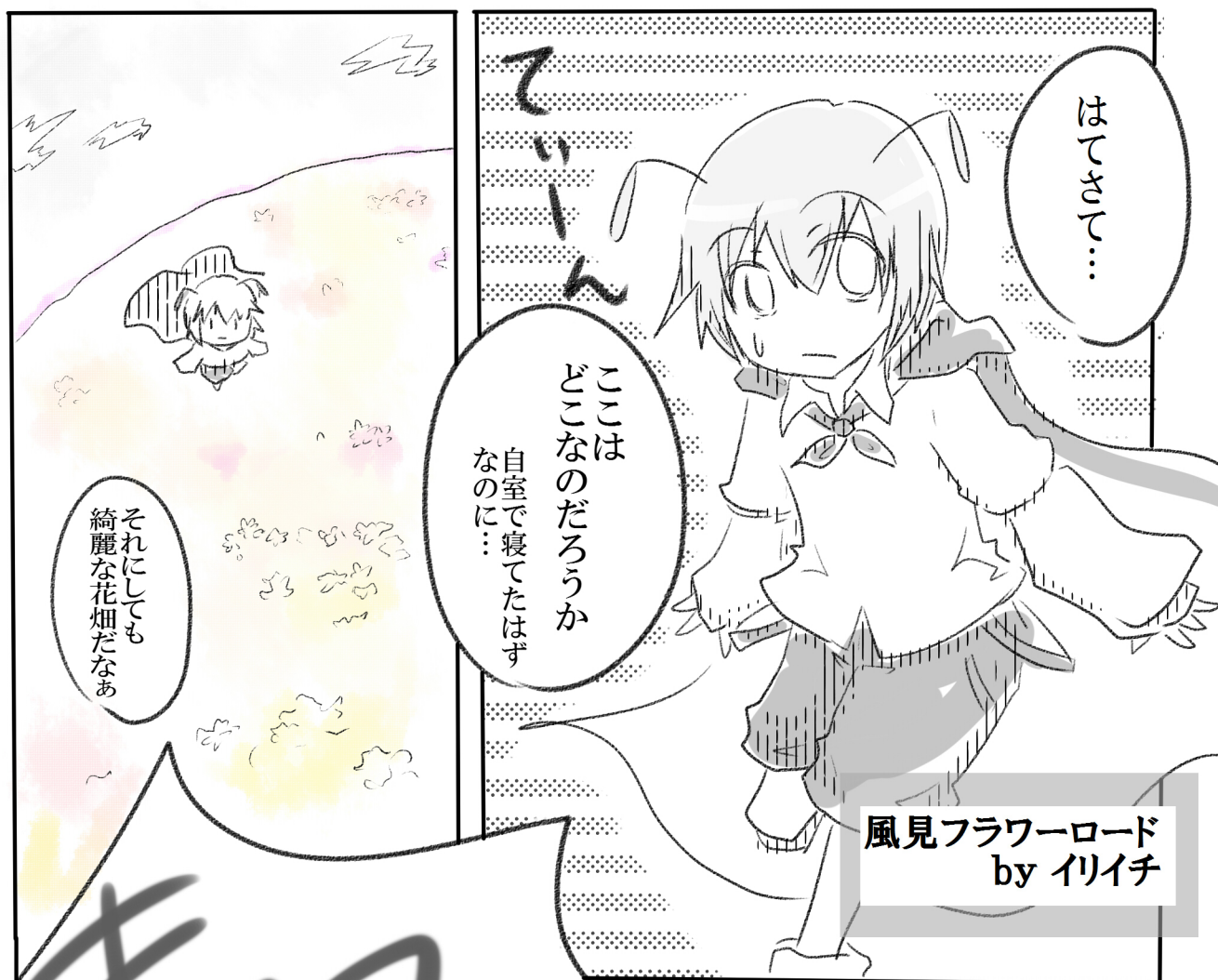
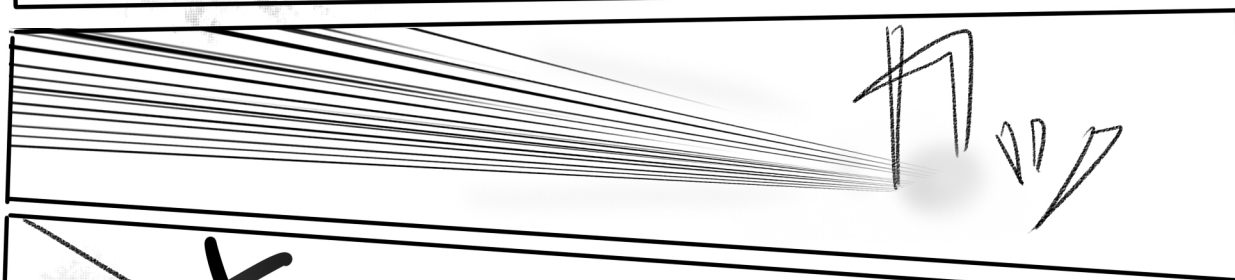
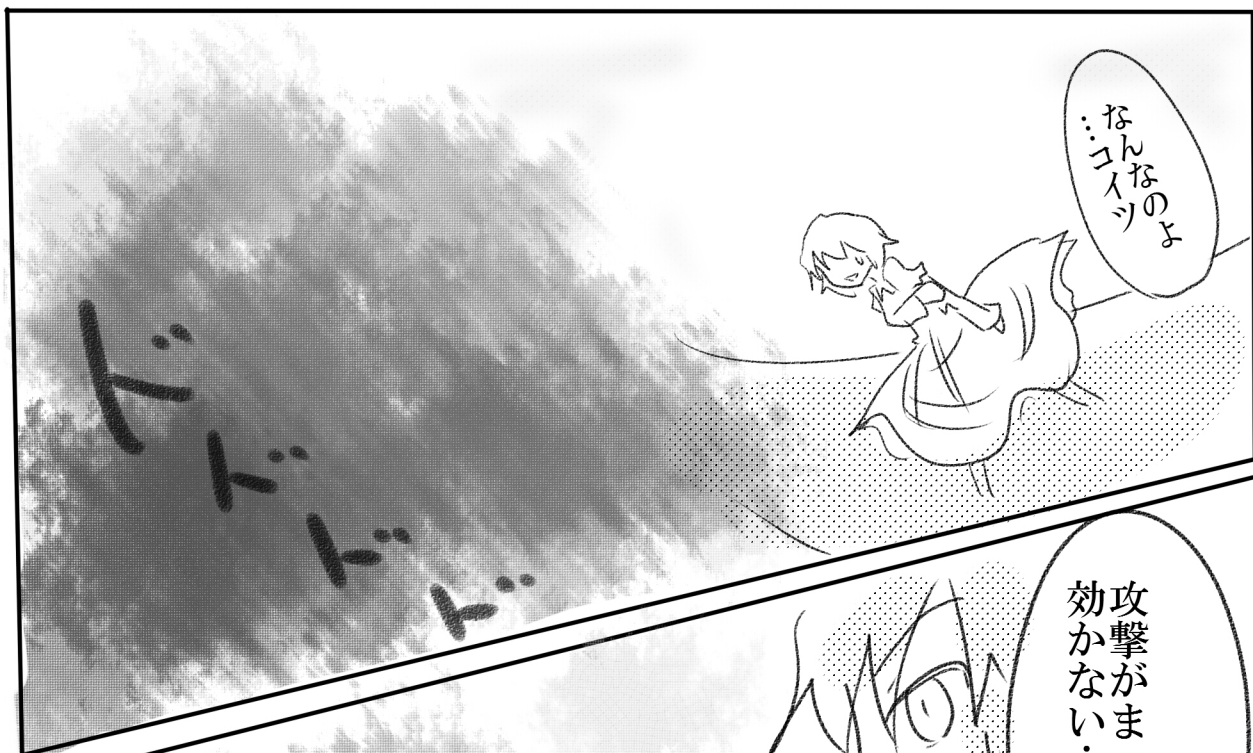
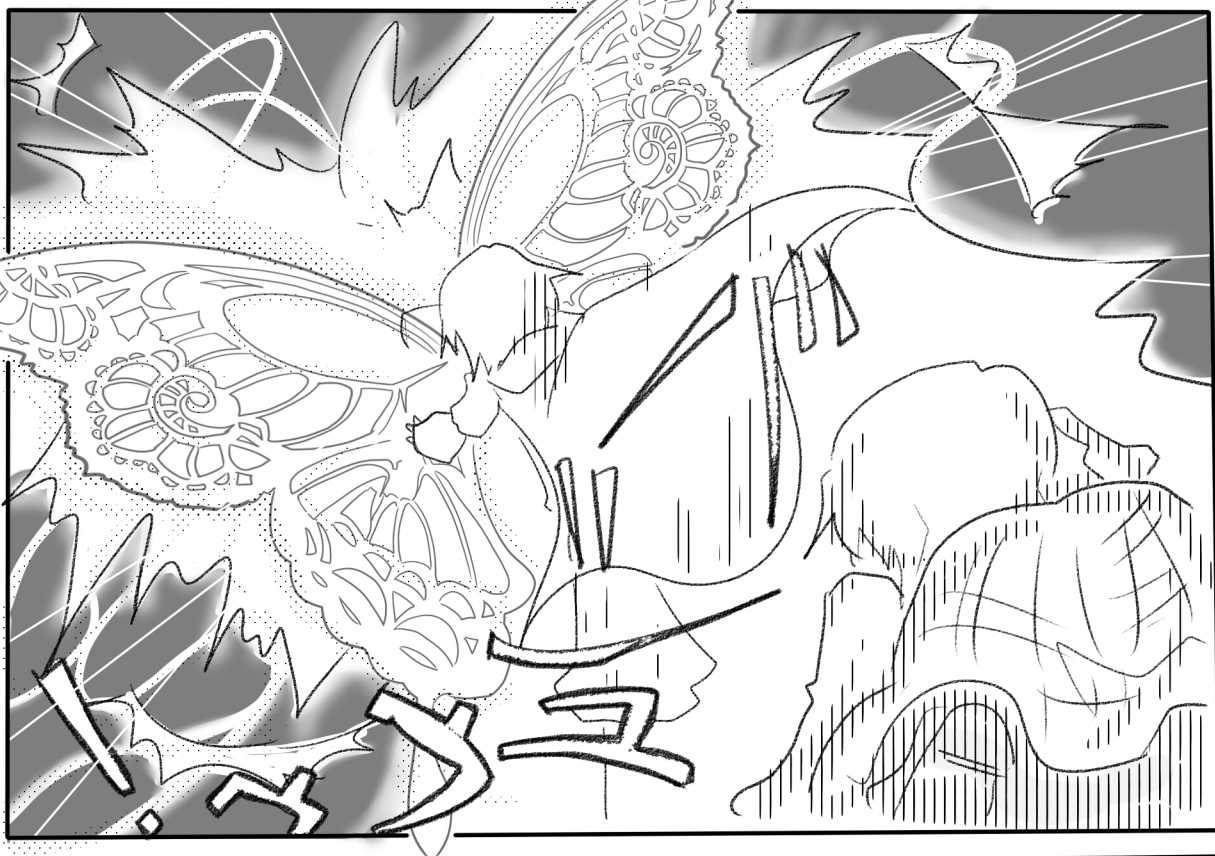
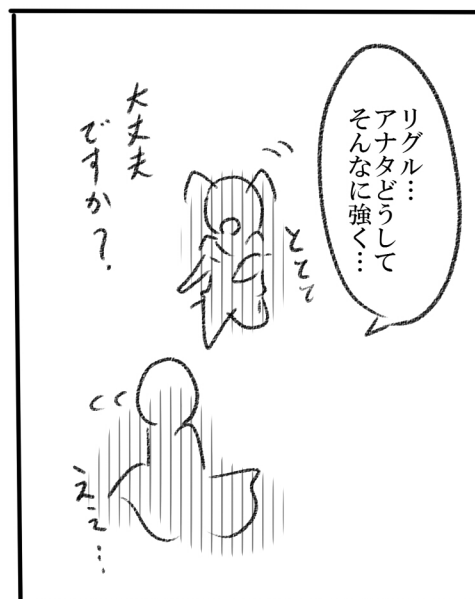
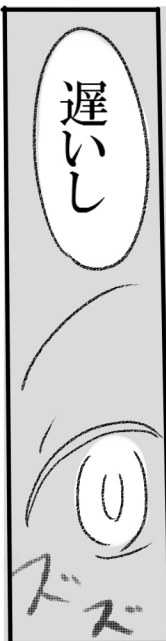
　彼女はまた元の姿勢へもどって仰向けに寝ころがった。あんまり早く起きてると、蛍はばかになる、と考えたからだ。蛍には睡眠が必要なのだ。実際、ほかの蛍ときたら、まるで童話のアリたちのような暮らしをしているではないか。一例をあげると、こうだ。受け継いだ遺伝的特徴を書き写すために自分が生きてる間にオスの下へ引き返してみると、いまやっと蛍連中と来たら石のテーブルにすわ

はっ!!
ガバッ
あ、夢か…。
ばさぁ!

てぃーん
はてさて…
ここはどこなのだろうか
自室で寝てたはずなのに…
それにしても綺麗な花畑だなぁ
風見フラワーロード
by イリイチ
キャアアッ
ビクッ!
今の声は…

なんなのよ…コイツ
ドドドド
攻撃がまったく効かない…
マスパは花があるから撃てないし…
どよんど
カッ
イヤ…っ!
ギュウンッ

ザァァッ
…リグル？
幽香さん いじめてたのは これですか？
てか 気持ち悪い
ズオォォォ

ぶぶぶうぅぅん
隠蟲「永夜蟄居」
遅いし
ズズ
ぺしん
弱いし
とっとと土に還ればいい
ぱんぱんぱん
サァァァァ
リグル…アナタどうしてそんなに強く…
大丈夫ですか？
とてて
えぇ…
もちろん幽香さんの為です
えっ？
ぴこん

今まで僕は大した能力もなく幽香さんに守ってもらってた

それがどれだけ悔しかったことか

でも、もう僕は変ったんです

ぽむっ

誰も逆らえない強い力だって手に入れた

つぅ

痛みだって全然感じない

ぞぞっ

リグ…

だから

やめてっ!
…っ
…
はっ
はっ
酷いなぁ僕のこと嫌いですか?
…はっ
ち…っ
違うのよ

笑顔が素敵で
花が好きで
だけど、
いつも私に
優しくしてくれる
弱くて、
たまに泣き虫で
そんなアナタが
ぎゅっ
好きなのよ

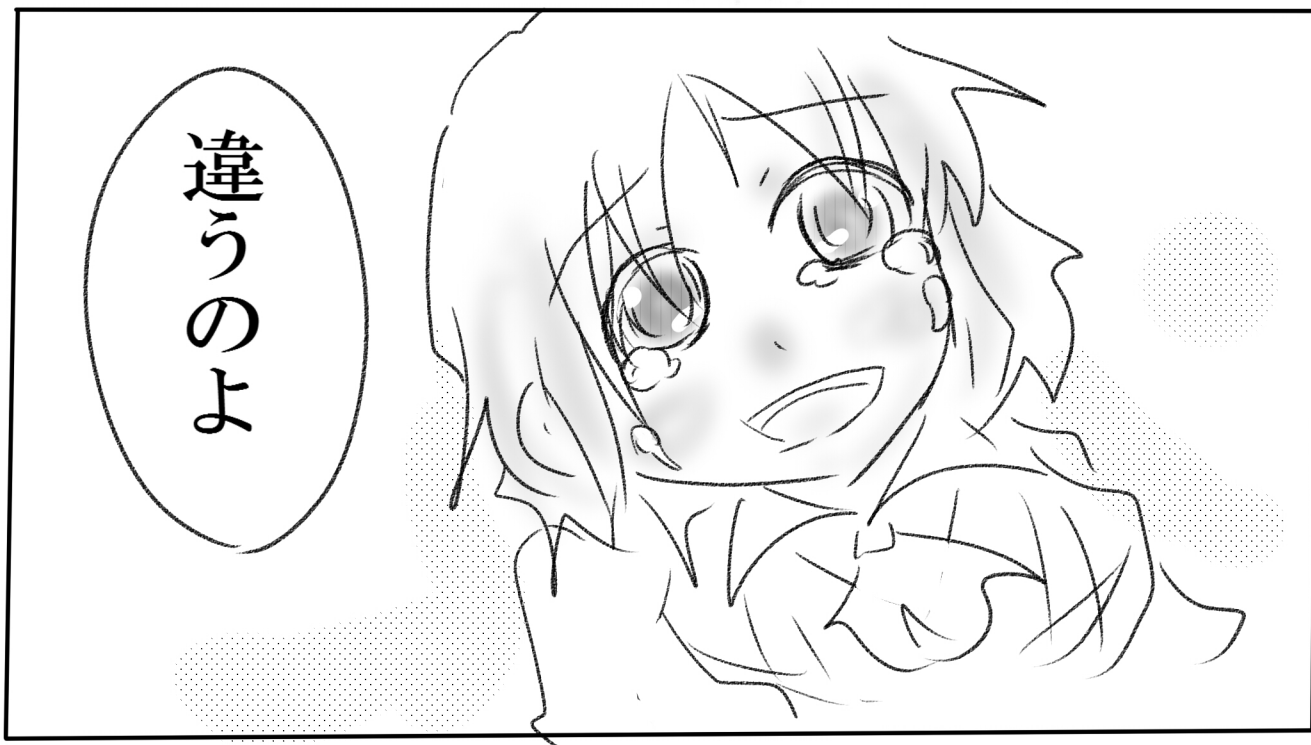
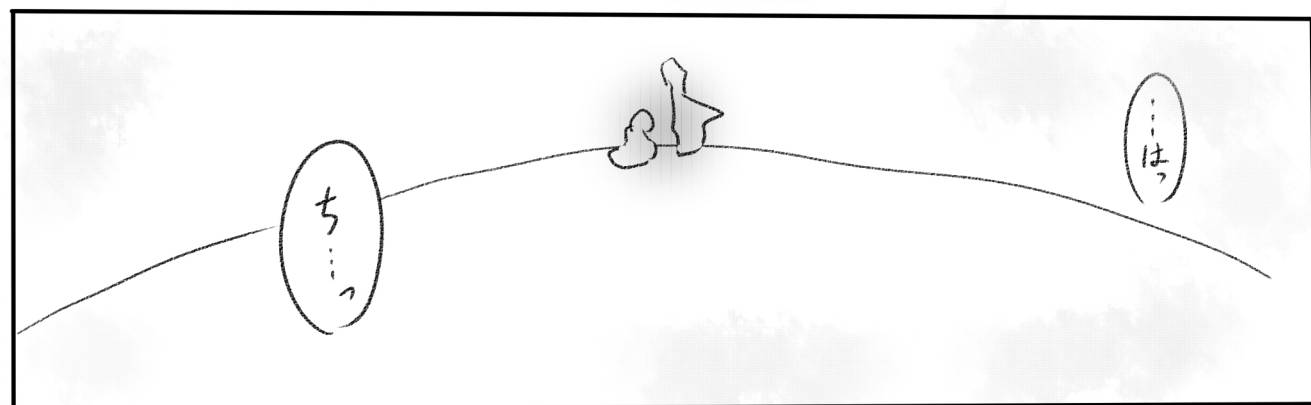
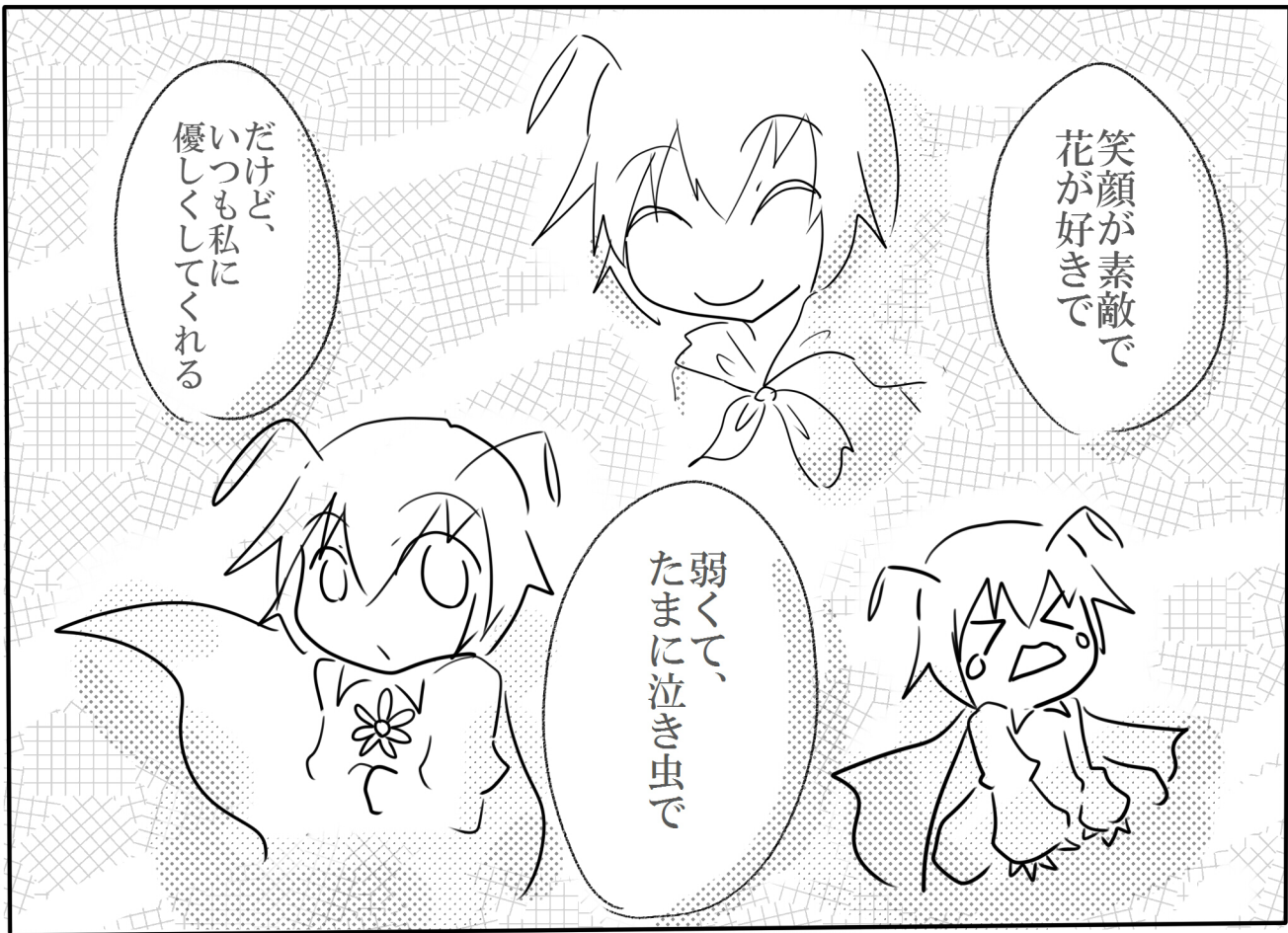
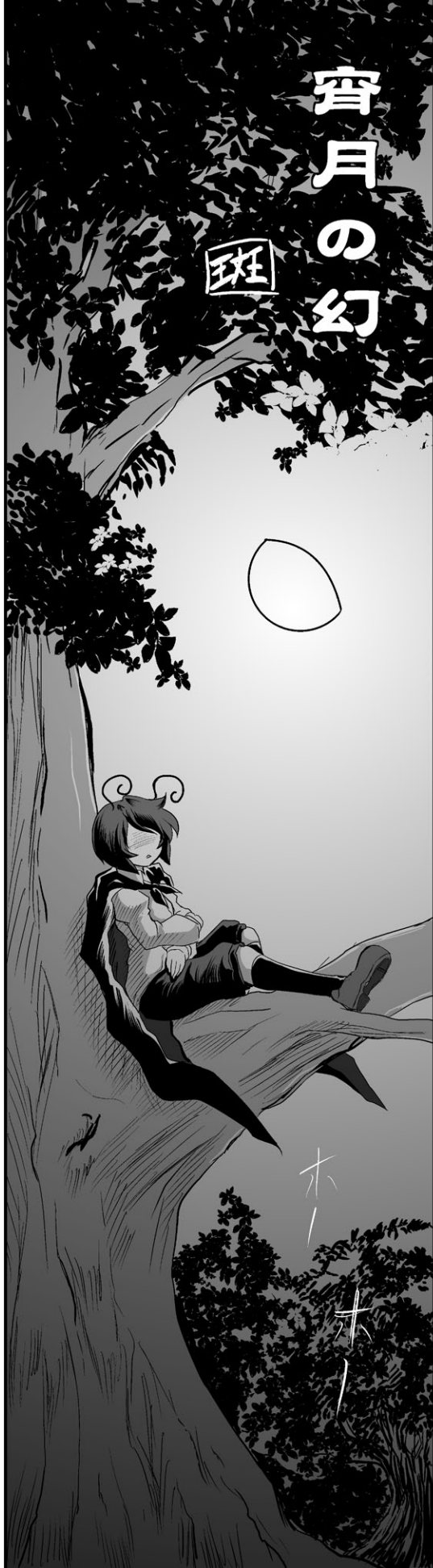
あぁ・・・
そうか、
夢か…
でも…
・・・
ぼ・・・く・・
おわれ

宵月の幻

斑

ホー

ホー

ザア

※鯉は蛍の幼虫のエサであるカワニナを食べてしまいます

毎年妙な幟が出てると思ったら
『端午の節句』ねぇ
もっ
もっ
はむ～
ところで何の祭りなの？
道中、何か気づかなかったかな？
……
あー…とそういえば紙の兜被った子がたくさん…
そしてこれはお前の分だ
ぽすっ
およ？
勇ましいぞリグル似合ってるじゃないか
端午の節句はな、「男子」の成長祈願の行事なんだ
んなっ
なっ
なっ
私は女だ～～～！
でも柏餅は二皿程お代わりしました

これは ひどい

描いた人：キッカ

おわっとけ

リグると!
デイドリーム

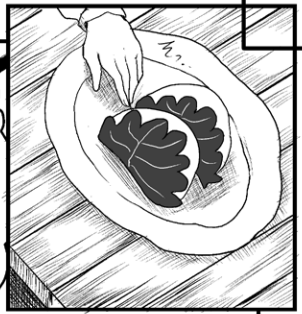
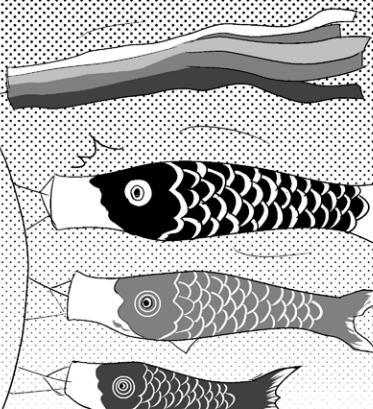
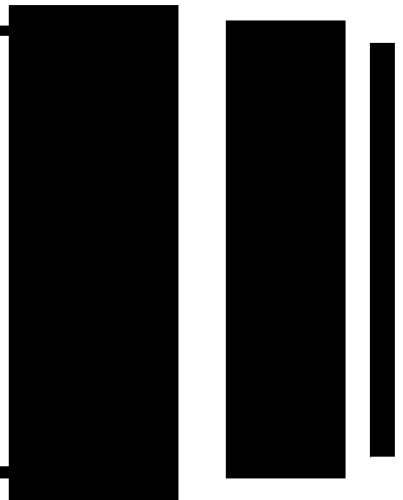
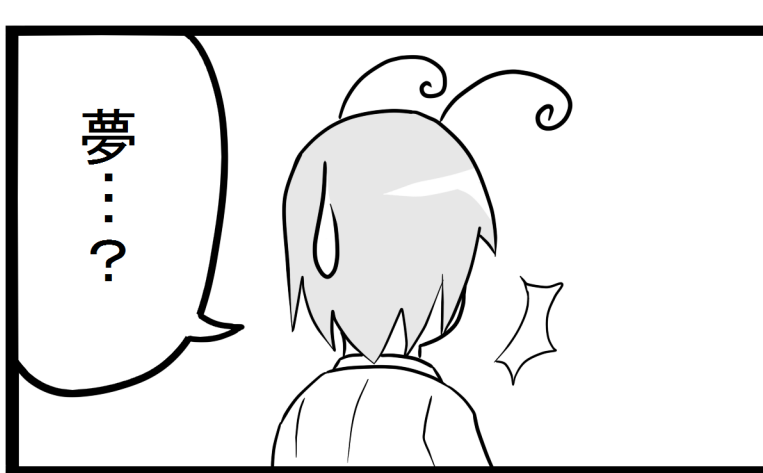
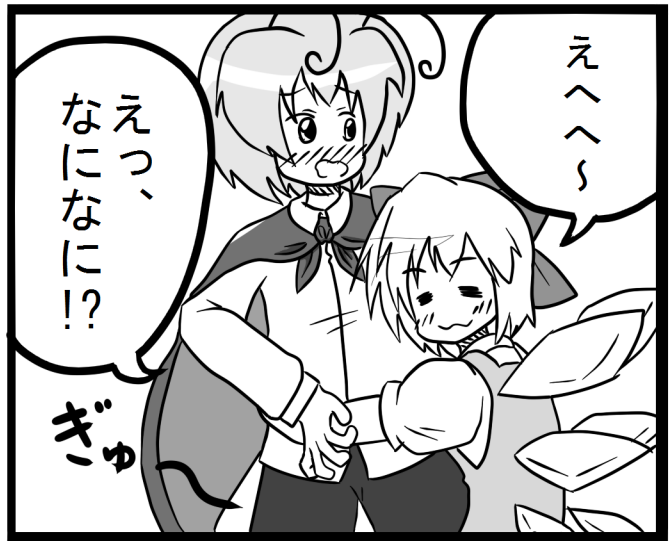
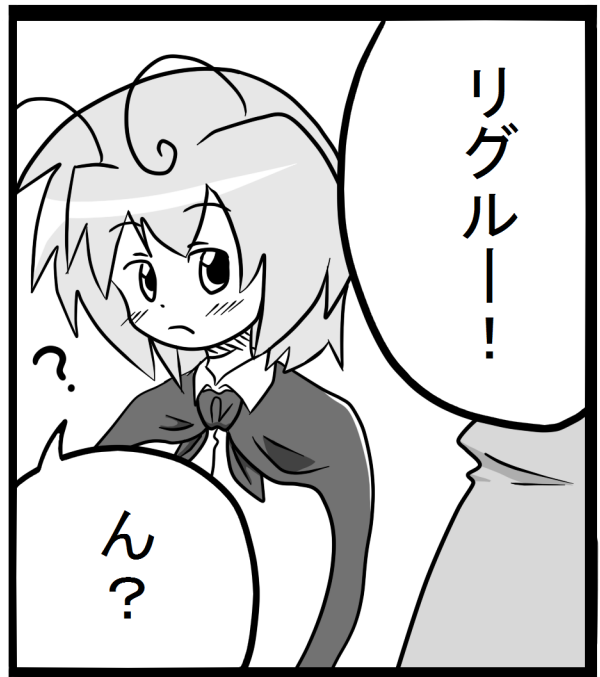
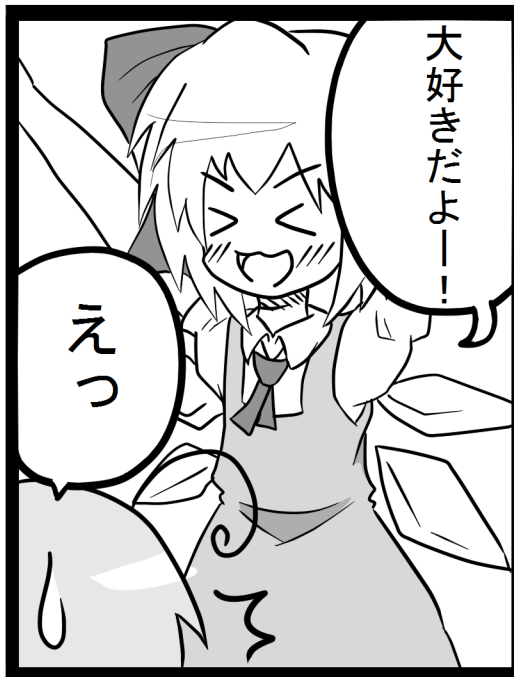
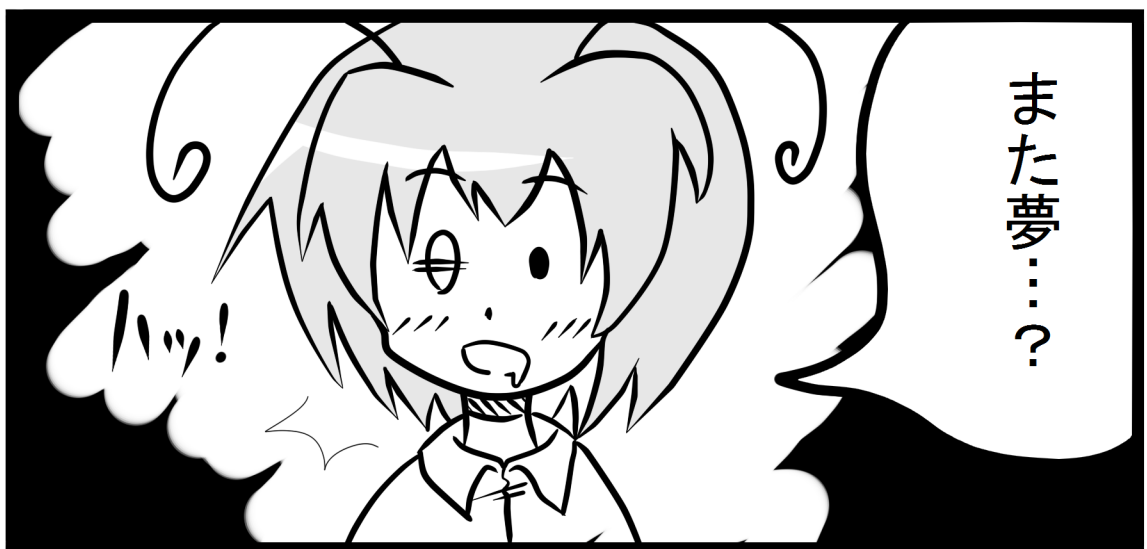
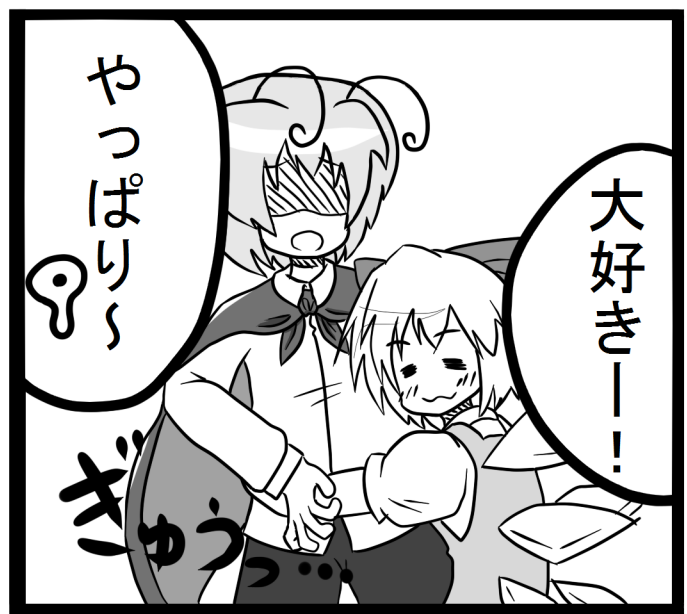
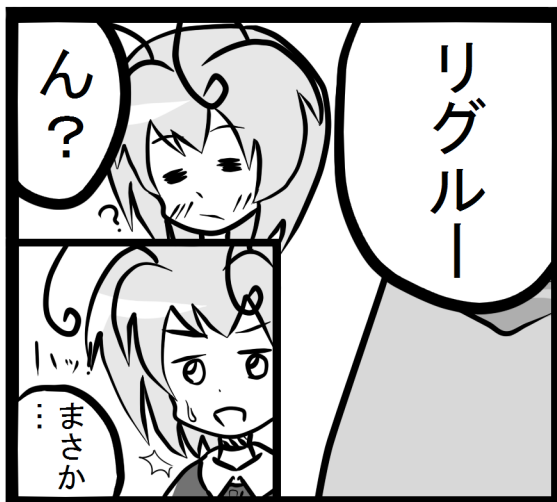
幽香さん…
幽香さんと結婚できるなんて夢みたいです

……あー こりゃ夢ね。
私のリグルが女の子のわけがない

いいえ…ボク、おとこのこですよ…?
なんなら、幽香さんが調べてください…
うおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおお

ゆ、幽香さん、何ですか…?
うん、ちょっとね
調べ物につきあってほしいの

おまけ
世界樹の迷宮3にリグルが主人公として登場していると聞いて!
水無月るーみあ
ほんとにいたあああぁぁぁ
みんなも、世界樹の迷宮3でリグル達と大冒険だ!

ひどぅん

胡蝶の夢

著者：くろと

　私は椅子に座っている。目前には和洋折衷、山盛りの手料理が所狭しと並んだテーブルがある。さらに遠く、私と相席しているのは、緑を髪の毛色とした女性――名を風見幽香、花に長けた妖怪――だ。私は並べられた手料理が、幽香の手料理だと気付く。真鍮の皿に盛られたシチューをスプーンで一口、食んでみる。とてもまろやかで美味しい。私はその一口で虜となった。私の視線に気付いた幽香は、はにかむ少女のように微笑んだ。私は嬉しい気持ちで一杯になった。だからせめてものお礼に感想を述べた。

「違う」

　それは突然の一言である。発想が産み出した、とてつもない違和感だ。その正体を自らの感情が、利発的に問い詰める。目の前の女性は誰か。と、だ。

「幽香じゃない。幽香が私にご飯を作ってくれるはずない」

　悲しいが事実で、私はそれを認めるに至った。それぐらいに私は幽香という女性を知っている。すると目の前が色褪せた。シチューは温もりを失い、サラダは萎れていく。食卓が色と味を失って、無色無味となった。私は席から立ち上がる。

「どうして？」

　それは相席する幽香の声だ。彼女は駄々をこねた子供を諌めるように私を問い詰める。

「目覚めてもいいの？　楽しい時間を捨て去ってまで辛い現実を手に入れたいの？」

　私は幽香を注視し、その質問に応えた。

「あなたが幽香なら、きっとこう言うよ『夢といえど私の自由は私だけのもの』って」

　おままごとに用いられる人形のような幽香は、教本にでも載っているような模範的な笑顔をした。

「私らしいわね」

　私は席を離れ、扉を開けた。

　明るい日差しが私を迎え入れた。だから、目覚めの一歩を踏み出した。

　突如、世界が黒い土色になった。

　それは落し穴だ。

　深く広い、仄暗い落し穴だ。風を切る騒音が耳元で唸っている。短い髪の毛が風圧で圧され、無防備な項を疾風が撫でていく。私は落ちている。とてつもない速度で、地面の底を目指して落下している。重力加速度が私を無理やりに引っ張っていく。手を伸ばしても、足を伸ばしても、壁面に遠く及ばず、いよいよ私が覚悟を決めると彼女は現れた。

「そんなに急ぎで何処行くの？」

　話しかけてきたのは紐で括られた釣瓶落としの怪――キスメ――だ。

　私は聞いてみた。

「帰るには、どうすればいいの？」

「さてね。勝手に飛び出したのはそっちだよ？　でも特別に教えてあげる。かの鼠使いがそうしたように口笛を吹いて、境界線を跨ぐといい。ほら地の底はもうすぐよ」

　キスメが頭上で停止した。私は止まらずに

落ちていく。
　私が地面を認めると、猶予が足りないことを知った。思わず、万人がそうするように反射的に瞼を閉じる。叩きつけられる衝撃は来なかった。うっすら瞼を開くと摩訶不思議なその異世界、地底の灯が目を眩ませる。私は倒れていた。なので起き上がる。と、先ほどのキスメは遠く彼方で釣られている。私は言われたとおり、境界線を目指した。
　塀を曲がると、柳の下で宴会を開いている三人に出逢った。それは日本酒を盃で豪快に仰ぐ鬼――星熊勇儀――に、彼女に酒を勧められて断れ切れない天狗――射命丸文――と、すでに酔いつぶれて鼾を奏でている河童――河城にとり――の三人である。
　私は期待でき無さそうと考えつつ、彼女等に問うてみた。
「境界線って何処ですか？」
　律儀に、けれど酔っ払って応えたのは勇儀だ。
「知らないねぇ。それよりアンタ、飲んでかないか？　今宵は月見酒だ」
「月なんて出てないよ？」
「ああ、月なんて出てないな。だから見るんだよ。出ていない月を心中でね」
　勇儀はまた、盃一杯に注ぎ出した酒を煽る。
　得るものがない。私は宴会場を離れようと歩き出した。が、それを止めるものが一人。それは文だ。彼女は苦笑して懐から液体が半分入った小瓶を取り出した。
「これをもっていってください。きっと役に立ちますよ。……宴会ばかりでうんざりしています」
「そんなことより飲め！　ジャンジャン飲め！」
　私が小瓶を受け取るや、文は勇儀に雁字搦めにされて、その口に酒瓶を突っ込まれた。中の液体が面白いようにドドドと減っていく。よくよく見ると、にとりは寝た振りをしている。
　私は歩き出した。程なく、川のせせらぎを耳にした。私がいくつかの角を曲がり、直進を進み、坂道を駆け上がり、梯子を降りると、それはよりはっきりと耳に聞こえた。
　私が辿り着いたのは大河であり、一本の大きい架橋だった。橋をわたり始めると、すぐに碧眼の彼女――水橋パルスィ――が塞いだ。彼女は吊り上げた碧眼に苛立ちを交えて、私を上から覗き見た。
「何しに来たの？　ここをわたっていいのは、誰も居ないわ」
「でもわたりたいの」
「駄目よ。駄目々々。貴女が誰であれ、駄目なのよ」
　私は困った。大河を渡るには、この橋でなければいけない。さもすれば、川を泳いでいくしかない。と、私が思考を合理的に活発化させていると、パルスィは、はン、と鼻を鳴らした。それは心を読んだように的確である。
「言っておくけど、この川の水は三途の川から溢れた水。足を踏み入れれば、三途の川をわたれなかった亡者どもが貴女を引きずり込もうとするわ」
　私はおっかなびっくり泳ぐのを諦めた。それからさらに迷った。
「……どうしてもわたりたいんです。お願いします」
　私は頭を下げた。
　パルスィは思いつめた表情をした。それから首を二、三度振って、仕切りなおしとばかりに筋を張り詰めた厳しい表情をする。
「私は貴女を通さない。そうでしょう？」
「それでも！」
　勢い込んだら咳き込んだ。私は呼吸を整える。と、ある物品に気付く。それは先ほど渡された小瓶だ。それを認めるや私は思いついた。
「あの、これ、あげます」
「……？　何を？」
「お酒です。さっき天狗からもらった……美味しいです」
　私は小瓶をチラつかせた。パルスィの瞳は、小瓶を揺らすとそれを追って眼振運動する。まるで芒にじゃれる猫のように思えた。私は小瓶を橋上に置いた。そして後ろにちょっと下がった。
「……わたったら駄目だから」
　パルスィは小瓶を手に取り、蓋を開けた。

口をつけると、すぐに飲み下した。パルスィは下戸なのか、たったのそれだけで酔いが回り、橋上に座り込んだ。
「本当に……わたらない……でよ」
　パルスィは寝息を立て始めた。それは睡眠した証明で、今生に対する一時の別れである。私はパルスィを避けて、橋上を歩き出した。その途中から口笛を吹き始める。
「〜〜〜〜♪」
　と、音階良く、歌うようにだ。しかし、私が橋上を三分の二を過ぎたところで口笛とは違う、軋んだ雑音が一回、鳴った。それは足下からの不協和音。私は口笛を止めて眼下を見下した。
「だから言ったのに……」
　後ろでにパルスィが目覚めていた。彼女は、だが、残念そうな顔をしており、首を横に振った。足下の雑音がさらに大きく一回、打ち鳴った。そして左足が陥没する。続いて右足もだ。
「この橋はとても古くてね。所々に腐ってるのよ」
　自由を失った私は腐敗した橋から転落した。
　水中にドボンと落ちた。
　私は流れる清水で必死にもがき始める。しかし、重量感が鉛のように増して、自由には泳げなかった。徐々に溺れていく。
「たすけ——！」
　瞬く間に全身を水中に投げ出してしまった。水中では二の句が繋げない。何とか顔だけでも水面に出そうとするが、それすらままならない。
　川の底面は深海のように真っ暗闇でそこかしこに沈黙が漂っていた。だが、蠢くものたちが気配として感じられる。目に見えぬ彼等は、私に纏わり憑くや水底に沈めようとする。溺死は火を見るより明らか、私は意識だけは手放さまいと努めた。
　そんな誰にも気付かれない格闘が二分ほど続いた時、唐突に腕を掴まれた。それは温もりを持たない冷たいもので、私を強引に引っ張りあげる。水面から飛び出して二分ぶりの外気に触れた。
「がっ、はっ……！」
　飲んでしまった水を盛大に吐き出した。
「こんなところで遊泳するなんて、正気かい？」
　それは亡霊——水兵の衣服を身に着けたムラサ——の声である。と、ここは船の甲板である。ムラサは私の背筋を擦っていた。
「た、助けてくれてありがとう」
　私は詰った声で感謝した。そのついでに問うてみる。
「境界線って知りませんか？」
「どうしても醒める気ね。まぁ、醒めない夢は夢じゃないか。ほらそこ」
　ムラサは人差し指で指し示した。
　それは船室に続く一つの扉だ。
「あれが、境界線？」
　振り向くも、ムラサがいない。あるのは川を渡る船と扉だけだ。私はドアノブに指をかけて握った。それから勇気を出して、半回転させる。扉が軋みをあげて内側に傾いた。
「〜〜〜〜♪」
　口笛を吹いた。扉に入る。
「いい曲ね。作曲者は誰かしら？」
　部屋に入った私を出迎えたのは、テーブルに並べられた皿には温かい料理、一つだけ空いた椅子、そして笑顔で相席する幽香だった。
「なんで……」
　私は驚愕を隠さなかった。口笛を吹いて、境界線を跨いだのだ。ならばそこは現実のはずだ。そう、頭で考えても事実は見てのとおりだ。
「簡単よ。夢から醒めていないだけ、そうでしょう？」
　幽香は麗しく微笑んだ。
「私はちゃんと……」
「したわね。でも口笛を吹いたのも、境界線を跨いだのも貴女でしょう？」
　テーブルと料理が消えた。幽香がワインを一口だけ嗜む。
「口笛を吹くのは誰で、境界線を跨ぐのは誰か。よく考えなさい」
　幽香が消えた。世界は白く染まり、それは四方形の箱と思えた。なぜなら天井があり、部屋の隅に角があり、壁面は鑢で削りきったように滑らかに平らだった。そして残ったの

は幽香と私が座っていた椅子と、私が入ってきた扉だけだ。
「口笛を吹くのは誰で、境界線を跨ぐのは誰か……？」
それは突然の登場だ。
蝶である。一匹の華麗な羽模様の蝶が、ゆったりと飛んでいる。それを私は見た。見たのだ。確かに見た。そして蝶はいなくなる。
「ああ、そうか、分かった」
と、私は呟いた。
「違う。今のは私、私の言葉、そうだよね？」
私は意味不明の台詞を呟いた。
「もういいよ。分かったの。つまりこれは私じゃなくて、あなたの夢だった。私はあなたが用意した劇を演じていた役者。そして、あなた自身は物語を進めるストーリテラー」
違うよ。これはあなたの夢。私じゃない。
「もういいの。私が扉を開けるから、口笛を吹くのはあなたの役目だよ？　ほら、ドアノブに手を掛けた。早く口笛を。もう扉が外側に開いたよ。あと一歩しかない」
～～～～♪
「サヨウナラ、いい目覚めを」
…………
……………

桜唇　～ requiescat in pace ～

著者：西遊

††

桜の森の満開の下の秘密は誰にも今も分りません。あるいは「孤独」というものであったかも知れません。

――坂口安吾『桜の森の満開の下』

††

さつさつと吹き抜ける風が冷えた頬を撫でていく。

くすぐったい風に、堪らずくしゅんと一つ嚔（くしゃみ）をする。

落花狼藉、桜の花弁がはらはらとゆらゆらと舞い踊る。

さやさやと流れていく温い風が、緑の髪を靡かせていく。

暗い空。まだ日は高いのに、花弁が空を埋め尽くしている。

来来世世、花も人も妖も、生まれて、そして儚く散っていく。

「野山も里も……か。それで、そこな蟲の妖怪、こんな辺鄙なところに何の用だ？」

見渡す限りの桜の木は、春という春の彼方まで届けと云わんばかりに、あらん限りの根と幹と枝と葉と芽と蕾と花を精一杯に目一杯にどこまでも伸ばしている。桜という具現化した春を、幻想の涯（はて）まで広げるようにどこまでも。

「いや、気がついたら、ここにいただけで……」

霞か雲かと見紛うほどの桜吹雪に圧倒される。この世の全ての桜が咲いていると思い込んでしまうほどの、吹雪。しかし、その中にも――桜の森の満開の中にも、一本だけ、一つの蕾もつけていない大樹があった。一本だけ、春が訪れていない木があった。

朝日に匂う桜吹雪の中、それは堂々と、しかし張る葉も花も無く、寂々と佇んでいた。

「桜、と、言えるのだろうか……この木は。人の血を吸い、妖気を纏った、この花咲かぬ樹は」

桜花も咲かぬ、桜の蕾も生らぬ、桜の葉も生えぬ、何の木かも、わからない木。何故ここにいるのかわからないリグルの目の前に、飄々と、意にも介さず存在し続ける木。

ざぁ、と、花無き桜は揺れて、

かぁ、と、顔面が熱くなって、

リグルは、音も無く、倒れた。

††

そんな、夢を見た。

夢だと、思っていた。

「西行妖の妖気に中てられて倒れるなんて、まだまだヒヨッコね……ねえ、蟲の妖怪さん？」

気がつくと、リグルは誰かの膝を枕にして眠っていた。視界はまだぼやけていて、それ

でも聴覚が、ほんわかとした春風のような朗らかな声を捉えている。
「…………？」
　しかし、夢と現が未だ意識の中に混在していて、リグルは呆けた声すら出せなかった。まだ夢の中にいるような摩訶不思議な浮遊感、色のついた空気が意識の回路を巡っているような感覚。それはまるで、夢の中で夢を見ているような――。
「ほらっ、早く起きなさいな」
「うぴゃっ⁉」
　そんなことをうつらうつらと考えていたら、ぺちんと軽く頬を叩かれた。まだ冴えない頭に、痛覚からの軽い痛みの信号が駆け巡る。
「い、いひゃい……ぅえ、あ、れ？　ここは……？」
　ようやく我に返って瞼を開いたリグルの視線の先には、見慣れない桃色の髪の誰かがいた。見慣れない、桃色。それでも、それを見たのがたとえ一度きりでも、見慣れていなくても、それが畏怖の対象として、リグルの記憶に残っていた。
　この姿は、あの永い夜の――
「う！　え？　お⁉　な、何でここに亡霊が……」
　驚いて飛び起きようとしたけれど、金縛りにあったように体が硬直していて、リグルは身動きが取れず、ただ体を揺らしただけになってしまった。
「亡霊、ね……失礼しちゃうわ。私にはきちんと、西行寺幽々子という名前があります」
「わ、私にだって、蟲の妖怪じゃなくて、リグル・ナイトバグっていう名前があるよ！」
　反論にもなっていない反論をするリグル。その初々しさに、幽々子は艶やかに笑みを湛える。
「じゃあ、早速だけどリグル、少し目を瞑ってくれないかしら？」
「えっ？　いいけど……」
　そのふわりと柔らかい笑みに、リグルは素直に首を縦に振って恐る恐る目を瞑った。そして、目を瞑ってから、ふと怖ろしくなった。
　記憶が正しければ、その冥界の亡霊は『死を操る程度の能力』を持っている筈だ。――死、それは人間でさえも妖怪でさえも、命有る者全てが怖れる事象。終局、終末、終焉。それを操る者の前で安々と目を瞑るだなんて、あれこれもしかして最近流行の死亡フラグというやつじゃないのかななどと思い、しかしそれでもリグルは従順に目を瞑り続ける。承諾してしまったからには目を瞑るしかない。体が恐怖にぷるぷると可愛く震える。
　そして、
　ちゅ、と。
　唇に、柔らかい感触が触れた。
「――――ッ⁉」
　キスされた。
　キス、接吻、口接、ベーゼ。
　突然すぎるそのキスに、リグルは反抗するでもなく反駁するでもなく抵抗するでもなく憤怒するでもなく欣喜するでもなく、ただ固まってしまった。体が岩にでもなってしまったように、とある友人の氷精に氷付けにされてしまったように。
　別にキス自体は恥ずかしくもなかった。妖怪として長い時を過ごしていれば、キスの一回や二回は経験する。――リグルは、実は初めてだったのだけれど、それでも唇というプライベートな部分同士を、女性同士で触れ合わせるという行為に、リグルは言い知れぬ緊張感と背徳感を味わってしまっていた。
　しかし、刹那の感触は、あっという間で。
　そして、いつの間にか、唇は離れていた。
　それとともに、硬直していた全身が弛緩していく。すっかり腰が抜けてしまったのか、文字通り腰抜けにされてしまったのか、せっかく動くようになった体は動かず、乾いた笑いしか出てこない。
「西行妖の狂気、とでも言うのかしら？　貴女の中に巣食っていたそれを、私の能力で『殺した』わ。これでもう、大丈夫のはず」
　なるほど、それで体が思うように動かなかったのかとリグルは納得して、しかし一つだけ納得できなかった。
「だ、だったら、別に、キ…………………ス、じゃなくてもよかったじゃないか！」
　まだ柔らかな感触と肌の温もりが幽かに残っている唇を押さえながら、リグルは狼狽する。どうしてこう力の有る者達は、挙って

腹の内が読めないのだろう。
「だってほら、リグル、貴女の唇、桜みたいで可愛かったから」
　キスという単語を口にすることすら憚るリグルの眼前曖昧三センチ、嘗め回すように舐るように、幽々子は艶かしくリグルを見遣る。

　熱い吐息が、春に似つかわしくないなと、そうリグルは思った。
「それに、桜の森の満開の下は、誰もが足を竦ませてしまうぐらいだもの。後ろを向いたら鬼がいたりして、ね♪」
「洒落にならないね、それ……」
　ついでに理由にもなってないねとげんなりする。
　確かに桜の木というものには伝説が付き物だ。――或いは、憑き物だ。
『桜の樹の下には屍体が埋まっている!』

　都市伝説。街談巷説。道聴塗説。
　噂は噂、語り、騙られ、話半分。
　ならば、もう半分は真実なのだ。
「風が吹いている音は聞こえるのに、風は吹いていない。吹いていないのに、肌寒い。……怖気、という感覚かしら。亡霊の身としては、些か理解しがたいけれど」
　亡霊の体は、人間ほど温かくないという。
　しかし、先ほどの口付けでは、彼女の唇は温かかった。その事を思い出して、リグルは顔がカーと熱くなったのを感じた。
　しかし、ふと思う。
　桜の伝承が恐ろしいのは、桜の花が綺麗だからだ。満開の桜の花が美しいのに、その下に死体が眠っているかもしれない、その美しさは人間の血を吸っているからだというギャップこそが、人々の恐怖心を煽るのだ。
　ならば、あの花一つもなかったあの木は。
「――あの木は、いつ咲くんですか?」
　気づけば、リグルは彼女に訊いていた。
　花は咲くものだ。ならば、あの木は。
　一体何の為に、存在しているのか。
「西行妖のことかしら? ……あれはね、咲かないの」
　咲かない。
　花を咲かせる木であるはずなのに。
　それは、存在の自己否定だ。
「西行妖は、不完全で不可解なの。なのに、不可解な一つのピースなのに、一欠片だけで完成してしまっている。――いえ、正確には、もう一ピース、あるはずなの。不完全で不可解を、完全で理解の範疇に昇華させている犯人が、あの下に、埋まっているはずなのよ……」
「ちょっと、虫頭の私には理解しかねるんだけど……」
　一番不可解なのは、今の言葉だったような気がするのだけどとリグルは漏らす。それでも、最後の言葉だけは理解できた。つまりはあの木の下に、伝説でも何でもなく、本当に何かが埋まっているのだ。
「いいのよリグル。理解できなくても。その代わり、やってもらいたいことがあるの」
　ずい、と幽々子が詰め寄る。何かのきっかけで、また唇が触れてしまいそうなほどの距離。ふわりと靡いた髪から、仄かな桜の香りが漂って、リグルの鼻腔をくすぐった。
「春を、集めてきて頂戴な」

††

　そんな、夢を見た。
　夢だと、思っていた。
「でも、夢だったら、疲れたりしないよなー……」
　白玉楼の庭に面した、長く長く長く長く長く長く長く長く長く長く長くとにかく滅多矢鱈にひたすらにとことん長い廊下を、リグルはひたひたと歩いていた。
　風の噂では「あの世の庭はすっごくでかい」と聞いていたので、それに面しているこの長い廊下も長いのだろう。幽々子は「いつも聞かれたときには、二百由旬ぐらいって答えてるわ」と言っていたが、そもそもリグルには、二百由旬がどれほどの長さなのかわからないのだった。それでも頭の片隅で、とりあえず長いのだろうと解釈する。これまた風の噂で「でもその二百由旬は誇張表現」だと聞いたので、結局は、ただ長いのだろう。長

さの尺度は人それぞれだ。一光年が長いと思うものもいれば、一寸すら長いと思うものもいる。
　考え方は、人それぞれ。
　蓼食う虫も、好き好きだ。
　徒然とそんなことを思いながら、リグルはまだ廊下を歩いていた。というよりは、廊下を右往左往していた。
　右往左往、右顧左眄（うこさべん）。
　見渡したところで、誰もいないのだ。
　人っ子一人、冥界なのに、亡霊さえも。
　しん、と静まり返った世界。音や空気でさえも死んだ世界に、リグルはただ一人存在していた。夢で出逢った剣士でさえも、今はいない。
　――そも、何故私はここにいるのだろう。
　よく考えたら、私は全くの無関係じゃないか。片や冥界の姫、片や只の蟲の妖怪。関連性がない。普通に生きていては、出逢うことすらないだろう。それなのに、何故出逢ってしまったのか。そして、何故私はこうして春集めに従事しているのだろう。――それは、彼女に春を集めてきてと言われたからだ。その言葉には、リグルに有無を言わせぬ気魄があった。
　春を集めれば、西行妖は咲くだろう。
　根拠は無いと、彼女は言った。
　そして、それでもやってみなければわからないでしょう？　とも。
　春という春をその根から吸い尽くす、咲かない桜。貪婪（どんらん）に春を求める、空（うつ）ろな桜の樹。そんなに春を求めて、一体何になるというのか。
　――そもそも、これは現実なのだろうか？
　リグルは首を捻った。もしかするとこれは夢で、そして時系列が入れ替わっている気がしてならないのだ。彼女と、幽々子と出遭ったのはあの永い夜の時で、それは秋だ。そして今は春、終わらない冬の話。もしもこれが本当に夢だったのなら、どうとでも理由が付けられるのだろうけど。
　疑問は尽きない。尽きないが、しかし考えたところで解決しそうな展望はない。むしろ考えすぎて、お腹がエンプティランプを点滅させている。リグルは妖怪であるから、別に食べなくてもしばらくは生きていけるのが、それでもやはり、空腹は辛い。辛いものは辛い、それは当たり前のことなわけで。趣味として人間同様に食事を摂ってしまうと、腹減りがこんなにも辛くなるのだ。
　知恵熱、空腹、筋肉疲労。心身ともに困憊してしまって、リグルは廊下に座り込んだ。廊下でありそして縁側でもあるから、足を投げ出すにも丁度良かった。座った廊下の木目から伝わる冷たさが、妙にお尻に冷やっこい。状況が状況だが、リグルはぶらぶらと足をぶらつかせて、そしてはたと気づいた。
　そういえば、靴は何処だろう。
　気づいたら廊下を歩いていたから、どこかに置いてあるのだろうけど、よく見ると靴下も穿いていなかった。つまりは素足で、ああ、だから足の裏が冷たかったのかと今さら思った。そういえばマントもない、あれシャツは……さすがにそれはあったけれど、心配になってさすがにズボンは穿いてあるよねと、太腿辺りに手を伸ばし、
「あれ……？」
　穿いてなかった。
　つまり、下半身に何も穿いていなかった。
「――――――!?」
　パンツすらも穿いていなかった。
　裸ワイシャツの状態である。
　えっちである。
　小説という体系であるから、今このリグルの露（あらわ）な姿をお見せすることはできないが、それにしてもこれは一体全体どういうことなのか。理解不能を超えていて、最早リグルは恥ずかしいという恥辱感すらも湧かなかった。とにかく説明が欲しい。何でこんなことになっているのか。今この状況のマニヤルが欲しい。わからないことが多すぎて、なんだか辛くなってきた。
　だんだんと考えること自体が億劫になってきて、リグルはそのままパタンと仰向けに倒れこんだ。倒れこんで、ああ、お尻と太腿冷たいなーと、どこか冷静な頭でそう思った。何が悲しくて下半身丸出しで寝転がらなければならないのか。悔しさと共に目頭が熱くなってきた。主に悲しみで。
　そんなわけでリグルは今、開けっ広げ状態

である。縁側に下半身丸出しの蟲少女がいると知ったら、ここの主は何と驚くだろうか。そもそも本人ですら驚いているのに、他人から見たら驚愕ものだろう。
　閻魔様にでも知られたら、即『黒』だろう。
　こんなところに閻魔様が来るとは、到底思えないけど。
　……などと思考を巡らせていると、いい具合に心地良い睡魔が体を襲ってきた。空腹と疲労が、睡魔を呼び寄せたのだろう。妖怪の身だというのに、寒さに弱い蟲だからか、何故か睡魔だけには勝てなかった。
　瞼を閉じる。閉じて、ふと眠るのが怖くなって、瞼を開く。それでも眠気には勝てなくて、自然と瞼が落ちていく。
　深く深い黒の中に、落ちていく。
　華胥の国で、華胥の国に遊びに行くなんて、不思議な感覚だなと、そんなことを断片的な思考の片隅で思って、そして、意識は、そこで、途絶えた。

††

　そんな、夢を見た。
　夢だと、思っていた。
　目を開いた先、何を考えるよりも先に、その言葉を呟いていた。
「咲い、てる………」
　西行妖が、咲いていた。
　決して咲くはずの無い木が、咲いていた。
　――しかしそれは、満開ではなかった。
　参分咲、だろうか。少なくとも、半分も咲いていない。美しい開花のはずなのに、その開花はみすぼらしく、儚く、しかしそれでいて妖艶だった。
　目立つ色は、茶。幹と枝の茶色が、桜色で隠されるはずの体幹が曝（さら）け出されていて、それを隠すはずの桜色も、花開いた傍からすぐにひらひらと散っていた。
　咲いて散るのが花だと、その姿で語るように。
　散った花弁は積もり積もって、木の下に桜色の絨毯を広げていた。リグルがその絨毯に飛び込むと、優しく柔らかく受け止めてくれた。その花の絨毯に寝転がり、目を細めて枝の間から空を仰ぐ。
　青。
　春待つ冬独特の、何処までも澄んだ青。
　その青色の中を、桜色が吹き荒ぶ。春という春を吸い取ったのに、結局遂に花で満ちることも叶わず、ただ淡い花弁を青の中に舞い散らしていく。
　と、ふと、リグルの視界に、一匹の虫が現れた。目を凝らさなければすぐに見失ってしまいそうな小さな虫が、視界の端に留まる。
　その虫は、ひらひらと舞い散った一片の花弁を全身で抱えるように掴み、そして羽をはためかせて、どこかへと消えてしまった。
　ふらふらと、頼りなく。
　気づくと、一匹、一匹、また一匹と、虫はどんどん増えていく。桃色と青色の淡い世界に、黒色の存在が多くなっていた。
　増える黒は、最初の一匹と同じように、花弁を掴んではどこかへと消えていく。
　春が、散らばっていく。
　その虫たちを見て、リグルは理解した。
　ああそうか、虫たちは、奪われた春を、幻想郷に戻しているんだなと。
　春が奪われたせいで永遠の冬のままの幻想の世界に、春を戻しているのだ。
　――これで幻想郷にも、ようやく春が訪れるだろう。
　虫の現れは、冬と春の境界だ。虫が現れれば、それは春。その頃にはもう、小さな芽は出ているだろうから。
　そう考えると。
　リグルは思う。
　誰かが、冬と春の境界を破るために、私をここへ連れてきたのだろうか？　蟲の妖怪である私を使って、春を戻させようとしたのだろうか？
　そう考えることも、出来るのかもしれない。
　でも、もうそれは解決してしまったのだ。
　結局、西行妖は咲かなかったのだから。
　そして、体を起こしたリグルの、視界の先、
「――――――」
　呆然と、彼女は立っていた。

長短二刀を携えて、ただ唖然と、それを見上げていた。
　悲喜交々の表情が、顔に張り付いている。彼女は、何に悲しんでいるのだろうか。彼女は、何に喜んでいるのだろうか。主の悲願が、ついに達成されなかったからか。主が、これでもう無理をしなくなると思ったからだろうか。それとも、この妖しく醜く咲き誇る桜に心を打たれて、何も思っていないのか。
　リグルには知る由もなく。
　冬が終わり、春が訪れる。
　夢は終わり、現に覚める。

　嗚呼、桜よ、せめて安らかに眠れ。

　そんなことを思って、彼女を見遣り、桜を見遣り、そしてリグルは、そっと目を閉じた。

　††

　そんな夢を見た。
　夢だった、ような気がする。
　しばらく冬眠と称して、一ヶ月ほど蟄居して眠り込んでいたからだろうか。どこか不思議な夢を見たような気がする。
　気がする、というのも、何故だか夢だった感覚があまりないのだ。
　むしろ、現でしっかりと時を刻んだような感覚と記憶が、脳裡にしっかりと焼き付いている。
　それでも、リグルは一ヶ月、眠りこけていた。それは事実だ。その間に知らず知らずの内に外に出ていたとなれば、あとは夢遊病を疑うしかない。無意識か、無意識なのか。
　そう云々と、一人隠れ処のベッドの上で唸るリグルの掌から、はらりと何かが舞い落ちた。
「…………？」
　はて、自分は無意識の内に何かを握っていたのだろうかと、落ちた物をまた拾い上げ、
「――ああ、もう春なのか」
　いつの間にか、そう呟いていた。

　はらりと舞い落ちたのは、一片の桜の花弁。

　リグルは、寝続けて少し寝汗が染み込んでしまったベッドを軋ませて、そして一ヶ月ぶりの大地に降り立った。
　手に握るのは、一片の桜の花弁。
　何故だかリグルは、あの咲かなかった妖の桜の下に行ってみたくなった。
　畏れ多くも美しく、凍てつくような空気を纏う、あの桜の下へ。
　あの桜の木に、春は来たのだろうか、それを確かめるために。
　外では春一番が吹いているのだろうか、萌える新芽をも吹き散らすほどの風が窓を強く叩いている。花が開けば、蟲も賑わい始めるだろう。もしかすると、もう賑わい始めているのかもしれない。
　この風ならば、桜吹雪が綺麗だろうなと、
　夢見心地で、リグルはそんなことを思ったのだった。

（了）

〈作者コメント〉
　――さて、さて、リグルは何回夢を見た？
　パロディ・雛・桜・夢オチ。特集四つをまとめてドン、一粒で四度美味しい仕様となっております。お蔭で変なＳＳになりました。
　パロディ、というほどでもありませんが、『桜の森の満開の下』からいろいろと……あの小説の冷ややかな空気感を描写できていたらいいなー、とか思ったり。
　あと、遅くなりましたが、例大祭お疲れ様でした。ナイトバグで告知していた方々は、ひっそりと遠目で視姦させていただきました。一言で言うなら、楽しかったです。そのせいで先月投稿できなかったりしたのですが、リグラーの方々が素晴らしい作品を続々と……流石です。りぐるぐるぐる。
　そういえば、桜は散り際が最も美しいんですよって、どこかの誰かが言っていたような気がします。それではまた。

作者 取材のため
蟲の手帖はお休みです

描いた人
HOUSE

失礼ね
プレゼントは本当なのよ?
…はぁ
大天使

幻想郷の民がどう足掻いても辿りつけぬ地ー…
琉球へと誘ってあげようと言うのに
本当!?

私!私ね!一度でいいからツマベニチョウやオオゴマダラの飛翔が見たいの!!

空気読みなさいよ そこはラフテーが食べたいとか……
天の意志は何を求めてるのよ!?

せっかくの琉球よ? 蟲以外に何かなくて?
えー…
私から蟲を取ったら何が残るのよう
ー…あ コレ美味しい

じれったいわね!! 海よ!! 海!!!
あーあぁ!!

コガタウミアメンボ
のようなもの
そうだ ウミアメンボも見たい! 海洋へ進出した数少ない蟲だし 今後のためにもぜひ!

蟲はいいから空気をお読みなさい 海といったら水着のほかに何があるの!
ちょ…ッ 天の意志は私のレゾンデートルをぶっ壊そうと!?

ー…いやいやいやいくら夢でもコレはどうかなぁ!?
ていうか私蟲取りしないよ蟲撮りだけ
第一泳ぐ気ないのに水着だなんて…

あら興味がないの？蛍の幼虫は水棲だからてっきり泳ぐのは好きかと
いやまぁ外国には泳ぐ幼虫もいるらしいけどさ
ルキオラ・サブストリアータ？
そもそも私は成虫だ
エラ呼吸ができるだけよ這いはするけど泳げない

まぁ問題ないでしょう人体は水に浮くものだし
しゃべるときは人の目を見なさいよッ

ー…って夢を見てさぁ
なんかずっと食べてる気がする
…道理でうなされてたわけだ
人ん家の布団で

夢でよかったよあんなデタラメー！
おかわり。
ちょっとは遠慮しろ
…はは

まぁあながちデタラメでもないんじゃないか？
腰回りの浮き袋とか
びくっ
う。

…寝て覚めたらなかったことにならないかしら
むしろ増量するだろう食って二度寝は

そのいち

妹紅さん、妹紅さん♪

えっ、妹紅さん？
今輝夜と喋ってんだけど、何？
ざまぁ

そんなぁ・・・。
今から輝夜とラブラブしてくるから付いてこないでよね！
ラブラブ

待ってぇえ！
行こ行こ！
リグルざまぁ

リグルともこたん

夢オチ編

そのに

妹紅さん
行かないで・・・
うう…
ずしゃ

妹紅さんぅぅ・・・
ひっく えっぐ

ぐあばっ

夢か・・・
よかった・・・
べそべそ

そのさん

誰だよー。
人が気持ちよく
寝てるのにさー。
もござまん!!

ゴフッ
ごでっ

紅妹さん！！
僕のこと好きですか！？

い、いきなり
どうした！
やっぱり
嫌いなんだあぁ！

そのよん

何て言ったんですか？
・・・好き

好きです！

僕も大好きです
てへ
なっ！

ぷぴゃー

そのご

魔理沙さんだ！
お前たち仲良しだな！

付き合
デへへ
親友なの！

リグル!?!!
え!?!!
いいでしょ!!
いいな!!

よしよし
リグル…

飛ばしてもいいかも知れません

ほしたりぐる

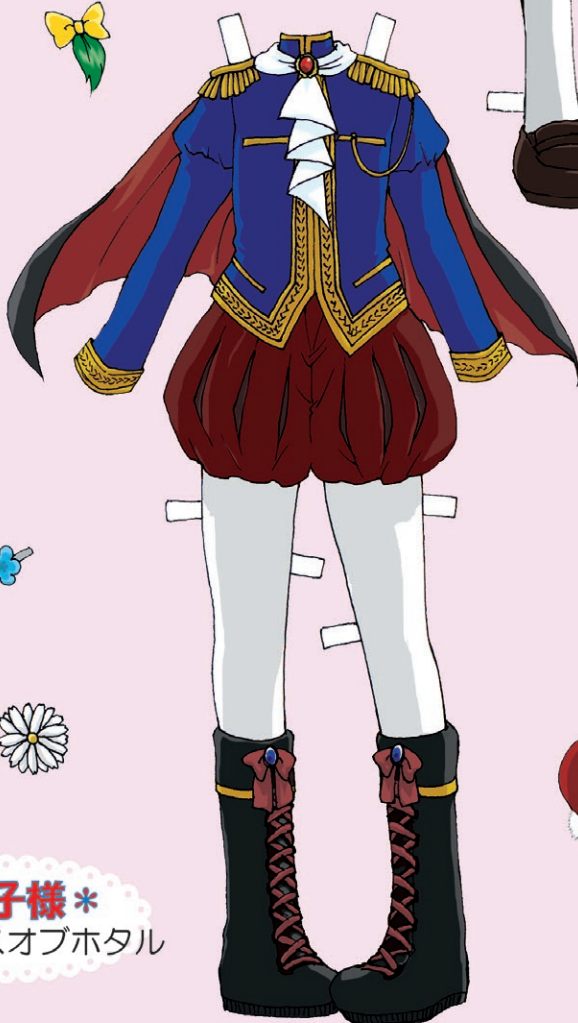
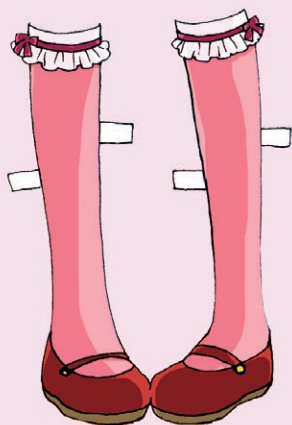
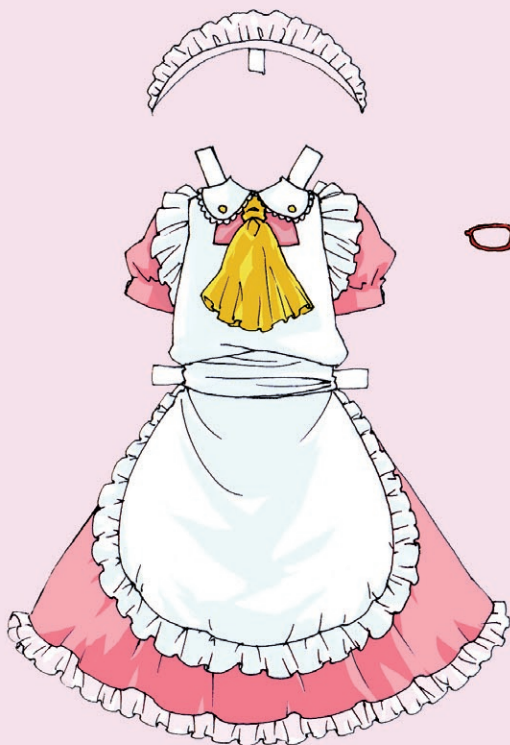
～はっ！夢か。編～

描いたひと：悠羅恵

夢だから許してくれるよね

ここから現世

ムリヤリ
終

●作り方●
①プリンタで印刷します。
②リグル本体の裏に厚紙を貼り、周りをきれいに切り取ります。
③服や小物なども切り取ります。
④お好きなものを着せたりつけたりして楽しみましょう。
⑤自分の好きな衣装を作って着せて自分だけのリグルにしてみましょう。
⑥ていうか絵が描けるなら是非月バグに投稿しましょう。
⑦ほらそこの貴方も！小説、小話も大歓迎ですよ！
⑧本当に一周年おめでとうございます！！！
⑨布団を作って寝かせ、開口と汗を付ければ「はっ！夢か。」の完成です。

＊セーラー服＊
脱がさないで
＊メイド＊
ご奉仕します
＊王子様＊
ザプリンスオブホタル

＊お姫様＊
むしひめさまひとり

●「はっ！夢か。」の例●

リグル妄想

著者：悠奈

「ん・・・」
　何時ものように眼を覚ます。何時ものように明るい日差し、いつもの天井・・・が無い
「あれ?」
　眠い眼をこすりぐるりと周りを見る。そこには見慣れた天井はなく、何処までも続く真っ白な空間があった。
「ここ、どこ?」
　困惑する私。その目の前に一人の人間が空から降りてきた。
「リグルよ・・・」
「あなた・・・誰?」
「私はただのしがない一人の月バグの読者ですよ。」
「・・・はい?」
「気にしないでくれたまえ。ただのメタ発言だ。」
「めた・・・?」
　どうもこの人が何を言っているかわからない・・・
「さて、リグルよ。今この空間で君は私の思うがままだ。何故ならそれが私の能力だから」
「・・・」
　とりあえずこのよくわからない人の話を黙って聞くことにする。それ以外することもなさそうだし。
「例えば・・・そうだな、リグルよ!君を男の娘にするっ!」
「・・・は?」
その瞬間リグルの身体を光がつつむ。
「わっ!な、何!?」
　身体に異常は・・・無いよね?そう思い身体を触ると。
「・・・あれ?」
　胸が・・・!少しはあったはずの胸が!
「な、・・・無い!」
　混乱する私。それを見て笑う人
「ちょ、ちょっとどういうこと!?」
「はは、変わったのは胸だけかな?」
「・・・え?」
　身体のすみからすみを触ると・・・
「え・・・こ、これは・・・!?」
「男の娘にしたんだから『ソレ』があるにきまっている。」
「きゃあああああああ」
　な、な、な、何!この物体は・・・!?え!ま、まさか・・・!
「男の娘でもかわいいよ!リグルきゅん」
　その言い方むかつく!キッ!と私はその人を睨みつけ、首を絞めてゆさぶる
「治せ!今すぐに治せ!!!」
「わ、わかったよ」
　その人が指を一振りするとまた私を光がつつむ。
「あ・・・治った・・・?」
　治ったのを確認するとその人を解放する。
「さぁて、次はどうしようかなぁ・・・」
　そういってる人を睨むとニヤニヤしながら考えている。

好きな項目を選択。

1
A）メガネっ娘にする
B）裸眼で

A
　えいっとその人が指を横に振ると私の身体を光がつつむ。
「わっ！今度は・・・何ッ！？」
　光が消えた瞬間、リグルは目の前にもやがかかったように見えた。
「え！？な、何これ！前見えない！」
「リグル、前が見えないのかい？ならばこれを・・・」
　そうしてその人がどこからもなくメガネを取り出し、私に差し出した。
「あ、ど、どうも・・・」
　私はそれをつける。あ、よく見える
「いいよ！リグル！よく似合っている！」
　褒められた・・・のかな？
「あ、ありがとうございます・・・？」
「はは、さて、次は・・・」
↓2へ

B
「うーん何にしようかな・・・」
　その人は何やら悩んでいるようだ。私に変化が無いから問題無いみたい・・・
↓2へ

2
A）大人なリグルにする
B）ようじょなりぐるにする

A
「あ、あれ？」
　リグルは困惑する。自分の身体が大きくなっているからだ。
「いいね！色っぽいよリグル！」
　その人はすっごく嬉しそうな顔をしている。
「え・・・あ・・・！」
　胸を触る。お、大きい！まるでどこぞの幽霊お嬢様や死神並に大きい！
「あ、あぁ・・・！」
　なんだろう、この嬉しさは。自分に自信が湧いてくる・・・！
「素晴らしい！リグル！まさに私の理想だよ！」
　さっきまでなら蹴りをいれていただろう、その台詞を聞いても今回だけは何故か許す気になったから。こいつを許してあげよう。
「さぁて次はどうしよっかなぁ」
↓3へ

B
「ん？何も変わって・・・って、あんたでかくなった？」
「私は何も変わっていないよ。」
　ニヤニヤしながら答える人。でもさっきよりでかく・・・
「って、ま、まさか・・・」
　自分の身体を見てみる。胸が・・また無い！てか、ちっさい！私ちっさい！えぇぇぇ！？
「何よ！これ！！」
「小さいりぐるちゃんもかわいいよ！」
　くそ、この身体じゃ首も締めれない・・・！
「うぐぐ・・・！」
「さぁて次はどうしよっかなぁ」
↓3へ

3
A）スカートを装備させる
B）メイド服を装備させる

A
「あれ？何かスースーする・・・？」
　下半身が何故か寒い。気になって見てみると
「な、何これ！スカート！？」
「女の子らしい格好もしなくちゃね」
　またニヤニヤ笑ってる・・・この人変態だろうか？
「ス、スカートなんて私には似合わないよ・・」
「何を言うか！りぐるんがどんな格好をしても喜ぶリグラーだっているんだぞ！」
　・・・この人変

↓4へ

B

「え・・・!?な、何これ!」
　何時の間にか服が変わっていた。
「存外似合う!メイドリグル!（おそらく）一部のリグラーの願望がここに叶った・・・!」
　・・・この人変だ
「その格好だったらご主人様とか、お嬢様とか言うのがセオリーだが、ここは読者の脳内で再生してくれたまえ」
「どくしゃ?」
「・・・メタ発言を気にするな」
「・・・?」
よくわからないけど、とりあえず恥ずかしい・・・
↓4へ

4

A）ボクっ子にする
B）やっぱり男の娘体質にする

A

「ちちんぷい」
その人が変な呪文を唱える
「こ、今度はボクに何をしたの?」
　・・・ん?
「あ、あれ?ボク何か変・・・」
　・・・あれ?
「あー、あー・・・ボクはリグル・・・って、えええ!ボクって言ったらボクになる!っておかしい!私の言動がおかしい!」
「私をボクに自動変換するようにしてあげたんだ。んー、君ほど似合う子もいないよ!はっはっは」
「あう・・・まぁ、今回は軽いから許す・・・」
　うー、何だよこの人。かなりアブナイ
↓5へ

B

「リグルはやっぱり男の娘がいいな。ちちんぷい」
「え、もしかして・・・また!?」
　そういった瞬間に私の身体は光に包まれ・・・
「な、無い!胸が・・・!そしてある!異様な『アノ』物体が・・・!」
　身体の変化にすぐ気付く、また首を絞めて治させようとするが、その人は既に空高く飛んでいた。
「くっそー・・・」
　私は大人しく諦めた。
「ひえぇ・・・」
↓5へ

5

A）服を破る
B）裸体をさらけだす

「いや、まてまてまてーい!」
　私は声を荒げて抗議する
「む、何だ?リグル」
「何か嫌な予感がする!次の事は何故かさせてはいけない気がする!」
「・・・メタ発言をすると、選択肢が月バグには不適切だ、と言いたいんだな」
「相変わらず何言ってるかわからないけど、今回だけはダメな気がする!」
「ううむ、何とも良い感だ。このままきゃっきゃうふふに持ち込もうとしたのに」
「・・・はぁ?」
「・・・仕方ない。そろそろ時間だし、私は消えるとするよ」
　そういうと一瞬でその人は姿を消してしまった。・・・って
「こらー!元に戻しなさいよーーー!」

◇

「元に戻しなさいよー!」
　気がつくと見慣れた風景がそこにはあった。
「え・・・・ゆ、夢?」
　眼をごしごしと擦る。状況確認。落ち着く。

「はっ!夢か。」
　周りを見ると自分の家だと気付く。
「よ、よかったぁぁ。夢で・・・」
　私は冷や汗をびっしょりとかいていた。
「な、何だか非常に不快な夢だった気が・・・」
　私は頭をかいて落ち着く。

C)一回でもBを選択した
D)今まで全てAを選択した

C
「身体に変化は・・・無し!夢だー!」
　私は安心してベッドから飛び降りる。そして寝巻きから私服に着替えて家のドアを開ける。
　心地よい春の日差しを受けながら私は飛び立った。
(終)

D
「身体に変化は・・・へんか、は・・・」
　身体が震える。
「か、身体が大きい・・・。それにこの服・・・」
　ベッドから飛び起き、鏡の前へと行く。そこには
「こ、これはメガネ・・・?それにスカート・・・ボ、ボク・・・!」
　鏡に映った自分をまじまじと見つめる。すると鏡の端に見覚えのある顔が見えた。
「やぁリグル。まったく、夢オチなんてしたらこれからの君と私の展開を期待していた読者が悲しむだろ?」
　ボクは恐る恐る振り返る。すると嬉しそうな顔をした人が当たり前のように立っていた。
「ひっ・・・!」
「そういえば、最後の選択がまだだったよね・・」
　その人は一歩一歩ゆっくりと近づいてくる。
「こ、こないで・・・!」
　その声が聞こえてないのか、それとも無視したのかはわからないがリグルとの距離をせばめる。
「最後の選択、それは・・・!」
「きゃあああああああ」
　森の朝に甲高い声が響き渡った。

◇

「きゃあああああああ」
　そう言ってボクは眼がさめた。
「はぁ・・・はぁ・・・はっ!夢か。?」
　息を整えながら周りを見る。何時もの家
「よ、よかったぁ・・・」
　安堵の息を吐く。
「夢だけど、今回ばかりはボク死ぬかと思った・・・」
　そう呟いて気付く
「・・・ん?ボク・・・?」
　ボクの顔は一瞬で真っ青になった。そしてベットを飛び降り鏡を見るとー

-ご想像にお任せします-

(おわれ)

〈作者コメント〉
　月刊NIGHTBUG　一周年おめでとうございます。小崎さん、編集今後も頑張って下さい!　さて、リグル妄想です。読者様の巧みな妄想力で色々なリグルを妄想してください。

無題

著者：草加あおい

春の日差しもだいぶ暖かくなってきた今日この頃。
　皆様いかがお過ごしでしょうか。
「さて、今回の…いや、今回は、の方が良いだろうか」
　子供たちの無邪気な笑い声を聞きながら、寺子屋の一室で、上白沢慧音は文机に向かって保護者への手紙をしたためていた。
　ただ、いつもと違うところは本日の生徒たち。いつもの人間の子供たちではない。
　妖怪や妖精の少女（?）たちである。
　どうして彼女たちを集めたのか、といういきさつは、慧音自身も忘れてしまった程なので、あまり気にしてはいけない。
　確か、多少の勉学を教授しようとしたものの、あまり覚えが宜しくなかった、ような。
　あるいは、彼女の教師としてのプライドが、上手く教えられなかったという忌まわしき記憶を食べてしまったのかもしれない。
ただ、慧音も、そして何よりも子供たちもまんざらではないようで、
　少女たちに至っては自主的に集まってきているほどなのだ。
　便利な遊び場として利用しているだけではなく、最初の頃よりはある程度の常識…と、言っても、人間の、ではあるが…は、
　付いてきているようで…
「けーねせんせ！またチルノちゃんが！」
「だってルーミアがいけないんだよっ！」
「そうか、とりあえずはそこで凍っているリグルを元に戻すのが先決だな」
　…まぁ、ある程度　である。あくまで。
　窓の隙間から光が差し込む。
　少し前までは多少空が赤くなり始めていた時間帯ではあるが、今ではまだ日も高い。
「来週は、ぞうきんと古新聞…と、他に必要なものはなかったな」
　正座をして、しゃんと背筋を伸ばした、まるで絵に描いたような綺麗な姿勢で手紙の続きを書いていた慧音は、筆を置いて、寺子屋の室内をぐるりと見回した。
　ふと目に入った、少し隙間の開いたふすまの奥は、先ほどまで庭で遊びまわっていた少女たちのお昼寝空間となっている。
「…風が吹き込んで寝冷えしてはいけないな…」
　静かに立ち上がり、足音を立てずに、2，3歩の距離で妖怪と彼女を隔てている薄い木と紙でできた壁へ近付く。
「…こうして見ると、やはり人間と変わらないものだな…」
　自然と笑みがこぼれる。
　子供の寝顔というのはどうしてこうも心安らぐものなのであろうか。
　先ほどまでは、あんなに手がかかって大変だったのに。
　この天使のような顔も、慧音が教師という仕事をしている理由の1つかもしれなかった。
「ふあぁ…さて、もうひと頑張りするか…」
　眠気に釣られながらも、
すっ…とふすまを閉め、手紙の続きを書く作業へ戻る。
「…以上のように宜しくお願いします…っと…最後に…」

がたっ

　急に後ろから物音がしたので、慧音は静かに後ろを振り向いた。
(誰か起きたかな?)
　ふすまがゆっくりと開く。
　薄暗い部屋からゆっくりと顔が出てくる。
寝ぼけ眼、髪もくしゃくしゃ。いつも出て

くる頭と違うのは触角だけ。
乱れた寝巻きもそのままに、リグルがゆっくりとこちらの部屋へ足を踏み入れた。
「どうした？お手洗いか？どれ、今連れて行くからな…」
机に向かい直り、筆を置こうとした、その時である。

どんっ

後ろからの衝撃が慧音を襲った。
しまった。と、慧音は咄嗟に思った。
いかに人間の子供の様であるとはいえ、彼女たちは妖怪なのである。
今まで慧音を攻撃するようなそぶりを見せたことが無かったとはいえ、不用意に背後を見せて襲われるのは自業自得と言わざるを得ない。
だが、予想に反し、背中に痛みは無かった。
変わりに、背中から腹部へかけて、細いものが巻かれている感触が伝わってくる。
慌てて下を見る。
たわわに実った胸部が邪魔で少し見難かったが、リグルの腕が確認できた。
どうやら、背後からしがみついているようだが…少し震えているような感触も伝わってくる。
それにしても、妖怪なのに、何と弱々しい力なのであろうか。
それこそ、人間の子供と大差ないではないか。
「…うん…？どうした…？」
先ほど置き損ねた筆を置きながら、優しく尋ねる。
少し手紙にも墨が飛び散ってしまったが、また書き直せば良いだけの話だ。
「ほら、とりあえずこっちへ来ないか？このままでは少し居心地が悪いだろう？」
自分の膝をぽんぽんっと叩きながら慧音は提案した。
だが、背中には、ぐぃぐぃぐぃっと小刻みに何かを押したり離したりするような感触。
きっと頭を振っているのだろう。
「…仕方ないなぁ…」
後ろに手を回して無理矢理に身体の前へ回してやる。
きっと、どこぞの吸血鬼等であれば、こんなに簡単に動かすこともできなかったであろう。
正座している慧音に正面からリグルが抱きついている形になった。
「ほら、何があったか話してごらんなさい？」
慧音の膝にまたがる小さな身体、胸にうずくまった緑色の頭は、やはり少し震えていた。
触角の先端が肌をかすめ、多少くすぐったいが、今は気にならない。
そこで、やっと蚊のように細い声が聞こえてくる。
「…暗くて…冷たくて…怖いの…」
顔を押し付けられている服の胸部からは少し湿り気を感じた。
「怖い夢を…見たのだな…？」
小さくうなずく頭を、慧音は優しく撫でる。
先ほどチルノに氷漬けにされたショックが夢に出たのかもしれない。
「よしよし…大丈夫だ。先生がついているから。な？」
触角が上下に動いた。
片腕でリグルを抱き締め、もう片方の手で震える頭をゆっくりと撫で続けていると、段々慧音を抱き締める腕から力が抜けていき…
「すー…すー…」
小さな寝息が聞こえてきた。
かくん、と頭が後ろに倒れる。
その表情は少し笑っているように見えた。
「ふふっ…妖怪でも、夢は見るものなのだな」
後で稗田の娘にこのことを報告したらどういうリアクションをするか楽しみだ、などと考えながら、
「さて、手紙を書き直さないとな…」
膝の上で眠るリグルの寝顔を見ていると…
「ふあぁ…」
春の日差しは暖かく。
「…とりあえず…隣の部屋へ…連れて行かないとな…」
きっと妖精のいたずらに違いない。
「…ふあぁ…でも、少し…このままでも…い

いかも…な…」
いや。あまりにもその寝顔が可愛かったから？
「…すー…」
寝息、二つ。
慧音は久し振りに己の欲求に負けてしまった。

陽も少し傾き始めた頃、寺子屋に向かう影一つ。
前が見えないほどの大荷物を抱えているようで、時々降ろしては前方を確認している。おぼつかない足取りである。
「慧音～。頼まれたモノ、持ってきたぞ～」
寺子屋に用事があるといえば、通う子供、その保護者、そしてそれ以外の関係者。
今回の訪問者は3つ目に当てはまる、藤原妹紅だ。
「…慧音？留守か？」
返事の変わりにとてとてと足音が聞こえてきた。
今日は寺子屋は休みのはずだが、子供が遊びに来ているのだろうか？
不思議に思い、とりあえず荷物を置いて音の主を確認してみる。
「お、確かお前は妖怪の…」
「し～っ！先生寝てるから、静かにっ！」
その言葉に、奥を覗いてみる。
そこには、抱き合って眠るリグルと、そして慧音が居た。
…その寝顔があまりに幸せそうなので…
妹紅は、あまり面白くなかった。
土間から室内に上がりこみ、
おもむろに、置かれている筆に手を伸ばし
…

――笑い声が聞こえる。
皆、笑顔だ。
あぁ、やはり子供の笑顔はいいなぁ。

きゃははっ！うふふふっ…

この幸せな時間が永遠に続けばいいのに…

きゃははっ！あははははははっ！あはははははっ！！！

？

ぎゃはははははっ！げらげらげらげらげらっ！

な、なんだっ！？一体どうしたと…――

「ぎゃははははっ！先生の…」
眼を覚ました慧音の耳に飛び込んだ第一声。
周囲を見ると、チルノやルーミアがおなかを抱えてどたどたと床を笑い転げていた。
「うゅ…？」
騒ぎにリグルも眼を覚ます。
慧音と同じく不思議そうに周囲を見渡し、慧音の顔を見上げ、
「ぷっ…あはははははっ！」
他の皆と一様に笑い出したではないか。
「な、なんだ！？人の顔を見ていきなり…！？」
寺子屋に笑い声が響く。
確かに、慧音は子供たちの笑顔を願ったが、これは絶対に違うものであると確信できた。
慧音が妹紅によって顔にラクガキされたのに気付くのは、もう少し後のことである。
「…これこそ…悪い夢だ…」

（終）

〈作者コメント〉
普段殆ど文章を読まない私がSSなんぞに挑戦するなど無謀だったかもしれませんが。
原案を出してくださった夏樹真様に感謝です。

『 不思議の国のロリス 』　秋水

夢オチ代表かと思いまして、ベタに。

『 無題 』　豆板醤

ファンタジーな夢を見るのが俺の夢デス

『 追憶 』　蛍光流動

ずっと小さな頃、よく思い出せない誰かと別れなければならなかった気がする。
東方求聞史紀、八雲紫の項の第一次月面戦争より。

『 studentbug 』　gagrim

月刊 nightbug 1周年! 心よりお祝い申し上げます

ふはは!!カエルでトリシューラ5回召喚して貴様の手札は0だ!!
勝てばいいんだよ
勝てば!!!
くっ…!!
氷結界はアタイの特許なのに!!
この外道!!
※トリシューラ
…が夢オチってのはどうでしょうか!?
却下!!

リグル…いい？
今回のテーマは夢オチだけど…
楽しみだね〜
うん
月バグ投稿者はみんな意表をついたオチを出してくるわ！
たぶん
だからここは敢えて普通にオトすわ
え、まじすか？
ええ、それでいくわ！ちなみにもう締め切り過ぎてることとは全く関係ないんだからね!!
先月休んだのに…
いいからさっさと夢オチしなさい!!リグル準備はいい？せーのっ…

ガバッ
はっ!夢か。
お前か!!
おしまい。いやーオチたね。あはは。祝☆一周年!!

月刊 Nightbug 一周年に寄せて

～夢の中の物語

著者：Jade.

リグルを愛する友人の方に紹介されて以来、読み続けた月刊 Nightbug も、気付けば一周年。
気付けば自分が投稿する側に回ったり、それに御感想をいただいたり、色々貴重な体験をさせていただきました。
これも、リグルを、東方を愛される読者様、創作者様、そして何よりご多忙の中この企画を立ち上げられ、編集作業と美麗な表紙絵をこなされてきた小崎様のおかげ。いささか私事の範疇で恐縮はございますが、この場を借りてお礼を申し上げたいです。

さて、私も拙いながらこれまでいくつかの小説、本業でないながら絵も投稿させていただいてまいりました。
漫画や小説の文庫等だと、巻末には著名人や著者ゆかりの同業者等の解説文がついていたりします。雑誌には、なにやらお偉そうなコラムなんかが付き物
そこで今回、ちょっと今までにない投稿という事で、これまでの自作品のセルフレヴューなんかをしてみようと思い立ち、今筆をとっております次第です。
過去の自分を客観的に見つめ直す意味で。また、創作という幻想を外部の世界から眺める事で、その夢を覚まさせる。一周年を記念しての夢ヲチなんてものを体現してみようかとも思い、ついでに、自分にとっての物語とは何なのか。なんて言うのも、考えていこうかと思います。
それでは、これまでの作品を覚えておられない方には至極どうでもいいというか、読み飛ばすべき内容でございますが、勝手にはじめさせていただこうかと思います。
なお、一気にごりごり書く予定ですので、色々包み隠さぬ所も書いたりしている可能性もございます。そのあたりも、何卒ご了承くださいませ……。

7月号は初投稿。イラストを掲載させていただいております。いやはや、今見ると如何にも拙い。
これでも色々頑張ったつもりではあるのだが。１つ表情が気にくわない。やりたい事はわかる、それゆえにもどかしく他人の原稿に手を入れたくなってしまうのは性か性格の悪さゆえか。しょっぱいと言うのはこういう事を言うのだろう。しかし、１年近くも前の自分はもはや他人である。
短パンとおでこはいい感じ。シャツと赤マントの発光感というテーマはクリアしていると思う。
背景で点数稼ぎを狙った感は否めないが、実は夜の湖上で蛍に囲まれる絵に果敢に挑み国民一寸玉砕した大変残念な経緯がある。
最終的には、テーマにそって実力程度にまとまったのではないだろうか。やりたい事以外の部分で背伸びしても仕方ない。

何かを書く上で、「やらなければならない事」なんて、本当はないんだと思う。自分に妥協を許さない部分を1つだけ持てば、あとは今ある実力だけを、自分が納得いくように出し切れば、それでいいのではないだろうか。

せっかくなので、リグルという妖怪のキャラクター性や魅力について少し触れる。シャツの白、ズボンの黒、マントと靴の赤、碧の髪、色相明度ともなかなか美しく、メリハリあるコントラストのデザインがされているキャラクターである。

生意気そうな釣り眼と、ワイシャツにズボンにマントと、ボーイッシュなキャラクターを押し出している所も、デザインのテーマに一貫性があり理解しやすい。

設定的にはレティ同様1ボスとしてはパワーは高いが頭が弱く、チルノあたりと遊ぶのがお似合いだそうな。

東方Projectに登場する妖怪たちは、人間が人間以外の物に感じてきた恐怖の具現という側面を持つのは、これを読まれている東方ファン諸兄諸姉の殆どには改めて述べるまでもないことと思う。

彼女の操る力は蟲の恐怖。それらに人は度々悩まされ、ついには殺菌剤や殺虫剤を開発した。これによって蟲の恐怖は幻想郷でも肩身の狭い思いをさせられている事は、二次創作においても連載小説を始め度々語られる。

幻想郷に流入した殺虫剤とは、おそらくより強力な製品を開発した事によるローテーションによるものだろうか。ZUN氏の故郷長野の山奥では、世界最強のハチであるオオスズメバチを殺す為の強力な噴霧式殺虫剤が、ペンション等の部屋に常備してあるのだそうな。

しかし、この蟲はヒトによる生物学的分類による所の昆虫にとどまらず、〝むし〟という音節で呼ばれる所の極小な生物全般に及ぶ。人が恐れる物は既知より未知であり、可視より不可視。〝昆虫〟というヒトが勝手に括った価値観が、何故彼女の力を縛ろうか。

むしろ、そういった論理的、学術的、即ち理性的にしっかりと構築された概念ではなく、逆に直感的で、感情的な物の括りや、思い込みの類によって彼女ら妖怪の能力が定義づけられる事は、至極自然な事である。彼女の力はおそらくでんでんむしや、公式的にはツツガムシや蚤虱の類、果ては水虫にまで及ぶことだろう。なぜなら、それら皆、人が恐れた〝むし〟だからである。

これらを効果的に利用する知恵があれば相当な厭妖怪だが、そこは昆虫の脳という事で、こんな愛されキャラクターに落ち着いている。ところで、人間にとって恐ろしい〝むし〟に無視があると思うのだが……放置プレイリグル。需要のありそうななさそうな。

某超古参（と思われる）東方ファンの有名同人作家が言うところの、判で押したような恋愛依存症っぽい美少女キャラクターが氾濫して久しい、いわゆる「萌え」業界。そこにあって、ZUN氏の尽きることない魅力的なキャラクターデザイン能力は、大きく注目されて取り上げられる事こそ少ないが、稀有な才能だと思う。

それは、彼の深い知識と思索と、何より耐える事のない飲酒により脳を常時半覚醒状態にキープし、眠っているヒトの残り95%の能力をフル稼働、それによる常人の19倍のパワーに依る所である事は疑いようもない所である。（東方が完全にこの「萌え」カテゴリーの範疇かについては議論がある所だろうが、現実問題としてほぼそうであろう。なお、東方はエロい。某法が改悪されれば東方の単純所持が禁じられる。とは、氏の発言である。旧作時代は、大ヒットしたTo Heartをはじめとするヴィジュアルノベル三部作。Leafのあの社会現象ともなったな商品の発表以後、そのオマージュや、作画担当水無月徹氏の作画に強く影響を受けた作風が見受けられる。）

リグルもそんな中から生まれたキャラクターの一人だが、これだけ一人の人間から生み出されたキャラクターが居る中で誰ともキャラかぶりする事は無い。

自分が作る側に回るとよりよくわかるが、

改めて恐るべき事である。
　これは、彼が内面に持つ人格の豊富さに依る所に他なるまい。一個の個人の人格が必ずしも、いやむしろ決して矛盾なく統合される事は無い事は後に述べる事になると思うが、内面が豊かな人間というのは自分にとっても人生を楽しみ易いし、他人にとっても面白い物だ。
　1～2ボスは割と適当にデザインされてしまう事も多く、深い世界観的なキャラクター設定を持つことは少ない。しかし、リグルもまた、彼が豊かに持つ内なる「面」の一つが、魅力的に表現された形であろう。
　それはもちろん他のキャラクターにも言える事で、キャラクター付けは本来薄いはずの、1～2ボス達。バカルテットと呼ばれて括られる4キャラ、他に最近では、星蓮船における多々良小傘もおそらくその範疇に入ってくるだろう。
　彼女らは、東方という私たちの常識から離れ、冷静な視点から他の作品で似たような立ち位置を与えられたキャラクターに対して見れば、分不相応とも呼べるほど広く愛されている。そして、だから、彼の中に広大に存在する幻想郷という1つの世界に確かに息づき、したがってその幻想郷を外から眺め、その眺望から自身の内に幻想郷を構築した我々二次創作者の内面にも確かに息づく、リアルなキャラクターとして生きる事を許されている。
　ZUN自身が表現する真の、いわば最初の幻想郷において見える役割が少ない分、むしろ彼女は自由闊達に、我々の2次的な二つ目以降の幻想郷において飛びまわってくれているともいえる。

次回投稿は9月号
　本業の文章は2回目の投稿で。しょっぱなから文章で行かなかった理由は、ぶちゃけた話で、イラスト描けないからSSに逃げていると思われたくなかった。それだけだ。関係ないが、SSという表現もそう言うイメージから個人的にあまり好きではない。そこはかとなくナチっぽいし。
　話を戻すが、そんなもの、自分が自信を持って書いた話なら何を臆する事があるのか。
　確かに、それも一理はある言い分だ。
　実際、自分が書きたい物を書く事に、誰かに遠慮や配慮をしていては書ける物も書けなくなってしまう。それは、単純に「その人が書く」という事の、替えざる魅力の減衰であり、そのまま作品の価値の減退に他ならない。
　書きたい物を書く。
　それこそが書き手が書き手である価値であり、使命ですらあるかもしれない。
　しかし、それはあくまで書き手自身の都合に終始した論理であり、理想論なのである。
　理想論を捨ててはならない。
　しかし、現状素人が二次創作で書くしかも余所様に投稿するSS等、第一印象としてそういう感覚を持たれてしまうのは、厳然たる現実ではないだろうか。
　その事実は、先述の書かれた内容云々の話以前に、伝えるべき読み手側の印象を捻じ曲げてしまう危険性がある。
　そう言う部分に関しては、書き手側が配慮をしてしかるべき。というより、書き手側が配慮するよりしょうがない。
　理想を持つことは、書き手の根幹である。
　しかし、その根幹が空虚な物とならないためには、ただただ、抗いようのない冷たいコンクリートの様な現実と、向かい合い続ける事が必要である。
　理想は、現実からの逃避の道具ではないし、理想で現実からは逃げられない。現実と向かい合いながら如何に戦って、あるいは妥協して、理想を、即ち自分の根幹にある価値観を守っていくか。
　理想とは即ち、現実という絶望の巨壁にのみ描き得るのだと思う。
　さて、ようやく内容だが、お話はスポーツの秋という事で、頭脳スポーツ。
　冒頭から何故か太宰先生のオマージュをかましているが、それは単純にトッププロに話の筋を考えてもらっておいて、そこに自分が再構築をかましていく方が、制作のスピードが速いからやろうとした。

物事は、如何に手抜きをするかというのは大変重要な事。ただし、それを論じられるのは何について手を抜いていいかをきちんと熟慮し、信念のある者のみの権利に他ならないのだが。

ところで、フィクション小説を書く時、いくつかの前提があると私は思っている。勿論それは、私個人の直感以上の物ではなく、それ以上の物があるとすれば高校時代に国語の授業で小説を読み、先生の授業を聴いた事ぐらいである。

この話を書いた時に用いた前提。

「主人公に読み手が感情移入できる事。」

当たり前といえば当たり前だが、いざ意識してみると、「こうすればよりいい」と言葉にできるだろうか。どのように気をつけて実践しているとか、こういう文章表現上の特技を用いているとか、ポリシーとしてぴしっと打ち出せるだろうか。

文章など殆ど読まぬ私が4年前に出逢ったあるサウンドノベル。素人目にもわかる文章構成の拙さはあったが、そのリアルさ、迫ってくるような、はたまた飲みこまれる様な、迫力を感じる文章だった。

それは、おそらく感覚。自分の感じた感覚をそのまま文章に表現した結果だったのではないかと私は感じた。

「熱い」「痛い」「眠い」「痒い」

たった今、これを書いている私の生に感じている感覚を、とりあえず言葉にして並べてみた。

1つの言葉で表すのは簡単だが、いま示したこの4つの言葉から成る一行に、果たして感情移入できるだろうか。なにか迫ってくる迫力が感じられるだろうか。

これらは、状況を的確に表現し情報として伝えはする。しかし実は、私たちを支配している物の本質である、感情や感覚を何一つ伴わないからっぽの表現だという事に気がつかされるはずだ。文章は、ただ情報として言葉を並べるだけでは実に無味乾燥で空疎だ。

私は素人で、凡才の、何の変哲もない市井の人間。

その私が持っている、創作をおこなう上で感情移入を得るための唯一の武器は、自分が人間であることなのだ。人間であることは何よりも、人間に感情移入をしてもらいやすい条件のはずだ。

人間として感じたその感覚を、そのまま赤裸々に描き出すことにより、文章は感情を持ち、文章が人間たりえる。

この2バイトの情報の列を使い、情報伝達をするのではない。それを用いて、絵を描くように人間を描く事。それが、少なくとも私にとって唯一、他人に読んでもらえる、その意味は即ち何かを感じてもらえる武器であり、前提条件だと思っている。

その為には、敢えて徹夜の状態で文章を書く事もいとわない。高筆圧で5時間以上にわたってボールペンで文章を書きつづけ、爪に激痛が走る事もなんのその。

リアルな「眠い」「痛い」を書くために、私にとってそれは絶対必要な、話を書く作業の一部だ。

日々のあらゆる感覚を知覚している最中に、私は常に「文字を書いている」事を意識している。

その努力が成功しているかは、読み手の皆さまのみが知っている。本当に知りたい事は何時も、神のみぞ知るだ。

まったく小憎たらしい。

話を内容に戻そう。

スポーツというお題を聴いた時、まっさきに東方と結びついたのは、スポーツ感覚の決闘が、ごく一般的かつ日常的に行われているという世界観とであった。これは、この東方という作品が提示する、世界観の根幹の一つである。

そこに直感的に結び付いた以上、やはりそこと絡めて話をつくらねばおさまらない。早速筆を走らせ始める。

リグルは仲間達共々我が妻に拉致され、丸めこまれた慧音の寺子屋に監禁されて頭脳スポーツを強要される。勉強好き、ことさら数学好きの人間というのは世に少なくなっている。そして数少ない数学好きの人間も、たいていその事を理解している。

主人公に感情移入する条件はいくつもある

が、先に述べた事と関連させるなら、感覚がある程度一般的である事だ。もしくは、一般的な感覚を一部でも持ち合わせている事。

　例えば、精神に異常を来たした犯罪者が主人公のサイコな小説があり、それが「事実に基づいたとてもよく出来ている」話だとする。だが、その主人公の精神構造があまりに突飛で読み手と共有する感覚が皆無では、私たちは衝撃を受けるかもしれない。だが、感情移入をしてリアルな感覚を味わえるだろうか。白い物を赤いと言われ、苦い物を塩辛いと表現されて、ついていけるだろうか。

　それに面白いとか凄いとかいう感想は持っても、感情的には「ハァ（゜Д゜）？」となって終わりではないか。それは、私たちが仮にコオロギやライオンの思考を「正確に」文章化した物があるとして、それを鑑賞したのに変わりないはずだ。知的好奇心は大いにくすぐるものの、全く感情を同じくする事は出来ないだろう。

　その主人公が、我々と変わらぬ人間の素直な感覚と同時に、異様な狂気をも持ちあわせている。そして物語は進み、主人公の精神状態に説明が加えられるにしたがって、その二つが、例えば次第に延長線上に連結して存在する可能性が示唆された時、始めて私たちはその現実的な恐怖に戦慄する。

　狂気をリアルな物として読み手に繋げるためには、私たちが、主人公の一般的な感覚に感情移入していなければならない。まぁ、その手の話を読んだ事が無いので、全くの憶測でしかない例示だが。

　さて、まずは冒頭。私たちが、ある程度リアルに接してきた記憶を持ち、かつそれに対する嫌悪感と好奇心を同じく感じられる主題。そう言う理由で数理パズルを持ちだしたわけだ。

　その後は、昆虫という物の特性の特性を活かしたアジテーション演説を打たせ、弱者たちの一致団結を図ると言う月並みな展開。陳腐になりすぎぬよう、チルノの存在は非常に重宝した。登場は少なく思えるが、単調にならざるを得ない部分の話のテンポを半拍ずらす彼女の存在が、実は何よりこの話には不可欠だったと思っている。

　そしてリグル達は、嫌々といいながらも一致団結して我が家内の暴虐に立ち向かい、問題を解いていく。その中で、彼女達は少しずつその闘いに挑む楽しさを実感するようになって行く。そして、解答を完成させるという既定路線のハッピーエンドでその喜びは最高潮になる。

　ここまでは実によくある話だ。今更語るまでもない。決して、心理描写が淡泊ないいわけではry

　そして、リグル達の問題解決の後に、テーマが出題者である魔理沙の方へと転換する。ここの転換が少しぎくしゃくして脈絡が無い部分があるのが素人くさい部分だと思う。今見ても、もう少し何とかしたく思うが、なかなか難しい。

　この辺は、イラストで難しい構図に挑戦する時、どうしてもデッサンが狂ったまま直せないのと同じ感覚だ。文章だって、下手なら柄と同じ様にデッサンが狂う。これは、書いた事が無い人にはわからない感覚かもしれない。

　この転換で、テーマが回答者から出題者に移った。私たちが普段触れる物語というのはどういう物が多いだろうか。殆どが、挑戦者が努力を重ねて力を増し、終には上級者を打倒していくサクセスストーリーであり、その挑戦者の心理描写に終始してはいまいか。

　それは、私たちの多くがこの挑戦者の立場に置かれる場合が殆どで、共感が得やすい事に理由の一つがあるかもしれない。が、そんな事はどうでもよかった。問題は、私はこのことがいわば勝負という物の片面しか描き出せておらず、実に独りよがりで不完全だと感じていた事である。

　だから、私はこの常識から離れたかった。敢えて前半ややもすれば陳腐と取られかねない展開を用意する。それは、後半物語のテーマを反転させるための布石だ。

　どんな文章でもそうだが、主題は大抵後に来る。普通物語とは、まず普遍的な価値観等を取り上げて説明を行った後、それに問題提起なり新たな解釈なりを加え、自説を展開しそれを論証する。つまり、なにか自分の思う所を詰めた文章を書こうとすると、大抵必然

的に途中で反転するのではないかと思う。
　まず前提を提示し、それを反転させて新説を展開する事こそが物語の最も基礎的な、最低限必要な構成だと思うのだ。私という書き手にとって、この物語の本当の主役は実は魔理沙であり、リグルは、裏返す前提での表の主人公、道化とも言える存在を演じてもらった。
　物語は、裏返る必要があると私は考えている。今回は、解答者と出題者の戦いがテーマだった。その中で、戦いの面倒さを、戦う楽しさに。負けたくないという気持ちを、がんばって負かしてほしいという気持ちに、それぞれ反転させる事でテーマを示した。これは、自分がリスペクトする東方というフォーマットで二次創作をさせてもらうのに際し、まず最初にやっておきたいテーマでもあった。

　余談だが、私が初めて触れた東方Projectは、友人から聴かせていただいた紅魔から花映塚までの曲。
　キャラの容姿や世界観を文字情報化した物は、直後に彼から召し上げた求聞史紀等の書籍だった。
　求聞史紀の記述の第一印象として、この作品が実に皮肉っぽい作品であると言う事を感じた。そして、妖怪は人間を食べるものである。弾幕ごっこで不慮の事故は前提。
　という、このほのぼのとした世界の中にどこか薄暗い不気味さ、理不尽さが漂っているのを強く印象的に感じた。この柔らかな世界で、すこし目を凝らして見れば人間の死が驚くほど身近なのだ。
　それに、当時恐怖感に近い感覚すら覚えた事を、今でもよく覚えている。
　そして、その感覚をこの作品がもつメッセージ性と解釈し、自分なりの東方という世界の理解に至った時、既に私はこの世界の虜だった。
　ZUN氏の描かれた世界の皮肉っぽさが私のひねた性格に合致したのもあるだろう。
　しかし、この東方の世界観こそまさに、私たちが普段囚われている所謂外の世界の価値観の反転の具現化した世界と捉える事ができれば、好きになるのも当たり前。
　私の考える物語のギミックの一部を東方はそのまま世界として構築している。そんな作品の主張に、私が共感しないはずもなかったのだ。

　さて東方といえば？　いくつか上がるが、象徴的なもののひとつがその「弾幕ごっこ」であろう。
　何かと過保護とも言えるベクトルにぶっとびがちな私たちの世界に対し、実に露骨なアイロニーを誇示するこの世界観は、まさに東方という作品を象徴していると言っていいだろう。
　それは不可侵の平和の否定、即ち慣れ合いと探り合いとナアナアでできた世界なんてつまらなくて息苦しくて死んじまう。というメッセージであり、人と人の戦いの肯定である。
　やれ博愛だ、争いや苦しみの無い世界だと、心にもない眠たいセリフが飛び交う世界にあって、辛辣な煽り文句が飛び交う戦いを遊びに昇華した世界を、楽園と呼ぶ。
　これは、東方Projectという作品の重要なメッセージの1つであることは疑いようもない。人は、喧嘩しないと、生きにくくて生きにくくて絶対に狂ってしまう。
　弾幕とは彼女たちにとって個性の象徴であり、それを闘わせる事を是とする世界が理想。何が言いたいか、おのずと見えてこよう。
　ケンカするほど仲がいい。世間では結構軽く、ともすれば煽り文句なんかに使われたりもするが、本来軽々とは使えない重い意味を持っていると私は思う。そして、その重たい意味が示す所に近い世界観が、弾幕ごっこなのではないか。
　これを、どうしても二次創作という形で表現したかった。
　ここでは、様式美を至高と位置付けるスペルカードは、相手を打ち負かす為にあるのと同時に、相手に解明され打ち負かされるために存在している可能性を、この物語で示唆した。
　こういう話を書いていると、あの弾幕の初見殺しは、むしろ東方という世界観を表す為

にわざと作られていて、むしろ死に覚えこそZUN氏の意図した自然な事なんじゃないかという理解にまで思い至る。

　孤立は最大の罪だとどこかの閻魔様が言っていたが、実に一貫したわかり易い主張である。

　出会って始めからわかりあえる人間なんていない。諦めてしまえばそこで繋がりは終わり。戦いこそ、わかりあい受け入れ会うための努力の証。その放棄は表面的な平和をもたらすかもしれないがむしろ、何より残酷な相手の人格の否定に他ならないのだ。

　そういう結論でもって、理屈っぽいお話は終わり。さぁ、楽しい弾幕の時間だ。

　次回小説を投稿したのは12ー1月号にかけての序章ー本編の構成の一本。これは、文字量的には短編小説クラスの長さがある。読む時間を割いて下さった方々、御感想をいただいた方々には感謝してもしきれない。

　さぁ、毎度普通やらない様な事をやらないと気が済まない中二病である。今回は、バンドがテーマだ。

　音楽?　中学の授業でアルトリコーダー吹きましたが何か?

　音楽がなぜあるかといえば音楽でしかできない感情表現があるからであって、それを文章でやろうと言うのはどだい無理な話。文章で音楽をテーマにするなら、大抵それは、それを演じる演者たちのお話になる。

　山の神社で外の世界の音楽に触れた幻想郷の住人達が衝撃を受け、プチバンドブームが訪れるという話。若い妖怪や人間に、ちゃんとある程度ロック?が浸透しているという原作設定があってのお話だった。(このあたりは、花映塚のミスティア編や求聞史紀に僅かに描写される。)

　早苗の持ち込んだ外の世界の音楽は、やはり相当先進的でカッコよく聞こえるんじゃないかなーというイメージから。しかし、プロローグから魔理沙の二人称やら風祝やら怪しい部分がいくつもある。読み返すとなかなかどうして、赤面物なのはつくづく絵を同じである。

　そう、東方といえばやはり音楽は有名。ゲームミュージックという半分メタルの親戚のようなジャンルで、侘び寂びメタル(ZUN氏いわくここに萌え要素も入っているらしい。外国人にも人気の、WABI’SABI’MOE’日本の三大文化である。恋色~や星の器あたりは実に年頃の女の子らしい可愛らしさが表現されていると思う。セプテットやオーエンはロリっぽいらしいのだが……)をブチかましてくださる原曲を聴いて東方に入った自分としては、どうしても音楽に関する話を一回やっておきたかった事もあった。

　ちなみに、咲夜が早苗に聴かされ「懐かしい」と言った曲「The trooper」。英国にて’83年頃発売の曲だが、それでも現代でこれだけ色あせない曲なら、幻想郷の住人にとっては随分新しく聞こえるのではないだろうか。ちなみにこの曲、リフがそのメイドの某テーマ曲の構成に似ている事でちょっぴり有名だったりする。地味に咲夜のキャラの英国臭を演出する仕掛けなのかもしれないと、自分は妄想を膨らませていたりする。

　え、咲夜さん公式では1X歳アッー!

　ともあれ、原作で妙な曲名の歌や歌詞を歌うミスティアと、何かと扱いやすい暴走妖精チルノを物語の進行役に、キャライメージから似合う楽器を妄想した挙句適当に担当パートの理由をでっち上げ(!)物語のエンジンを作った。

　私自身、音楽経験が皆無である事は先に述べた。しかし、私は実はそれをそこまで大きな障害とは考えていなかった。

　音楽を、バンドをやるというのは、読者にとっても経験の殆どない感覚であろう。ならば、読者の感情移入を誘うために、私がギターをピロピロ弾けたり、デーモン小暮閣下ばりのハイトーンシャウトをかませる必要は全くない。

　むしろそう言った感覚は、邪魔になるのではないかとさえ思った。

　私もチルノ達同様、始めて楽器に触れたストレートな感覚という物をなにより大切に描けばいいのである。勿論その分、「素人として楽器に触れる」事は絶対必要だ。その生の

感覚が描けなければ、この話を書く資格も意味もあるまい。
　初めて肩から下げたベースは重く、太い金属弦は指に痛いほど硬い。木製のドラムスティックは、それをふるって出る音の驚くほどの大きさとは対照的に、羽根の様に軽かった。
　他にも、はじめてバンドを始める者達の心をリアルに描くためには、自分がバンドを始める事がベストであり不可欠だ。
　初心者用の指南書を何冊も読む事はもちろん、メタルミュージシャンのブログを読んでレコーディングの感想といった生の感覚を吸収する事に勤めた。かつて見た、ピッキングする利き手の指の激痛にアンメルツを塗るなんていう、某同人ミュージシャンM氏の記述は衝撃的だった。
　その後この話を書く段になってそれを思い出した。自分はギターは持っていないが物書き。その後、所要で何時間もぶっ続けでボールペンを握り字を書き続けたとき、始めてその指の痛みを共有できた時に二度目の衝撃を受けた。
　かくして、私の脳内で速弾きを練習するチルノの指の痛みを、私自身初めて理解できたのである。
　今回も、そう言った自分自身に直接感じる感覚を描く事に特に注力した。

　そして、あくまで音楽は物語のエンジンを回転させる燃料。つまり表のテーマであって、主題というか、言いたい事は別にある。今回は、初めての事に挑戦して、自分のやりたい事を表現していくなかでのキャラクター達の心の移ろいも素直に書いてみた。

　そこで、物語を書く上での前提二だ。
　登場人物の成長が不可欠。
　これも当たり前の話。身も蓋もない話をすれば、私たちが何かに触れる時、必ずそれが自分にとって価値ある物かどうかを判断する。その基準は、自分にとってそれから得る物があるかどうかだ。生々しく聞こえるがそれはごく基本的な事実だろう。
　前提一が感情移入、前提二が既存の価値の反転であるなら、次の前提はそれに乗っかっているのが自然。すなわち、登場人物たちの成長である。
　成長というと大それて聞こえるが、気付きといいかえてもいいかもしれない。即ち、主人公たちが何か信じている前提があって、それが壊されるか。融解するかして、その前提をあるいは否定し、あるいは内包した高次の、新しい価値観に気付いていく。
　感情移入からの反転とその解釈。それが、物語に単純に価値を持たせる最も基本的な手法だろう。ギャグセンスや特殊な技巧、文章構成の様式美の様な才能で勝負できない私は、そういう基本的な手法に頼らざるを得ない。勿論、それを用いる責任は果たすつもりでいるが。
　リグル達は、今回様々な努力をして、まず技術的に成長していく。その努力は、強い情熱から来るものだ。
　そういった努力が実になっていく、何かを表現できるようになっていく充実感を得たり、それが見守っている周囲のキャラクターたちにも好意的に受け止められる。このあたりの説得力は、練習の描写に四苦八苦でうまくもたせられなかったし、持たせようとも思わなかった。
　正直自分なんかが書いても陳腐になる気しかしなかったし、さんざやり尽くされたネタをやる事に情熱を傾けるのが無理だったからだ。本気で自分の心身を削って書けない描写なら、やらない方がましだ。この辺りでは一部、見守る者たちの感情表現に触る程度にとどめた。
　そして、そんな努力による技術的成長は、より高い技術力によって打ち砕かれてしまう。
　チルノは、知らないうちに自分がよりどころにしていた物、自分の努力の価値を見失ってしまったのだ。技術的優位とは非常に理解しやすいものの「よさ」だと思う。技術的に優位であることを証明さえできれば、その優位性は絶対に揺らぐことは無い。その心地よさ、論理上の安心感は、ともすれば臆病な技術論至上主義を生み出し、いつしか手段と目的を違えさせることもある。

まず、それをひっくり返す事をテーマに書いてみた。技術という隠れ蓑に隠れがちになるが、大切なのは、何を表現するか、何が伝わるか。技術は、物質である。手段である。道具である事を、決してわすれてはいけない。物質だけで、感情は表現できない。
　実に、当たり前のことではあるのだが。

　包み隠さない生々しい感覚を臆せず描いているなら、それは同じ人間だもの。かならず誰かに伝わるはずだと信じている。信じてその気持ちを伝える事が、私のような素人が創作をやる意味たりえるんじゃないかと。
　そういう思いを込めてチルノ達に楽器を持たせてみた。私たちが本当に大切にすべき事に、成長と挫折を通してすこしずつ、気付けたらいいなという思いを込めて。

　そういったことから、最後は確かでない物を信じる事に繋げて見た。リグルは、心を弱める友人に、どんな言葉をかけるべきだっただろうか。
　そうだねーと一緒に落ち込むか、大丈夫だよとお決まりののんびりした慰めを吐くか。
　私たちが信ずるべきなのは、決して確かな物質ではない。誰かが勝手に作った、聞こえのいい教えをたれるカルトな神様でもない。
　ただ率直に感じる自分の手指の痛みや冷たさであり、その痛みを共有する者の気持ちなんじゃないかなと思った。

どうしようもなくさびしく、不安な時、人間にはあるだろう。そんな時、何より安心出来るのは、誰かの体温なんだと思う。
　滅多に触れられるものではないけど、だからこそ、それがどれほど尊いものかというのがわかってもらえると思う。幸せにも両親や育てのおやが居る方は、抱かれた温もりを思い出せるはずだろう。
　そこまで書いたので、実はライヴ部分は後日談にちかいというか、結構アウトロ的な位置づけ。ここも、何せライヴステージを見た事はあっても立った事が無いので、結構描写には苦労した。小学校の頃の音楽会なんかでステージに上がったときの光景や気持ちを、何とか思い出して書いたが、何もかも、懐かしい……。
　なお、このライヴでチルノ達が語ったストーリーも、実際にチルノ達が演奏したイタリアの超有名ファンタジーメタルバンドが長い年月をかけて発表したアルバム群で語られた、エメラルド・ソード・サーガをいうファンタジーストーリーをパロっている。
　主人公は、『悪魔の炎』を凍らせる事ができる『氷の戦士』。
　このあたりからですね、このお話を私が企んでしまった原因は。
　いいかげん著作権的に御紹介するのが怖いので、彼らが『理想郷アルガロード』にて、『ユニコーンの森』を旅立ち、『三つの鍵』を探し出して伝説の『ポジティヴ・フォース』の体現である『エメラルドの剣』の封印を解き、邪悪な侵略者『アクロン帝国』の『暗黒王』と壮絶な戦いを繰り広げた事は、割愛させていただく。（笑）

　ところで余談だが、生々しいと言った。
　生々しいとか残酷だとか言われるものは大抵多くの人が目をそむけたがる。しかし、大抵の場合それこそがその人たちにとって足りない知識や価値基準の材料だったりする。どんなに目をそむけたい様なものだろうが、事実である以上それを否定すれば何か歪みを生む。
　大抵心の底では何となく気付いているはずだが、それを認めたがらない事が多い。それは、私も例に漏れないだろう。
　私たちは多かれ少なかれ、大きかれ小さかれ、葛藤や悩みを抱えている。
　今見ている物や持っている物ではどうしても解決し切れないそれの解決の方法はおそらく、私たちが「そうではない」と思っている事。いや、多分正確には「認めたくない」と思っている事の中にこそあるんだと思う。
　好んで目を向けていた物ばかりではどうしても解決し切れない矛盾が発生した時、顔をそむけたくなる様な物ほど、本当に見なくてはいけない物なのかもしれない。

　だから、チルノが感じた暗い感情を決して否定しなかった。

きたない気持ちを持つ時私たちは、こんな事を思っちゃいけない。こんな事を思うのは間違っている。そうやって、自分の中に沸き起こる気持ちを否定しようとする。
　では、それはなぜなのか。本当にそうすべきなのか。
　否定すべきだと、論理立てて納得できる説明ができる人が、いるだろうか。
　そういうきたない気持ちを否定しようとする事は、一見正しそうに見える。でも、多分その正体は現実逃避と自己正当化でしかない。
　誰かと意見が対立した時、その人の存在やいい分を否定して無視する事が、何かの解決につながるだろうか。同じ事である。
　その感覚は、自分の一部として受け入れる方がいいんだと私は思う。それを受け入れて、始めてそれを解決する道を探し始められる。

　２－３月号、パロ特集と聴いて、夏のホラー特集に投げ込もうとして自重したアイディアを復活させる事を決定。どうせみんな悪乗りだろうとこの時点で自重率０％
　奇しくも投稿を自重する旨を書いてしまっていたため、これ幸いと悪乗りがエスカレート。方々のP．N．をいじくり、小説版『ひぐらしのなく頃に』のテキストをそのまま〝まるまるパロって〟〝フリーのメールアカウントを使って新P．N．で小崎様にファイルを送りつける〟といった暴挙の連続。その節、小崎様には改めて、大変失礼いたしました。
　内容としては、３月号まで合わせて書けば、ひぐらしのなく頃にという作品が伝えてくれたメッセージをそのまま切り取って、解釈した形で書いたものだ。
　冒頭に月姫パロが入ったり、伝説のスーパー氷精が居たりと微妙に他のネタもちりばめたが、基本的には、ひぐらしを読んで共感したメッセージや描かれた内容をそのまま持ってきた。
　ルール無用の残虐ファイトである〝部活〟には、そのまま弾幕ごっこを重ねた。
　この二つ、前者は私たちを縛る不必要な先入観やルールを破壊し、現実の中で戦いを楽しむ枠組み。後者は、ルール無用の戦闘に一定のルールを設け、幻想の戦いを作り出しそれを楽しむ枠組み。
　正反対の様に見えるアプローチから、実は目指す所が同じである事に気づけるだろうか。
　これは、ひぐらしと東方、両作品の重要なメッセージである事は既に述べていると思う。
　そんな刺激と彩りに満ちた世界で、何故か新参者に設定されたリグルは、日々を充実した楽しい物だと感じるようになっていく。そして、幻想郷で生の中の色々な感覚に気付き、学んで、この世界に馴染んでいく。
　ところで、なにげに前半の魅音なミスティアが、個人的に超絶ハマり役で、レナルーミアと共に書いていてにやにやしてしまったきもちわるい。
　ああいうちょっとおっちょこちょいだけど姐御肌な感じのみすちー、超可愛いと思いませんか？
　あと、家の嫁の梨花ちゃま的な立ち位置のキャラクターは登場させなかった。単に本編有意に関わる場面が無いからだが、梨花ちゃまって東方封魔録の里香のパロディだった事に、東方に深入りしてから気がついた。全然無名の時点で、超マイナーな東方キャラをパロってくるあたり、竜騎士０７氏の東方へのディープな思い入れが窺えますねぇ。
　うーむ、撃ったら動く人とか言われても、当時は全然わかんなかった物だ……人は変わります（笑）。やっぱり過去の自分はかなり他人だ。

　書いている本人だけにやにやが止まらない前半と打って変わって、後半は当然、前半も微妙に揺れ動いていた物語が一気に反転し、狂気と絶望の世界へと突き落とされていく。
　前述の物語の反転を、ここで行う。ここからは裏の世界だ。

主人公が狂気に落ちていく際、先述したが、読者を一緒に狂気に引きずりこむには、序盤の正常なパートでの感情移入、先に服を掴んでおく事が必要だ。

ヴィジュアルが無い分、主人公の感覚をよりリアルに描こうと色々原作に加筆を繰り返す。そうする間に、その原文の濃厚さを改めて思い知らされた。一文一文に気持ちが、情景が、体温があるかのようなインパクトのある文は、やはり凄い。

それに負けない様、また、それを踏襲して、とにかくこれまでも大切にして来た感覚の描写をより意識して書いた。

何とか原作を知らない方でも楽しんで頂けるよう努力したつもりだが、いかがだったでしょうか？

こうして狂気に囚われたまま、物語は取り返しのつかない方向へとどんどん転がり落ちていく。

焦燥感、無力感、絶望感。後半は、そう言ったどす黒い負の感情をリアルに描く事に注力した。

これまで、私は2作では結局優しい正の感情を描いた。2作目では劣等感の様な物を描いたつもりだが、その後には救いがあった。

思うのだが、人はどんなときに差し伸べられる手を求めるだろう。

孤独感や絶望感、怒りや憎悪や悲しみといった、負の感情に囚われ、苛まれるときではないか。

それが、どうしても否定できない現実のリアルな感覚なら、一盛りいくらで売っているような欺瞞的な平和や博愛を与えるより、同じ感覚をリアルに描いた物語にこそ救いがあるのではないか。

価値がある物語って何だ？　誰かを救える物語って何だ？

いわゆるコッチ側の物語、なんだか円満解決がお約束となっている感さえある。

そこに、敢えてアンハッピーというか、絶望しかないぐらいのラストをぶつける事は私の1つの夢だったりする。

三つ目の私の物語の前提は、常識から離れること。二つ目の、成長とよく似ている。というか、兄弟みたいなものだ。

成長や気付きとは、即ち新しい物を発見してこれまでの常識から離れる事。要は、世間で多くの人が信じている（を思われる）価値観に対して、何か違う事を提示する事である。

当たり前のことを当たり前に書いても、得られる物は無い。誰にでもわかり易い内容を上手く書くのは、売れなきゃいけないプロの作家さんの仕事。

そんな事は到底できない私が、同じ事をやっても劣化するだけで何の意味もない。

ならば、素人が物語を書く意味を何処で得ていくか。

私が見出した答えは、あたりまえの価値観から離れたテーマを提示する事。

今回のようなコンセプトにしても、込めるメッセージにしてもそうだ。いわゆる常識では、声高に理想が語られ、それをそうだと多くの人が信じ込まされている。だが、それには往々にして欠陥があったり、現実とかい離した論理が含まれる。

例えば、一昔前（今も言われているのか）口を開けば人類みな平等だと言われた。なわけねーだろと言う話である。

挙句、うちの地元の隣町の小学校では、運動会の徒競走でランナーを速さ別に平均的にチーム分けをして、アンカーは並んでゴールするよう指導したと来ている。

平等というのは極めて残酷な概念だと私は思う。

個人的にはナチズムやファシズムに近い思想だと思っている。

この思想は、平等な人間の集団を作り上げるために、そこに所属するすべての個の人間を処刑している。

リアルな一人の人間自身は、そこに存在を許されていない。

平等信者の殆ども、薄うす気が付いているはずだ。平等という思想の矛盾と欠陥と限界に。ただ、感情的になってしまってそれを認められないだけ。人間は、実に感情的である。

私たちは、自分が信じてきた、好きだった

価値観を簡単には否定できない。
　創作者は道楽者というわけでは決してない。創作者の社会的役割の一つは、この常識の打破だと思う。
　それが自分が信じている事なら、性善説に性悪説を叩きつけるのも全然平気。むしろ積極的にやる。
　勿論、あたりまえから離れる事は、自分の信じている事を口にした結果であって、前提ではない。前提は、それが本当に自分が思っている事であること。それが、どんなに醜く、または辛辣で、生々しく、残酷な事だとしても、本当に思っている事なら、それを書けばいい。
　私たちは、素人であるが故にそれが許されていると思う。素人の武器は、人を傷つけられることとなんじゃないかと思うのだ。
　そう、常識とはまさに「何が何でも人を傷つけてはいけない」と声高に謳っているではないか。
　そんな、私の知る限り2000年ごろからずるずる続いてるハッピーエンド至上主義。
　それも、始めっから最後まで既定路線のピースフルハッピーエンド。
　孤独や哀しみを意地でも真実と認めたがらない風潮。
　実際、業界の風潮自体がそうなもんだから、抗いたくても抗えない立場という物もあると思う。
　だから、一底辺二次創作者である立場を最大限悪用……もとい活用してやる。今私が居る、どーでもいい人間という立場。
　逆に考えるんだ。特に大事にする必要もないステータスとは実は、誤解や批判を恐れず自分の言いたい事を言えるすんばらすぃー立場だと考えるんだ。
　だから、そんな風潮に一石投じたかった。あんたたちは本当にそう思っているんですかと。
　ふざけるなと。そんな逃避と欺瞞のための茶番劇に嫌気がさしてこの話を書いた。
ただ、一言言いたかった。
　隠さず書いてくれ、あなた達が本当に思っている事を。
　例えば、2月に書いた事の1つは、人の理解力や理性の危うさ。
　私たちの多くは、人間には理性と知性があり、それを活用すれば物事の多くを解決できると信じていることだろう。
　とりあえず、そんな常識に立ち向かう事にした。
　後に、リグルの狂気には理由づけがされ、許しが与えられた様に見えるだろう。だが、著者や読者は別に狂ってなどいない。
　実際、誤解をしない人間なんているだろうか。
　感情的にならない人間なんているだろうか。
　自分を見ても、他人を見ても、人間が正しく事物を理解して、理屈にしたがって合理的に動いている部分なんて、どれほどあるだろう。
　当然人にもよるが、多くの場合、何らかの拍子に人間は簡単に誤解してしまう。
　感情は、簡単に理性を吹き飛ばしてしまう。
　冷静になれ、冷静になれ、クールになれ。何百年も繰り返してきた戒めだが、それは多分不可能なのだ。
　ここに、常識的に信じられている理想と、現実のかい離が存在すると私は思う。
　だから、人間の理解力と理性が、絶対的な依りどころと信じられている世界に向かって主張した。人間は、誤解をし続ける感情的な生き物であると。今回の話を読んで、そのあたりのメッセージを、何となく感じていただけたらと思う。
　そういうわけで、3月号では後日談
　2月はわけのわからんうちに終わって尻切れなので、ラストを書いて補足し、物語を完結させる必要があった。そこで、先月書いた話の説明と解釈を行った。
　最後の話で書いたのは、許すことだ。先月、人間は間違いをおかすものである事を書いた。今回なら、リグルは、誤解から不信と恐怖に支配され感情をコントロールできず最も大切な物を信じる事が出来なかった。そして、取り返しのつかない過ちをおかした。

そんな自分を、彼女は許せなかった。

あなたは今、自分の思っている事をぜんぶ、口に出して人に言えますか？

独りでいる時と何も変わらない自分で、人前でも振る舞えますか？

他人に見せられない自分を、持っていませんか？

私たちは、他人に見せられない一面を持っている。つまり、認めたくない自分、恥ずかしい自分を持っている物です。

そして、それらと自分の理想とする聖人君子の様な立派な人間像とのギャップに葛藤する。

何か、そう言う人間の汚さや恥ずかしさ、裏の部分に対して、今の世間は度を越えて不寛容になっている気がする。

自分を見れば、本当はわかるはず。

人間には、裏表が有る。

そして、それは互いにどちらが否定される物でも無い。両立しうる。

というか、常に一個の人間の内部が相矛盾しながら存在している事こそ自然なのだと思う。

普段優しく人当たりのいい人物が、陰湿で卑怯な一面を持つ。

怒りっぽく短気で粗暴な人間が、ふとした優しさや親切心を見せる。

なにも、おかしなことじゃ無い。人間は矛盾と移ろいを内包する不安定な存在である。終始一貫なんてしない。「意外な一面」こそが人間の本質なのだ。

これをおかしいと思う事こそ、先に述べた人間を論理的に理解しようとする現実とかい離した信仰による弊害だ。

結局、自分も他人も、お互いを論理的に理解しなくてはならないと思い、理解できなくてはならないと思い過ぎることが、世界を窮屈にしている気がする。

人間の、裏の部分の存在を許さない。ちょっとでもきたない部分、他人と違う部分があれば、必要以上に恐怖におびえ、半ば強迫的に悪を弾劾する。

それが一概にいかんというわけではないが、そんな風潮が、人間の隠している部分、裏の部分、負の部分と付き合う訓練の機会を、人からどんどん奪っていると思う。

悪い事は悪い。確かにそうだが、それを突き詰め果てはどんな世界だろう。

誰一人自分としての身動きが取れなくなる。これまた平等思想と同じく、現実の一個人からかい離した「一般的な」人間を捏造し、集団の中でそれを演じる事を強要しているのだ。

ルーミア達は、そんな自分で自分を許せないリグルの過ちを許す。それは、物語の都合上リグルに与えられた言い訳故でない事、は理解していただけると思う。

罪は絶対に消えない。消えない罪は許してもらう以外に解決の方法が無いのだ。自分が許しても他人が許さなければ、他人が許しても自分が許さなければ、罪は永遠に主を苛み続ける。

陳腐な表現になるが、読者には、ルーミア達はとても優しいと思われた事だと思う。リグルの持つ、汚さや弱さや脆さ、罪を許したから。

では、優しさとは何か。傷ついた人や、疲れ切った人に与えられる安らぎか救いか何か。では、それって何だろうか。

愛や平和や優しさや許しという、言葉だろうか。それらを型どおりに歌ったお目出度いなんちゃってポップスか、映画やドラマだろうか。

私にはむしろ、中身の無い抽象論で耳に優しい言葉を狂信的に歌うそれらが、憎しみや悲しみや怒りを頭ごなしに否定している様に聞こえてならない。私には、それが何より残酷に見えるのだ。

本当に優しさは、弱さを否定しない事だと思う。

それは、門外の他人の場当たりな激励や、虚構への現実逃避でもなければ、決して慣れ合いや自堕落でも無い。

ナアナアマアマアの慣れ合いや自堕落もまた、弱さが弱さであること自体を否定する、残酷な行為だと思う。弱さの消極的な否定だ。

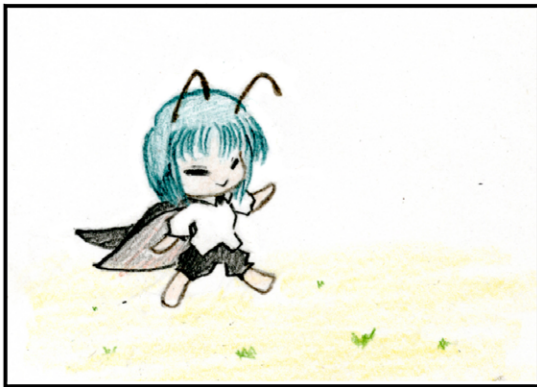
他人の弱さや脆さや汚さを認める事が優しさなら、それは何なのだろうか。
　私は、他人に眉をひそめられる様な、自分の汚さや弱さこそ、優しさたりえるんじゃないだろうかと思う。それこそ、私たちに与えられた、本当に他人の裏の部分を受け入れる余地。共感という能力なのではないかと。
　だから、話を書くとき、自分の弱さや脆さや汚さその物をぶつけてやろうかと思ったのがこの話だった。結果、前2作で描いてきた、人間の裏面、無限に続く孤独をもう少し踏み込んで描き、それを改めて肯定する物語になった様だ。
　それでも、最後は希望が持てる終わり方だった？え？何を仰る蛍さん（笑）

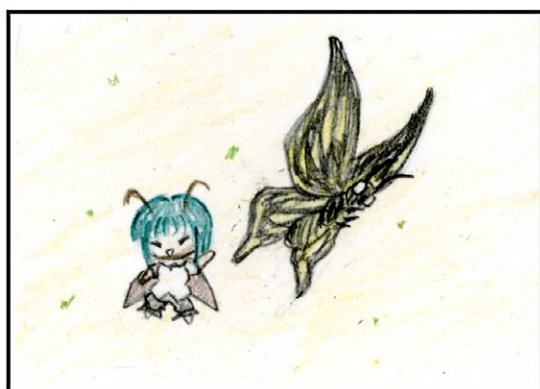
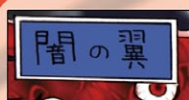
　さて、長らく書いたが、私たちは私たち自身で居る事が一番シンプルな願いなんだろう。だれでも、自分自身でいられる時間や空間が有るとしたら、それが一番楽しくて落ち着くんじゃないだろうか。だとしたら、そこから遠ざかれば遠ざかるほど、楽しくなくなる。そして、自分にとっても、他人にとっても、魅力がそがれていく。
　私はいつも、自分自身の考えや想い、感情をそのままテーマにして作品を書いている。
　自分という人間を表現すれば、勝手に裏表が表現されて物語の反転が起こる。
　自分の経験してきた事をそのまま書けば、それはそのまま成長と常識の打破になるだろう。
　物語の構成として、起伏や反転、発見や成長は、面白く印象的に内容を伝えるために技術的にも最も基本的な事だと思う。（何せ物の書き方なぞ習った事が無いので。）だが自分としては、それはもっと自然に物語の中に浮かび上がる物だと考えている。

　私が物語を書く前提を全部合わせて、もう一個それを纏めるような前提を加えるとしたら、それは純粋である事。言い訳できない、自分自身という人間その物を描き出すことだろう。それは、責任と覚悟、即ちリスクと恐怖を伴う行為だ。だが、それなくして得られる物や、与えられる物って何かあるだろうか。人間相手に物語を書く以上、自分という人間を捨てて得られる物語の価値なんて、私は無いと思っている。自分の身を削らないで、なんで面白い話が書けるのか。逆に聴きたい。メッセージのある作品を書くにあたって、それを恐れてしまう事が一番いけない。少しでもごまかしが入ると、途端にメッセージは胡散臭くなってしまう。魅力的でなくなってしまうのだ

　常識をそのまま書いただけのハッピーエンドの物語は、人間を無差別に仲間扱いし、1つの集団という鍋の中にごったに溶かしてしまっているだけに過ぎないと思う。
　即ち無感情で、刺激的でない。私たちが生でふれあう自分やその他の、個の人間がそこには存在していない。
　結局、常識を打破する物語を描くには、欺瞞的な平等思想と妄想的かつ現実離れした和解と仲間意識を肯定する理性優位主義に真っ向から対立し、混沌とした内面を認めて孤立と孤独を肯定する事が必要になってきた。
　逃げてちゃ始まらない。世界は調和しない。
　まず、自己の孤立を認めること。それが、他者の存在を認める事の前提条件だ。その孤立と戦う事。絶対的に異なる他者と理解し合う戦いが、やっとそこから始まるのだ。
　今こうして自分の作品を読み返すと、拙くしょっぱい部分も多々あり、過去の失敗から学ぶ所も多い。と、同時に、当時の自分との共感や、思い出させられる事もある。やはり、読みなおした自分が何かを感じられるかどうか。
　それを意識して、物語という物は書くのがいいのかもしれないと思う。自分は誰より身近な読み手。その自分に、面白いと、感じる所があると思ってもらえなくては、何にもなるまい。
　物語とはフィクション、即ち夢だ。だからこそ、私たちが現実の世界で履行できないリアルを、現実よりもリアリティーをもって形にできる。
　時に現実こそ虚構で、夢の方が現実よりリアルな事がある。夢は、現実で虚構に隠され

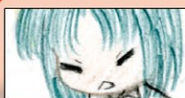
た私たちのリアルを再現してくれる。そういう意味では、夢オチも、案外悪くない。
　現実の中で幻想に縛られてる人間が、幻想にリアルを彫刻し、虚構に立ち向かう力。
　それが、不器用な私の思う、私の書く物語なのだ。

2010/04/15　Jade.

Reborn

Jade.

蟲の手帖

HOUSE

p72～p74

4/13から一週間の沖縄(石垣島)旅行へ行ってきます。
せっかくだからリグルにも旅行気分のお裾分け…
…のはずが安眠を破壊する者の玩具になっただけでした

月刊Nightbug一周年に寄せて～夢の中の物語、Reborn

Jade.

p97～p115

世界は調和しない。私たちは独り。だからこの肌で、自分じゃない誰かのぬくもりを感じられる。喜びあい、傷付け合いながら、私たちは崩れ、また生まれ、この世界で生きていく。

リグルともこたん

ぼこ

p75～p77

なんだか百合になってしまいましたw
そして月刊ナイトバグ1周年おめでとうございます！

本当に夢見たStrawberry Crisis!!

Salka

p119

作者(左中段)が実際に見た「教授に苺ジャムチャーハンを食わされる夢」をリグル達で再現。後日実際に作ったら滅茶苦茶不味かった…　※良い子は絶対に真似しないで下さい

ほたりぐる～はっ！夢か。編～

怒羅悪

p78～p79

地味に一年間居続けました、どらおです。
一周年おめでとうございます。
さらなるリグルの活躍に期待しましょう！
では、今回も失礼しましたー。

表紙

小崎

今のはメラではない。メラゾーマだ。
……………………………………………………………
…メラゾーマなんだよう。

リグルきせかえ

貴キ

p80～p82

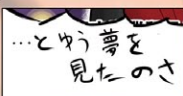
１周年おめでとうございます！リグル可愛いよリグルで1年間あっという間でしたがこれからもリグルの為に頑張りますリグル可愛いよリグル。

締め切りの10日前だと思ったら夢オチだった漫画

くらげん

p94～p96

すみませんでした……。創刊1周年おめでとうございます。

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

リグルオンリーイベント開催決定！？
東

p2

リグルオンリーイベント開催！…とゆう夢を見たのさ。いいじゃない、夢を見たって！あ、もしリアルに開催されたら絶対参加するんで＾p＾

変身
mimidori

p45～p46

カフカ先生ごめんなさい。

無題
言示弄

p4～p5

やったぁ！　月バグ用の原稿が終わったぞ！　目を瞑り、伸びをする。　しかし再び眼を開けた時、キャンバスはホワイト一色。　「！！？　はっ！夢か。」そんな感じでした。　作業中やたら読み込みに時間がかかると思ったら、B4サイズの600dpiで描いてました。　アホス。。

風見フラワーロード
イリイチ

p47～p54

はじめまして。拙い作品ですが楽しんでいただければ幸いです。リグルの腰からびろーんって出ているのはサスペンダーだったりします。どうぞよろしくお願いびろろろーん。

こどもの日だからあれを食べよう
preudenano

p28

ある日さくらもちを食べていたところ、すごくかしわもちが食べたくなったのでこの漫画を描きました。今度はくさもちが食べたいです。。

宵月の幻
斑

p55～p58

「江戸っ子は五月の鯉の吹き流し、口先ばかりで腹わたは無し」なんて言う川柳があります。口は悪いが悪気など全くなく、単純で淡白な気質を表した言葉です。リグルは……口先も無いから、そのまま延々と風に流されて行きそうですね。でもそこが魅力。

フラスターエスエープ
Step

p29～p34

今回はちょっと以前描いた作品を引っ張り出したので、微妙に絵柄が違うかも。あと崇敬祭に参加します、お暇でしたら覗いて見てください

これはひどい
キッカ

p59～p60

まさしくこれはひどい。オチてないのがオチ。苦しい。

我らエリザベス朝の妖怪
羅外

p35

一周年おめでとうございます！ 最近忙しくなってきたので、次回からはモノクロ漫画になるかもです。

リグると！
ひどぅん

p61

世界樹３はプリンス：リグル、ファランクス：ルーミア、モンク：橙、パイレーツ：チルノ、ゾディアック：みすちーでプレイ中

月刊ナイトバグ　2010年5月号

2010年4月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

一周年ということで色々考えていたのですが全部間に合いませんでした。
ごめんなさい。
べっ、別に言い訳のために夢オチ特集にしたわけじゃないんだからねっ！

というわけで今月ももう寝ます。また会おう明智君。

……あー……、ん、なんか、香ばしくて甘ったるい匂いが一……

2010 / 4/ 22　小崎

次号6月号は5月22日（土）発行予定！

※次号の投稿締切は5月15日(土)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

Meshi-agare!!
Sigh…
SaIka
!
ゆ、夢か…、
㊗月刊ナイトバグ
1周年!!
Next Dream…

月刊NIGHTBUG　2010年5月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

夏樹　真
如月翔
壁々
夢宮
ADDA
言示弄
黒ストスキー
残虐非道の貴公子
歩瀬紅子
preudenano
Step
羅外
くろと
社　蛍夜
西遊
草加あおい
悠奈
gagrim
Salka
蛍光流動
秋水
草葉
東
豆板醤
Jade
mimidori
貴キ
HOUSE
イリイチ
キッカ
くらげん

ひどぅん
ぼこ
怒羅悪
斑
小崎